
新潟県民のみなさんへ

<資料>



2018年3月

(福島第一原子力発電所事故による避難生活に関するテーマ別調査)

この資料の活用について

「あなたにはわからないだろうなあ。」
その人は、わたしの目を見て言いました。

わたしは、その通りだと思いました。

福島第一原発ができる前から、立地のための調査員として携わり、
原発ができて、さびれた町が潤っていく様子を見てきた。
しかし、原発事故で自宅に戻れなくなり、親戚も自ら命を絶った。

どんな言葉をかけていいかもわかりませんでした。

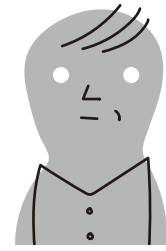
経験した人にしかわからない痛みがあります。

しかし、その痛みを少しでも分かちあわなければ、
今後をよりよくしていくことにつながりません。

この調査では、
福島第一原発事故を経験した42名の方々にお話をうかがいました。
新潟県のためならと、たくさんの言葉を残していただきました。

その中のほんの一部ではありますが、42名の方々が、
暮らしを取り戻していく中でどのようなことに直面されたかについて、
まずは知ることからはじめるために、役立てていただければ幸いです。

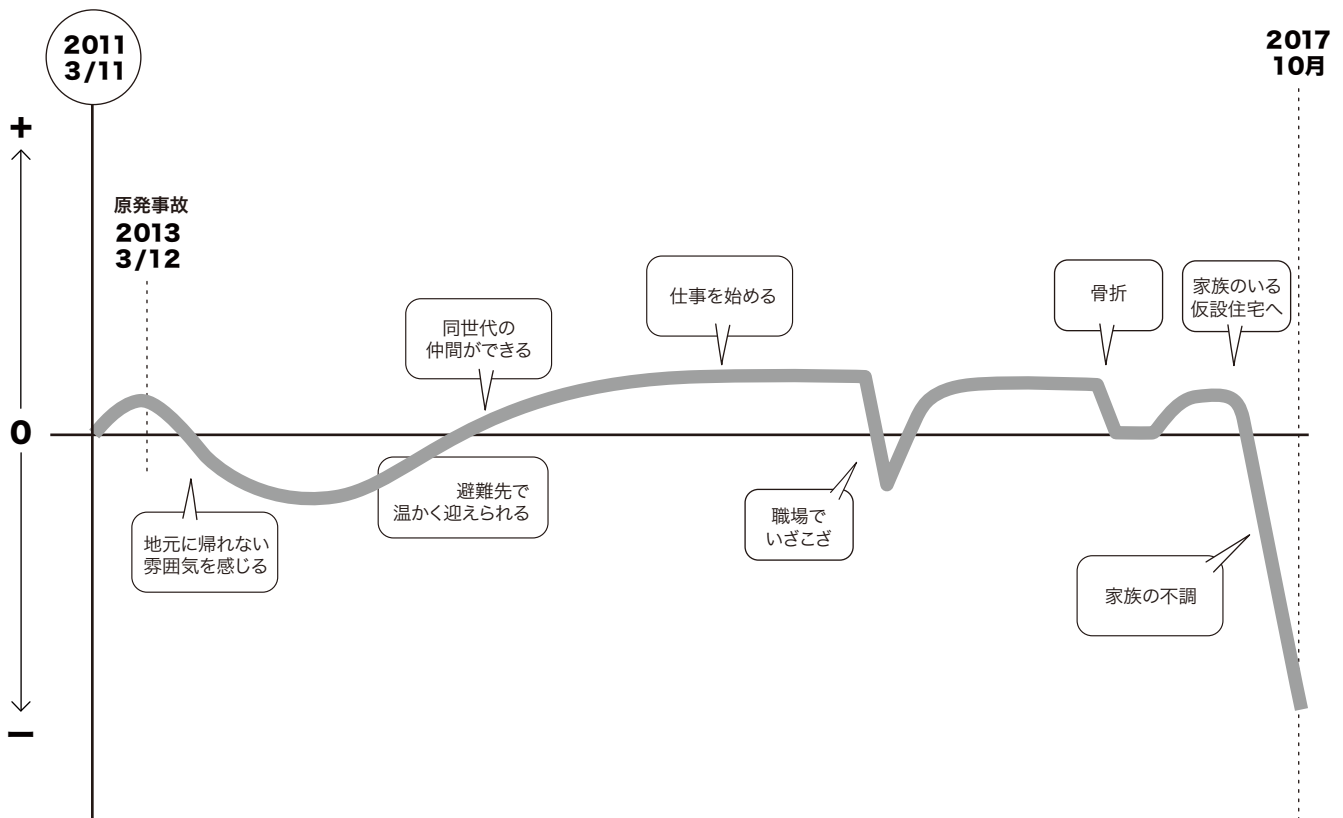
調査チーム代表 獨協医科大学 小正裕佳子



浜通りの市町村在住 50代 男性

戻りたい気持ちがあっても、厳しいと思う。
知らない土地でもいいから、
安心して生活できるところで暮らしたい。

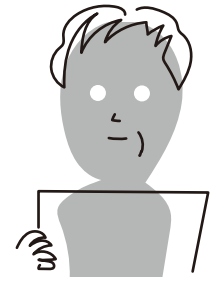
両親のいる浜通りの家で暮らしはじめた1年半後に被災。兄は、震災前は普通に仕事をしていましたが、震災後に甲信越地方に避難して精神的に不安定になり、人と話さなくなった。その後、両親と兄が浜通りの仮設住宅へ。父が免許証を返上したことをきっかけに、自分が両親の面倒をみようとして、浜通りの仮設住宅へ合流した。現在は仕事をしていないが、家族で落ち着ける先が見つければ、いち早く仕事を探したいと考えている。



<気持ちの変化と理由>

地震直後は、すぐに戻れると思ったから気持ちは暗くなかった。しかし、原発事故が発生して放射線のことを全く分からないまま避難所へ行き、食糧不足や帰れない雰囲気を感じて落ち込み始めた。バスで甲信越地方へ集団移動したら、現地の方々が温かく迎えてくれてほっとした。

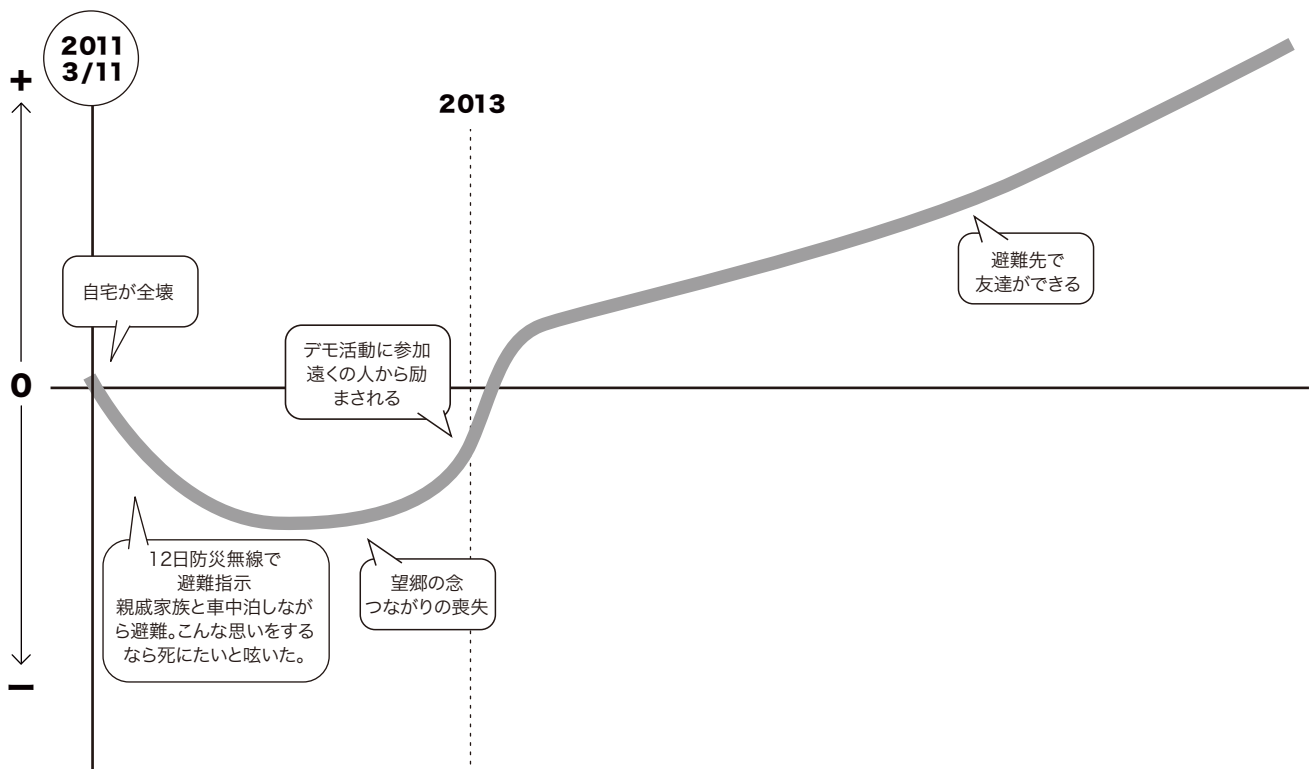
避難先で仲間もでき、仕事を始めた。しばらくして、職場でいざこざがあり落ち込む。その後、気持ちは復活したが、冬場に滑って骨折し動くのが怖くなる。治ってからは、また平穩に暮らしていた。2016年から、浜通りの仮設住宅で家族と合流。しかし、周囲に話せる人がいないため、家族同士の気持ちのぶつかり合いが頻繁に起きるようになり、落ち込み続けている。



関東地方在住 70代 女性

この空は福島にもつながっているんだろうな、と悲しかった。
こんな苦しみは、他の人に味わってほしくない。

自宅は原発から1.2kmにあり、地震で全壊。現在は、関東地方の公営住宅で夫と2人暮らし。震災当時は自宅が崩れ、夫とともに間一髪で逃げ出した。原子力発電所から出て来た職員に「放射能が危ないので早く逃げろ」と言われ、浜通りの親戚の家へ。その後、12日の防災無線で避難指示を聞いて、親戚家族と車中泊しながら避難。こんな思いをするなら死にたいと呟いた。しかし、道中で家に入れてくれる人や、食べ物や服を分けてくれる人がいるなど助けてもらい、感謝の気持ちで泣いた。その後、関東地方の親戚宅で短期的にお世話になり、関東地方の公営住宅に入る手続きができた。

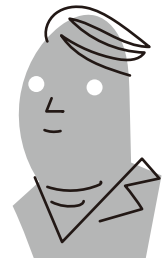


<気持ちの変化と理由>

1年目はずっと気持ちが下がっていた。避難先で夫と喫茶店に行ったとき、地元の奥様方がお茶を飲みながら笑っているのを見て、もう自分にはできないんだ、と思った。でも、子どもにも随分助けられた。2年目ごろから、原発再稼働に反対する活動に参加するなどして、遠くの人たちにも励まされた。現在は、避難先の関東でも友達ができ、カラオケに行くのも楽しみの一つとなった。今のところ、気持ちはうんと上がっている。

いまは幸せなんだと言い聞かせている。不幸だと思うと自分がみじめだと思うから苦しい。以前とは何かが違う。同郷の人の集まりには、若い人は来ないし、同じ地区の人もいないが、それでも福島という言葉でしゃべれるのは気楽で一番だと感じる。

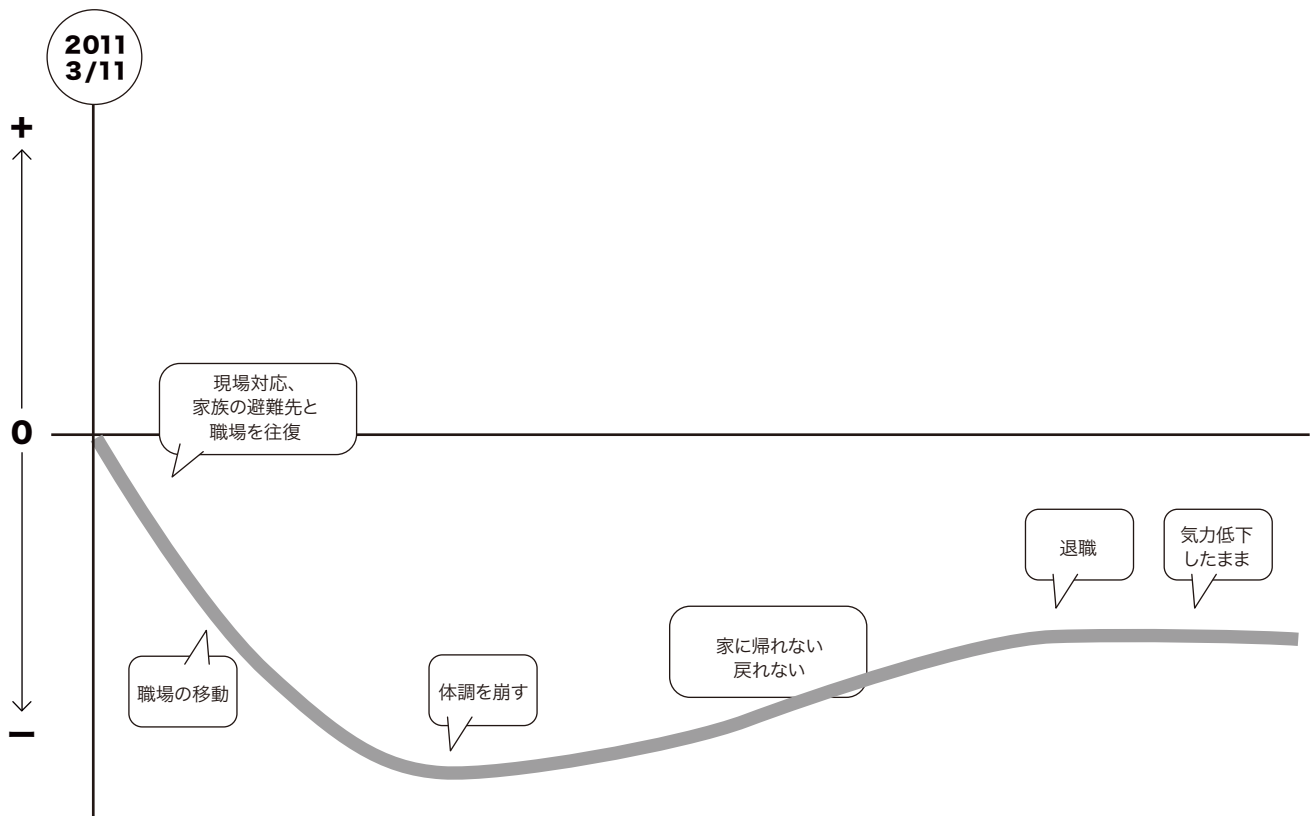
私たち福島県人のようにこんな苦しみ、悲しみを他の人に味わってほしくない。



浜通りの市町村在住 50代 男性

今後に備え、さまざまな改善の提案をしてきた。
いざというときに住んでいる人にいち早く状況を知らせるシステムが必要だと思う。

原発で現場対応にあたりながら、半年ほど家族が避難している場所と福島を往復しながら仕事を続けた。地震直後、津波が来るのは知らず職場に向かった。発電所が水没しているのを見て、そこから現場対応にあたった。家族の避難先を知ったのは一週間ほど後だった。寝ていない、食べていない日が続いていた。被ばく線量が限度に達したため別の場所に異動になった。異動先の職場は慣れているメンバーもいたし生活に不便はなかった。ただ、地元の知人がばらばらになってしまったというダメージは後からきた。



<気持ちの変化と理由>

原発事故後半年ほどで皮膚病になり、病院通いが大変だった。うちに帰れない、元に戻れないこともあるし、仕事も気力がなくなってきて、昨年退職した。病気に関しても、ストレスだとしても証明できないので賠償の対象にはならない。6年半が経過しても、まだ体力が落ちていて、あまり体調はよくない。自分も被災したということは、公には言わないし、これからも言わないかもしれない。同じ境遇にあった人たちも、胸にしまっている段階なのではないか。現場で一番見てきたからこそ、事故を経験して、設備を直そうとか、さまざまな改善の提案もしたが、全てができるわけではない。

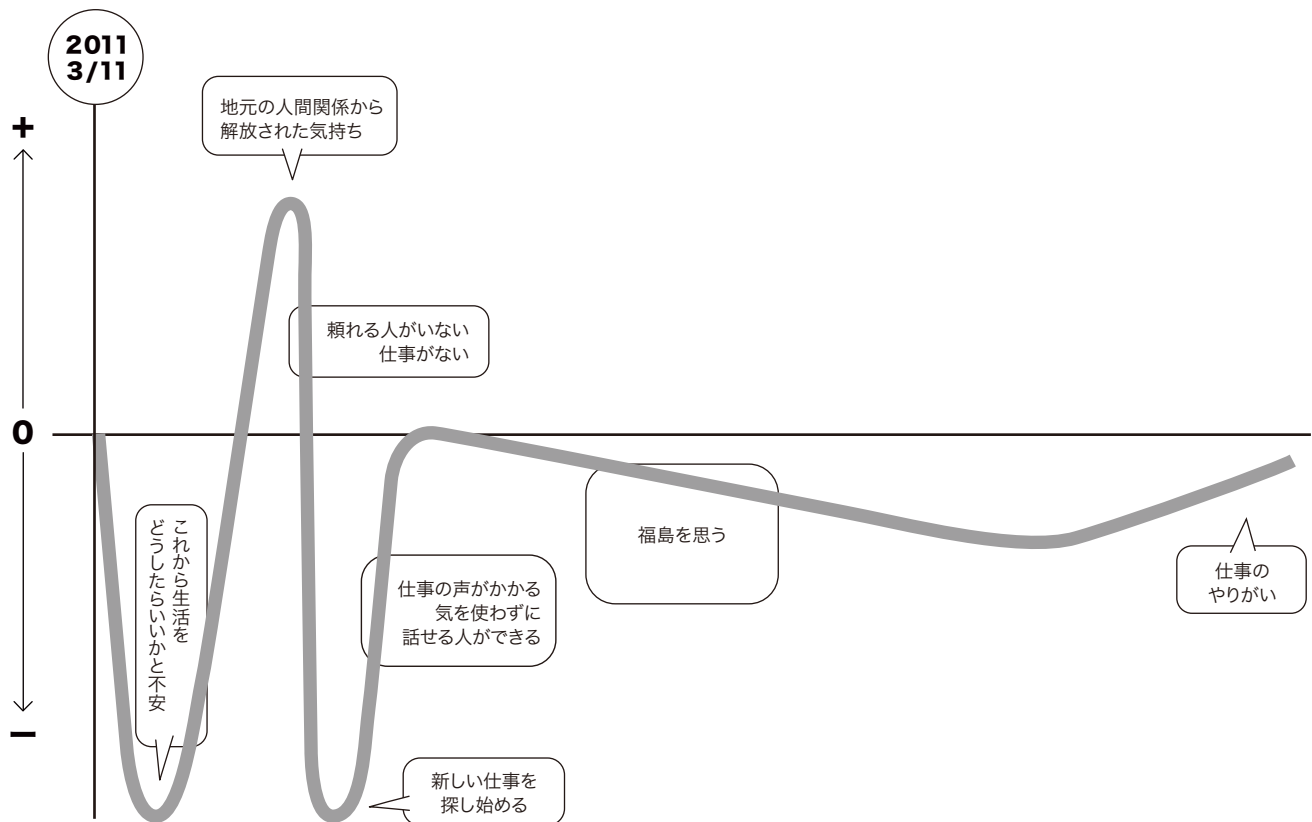


甲信越地方在住 40代 男性

福島にいたらどんな生活をしていたかなと、
今も考えることがある。

でも、新しいつながりも自分から声をかけ、つくっていききたい。

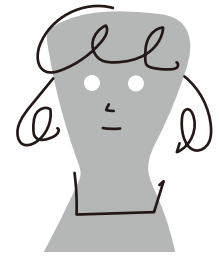
浜通りの市町村から家族で避難。現在は、避難先で新たに家を構え仕事についている。避難した最初の2～3週間は気楽に思ったが、1ヶ月経たないうちに、つながりがない生活で生きていけるのか、誰に頼ればいいのかと不安になった。いろんなことを考え、面白い部分と、悲しい部分と、真っ白な部分とが入り混じってきた。避難先で新しい仕事を探していた頃、一日だけ、朝から晩まで何もせず空を見ていた日がある。今でも、福島にいたらどんな生活をしていたかと考え、ベランダから煙草を吸う風景も思い出す。それがなくなる日が来るのかわからないが、なくなった時に初めて、浜通りの市町村にいた頃の生活に近づくか、または超える瞬間だと思う。



<気持ちの変化と理由>

最初は、生活をどうしたらいいかと不安に思ったのが1番目の底。避難してすぐの頃は、ハードだった仕事から解放され、地元の知り合いにも会わない生活を気楽に感じていた。しかし、頼れる人がいないことに気づき、新しい仕事を探し始め、このままじゃだめだと思ったのが2回目の落ち込み。そこで、避難先の地元の人に出会い、仕事の声をかけられたことや、気を遣わずに話すことができたことで、希望が見えた。ただ、職場が長く続くかわからない仕事のため、モチベーションが下がっていった。最後少し上がっているのは、仕事が面白いと思いついたため。ただ、まだ以前の生活のことを考えたときに、前の自分を越えられていないと感じている。

当時中学生だった子どもは、避難して1週間後に新しい学校で修学旅行だった。行くか悩んだが、参加してとてもよくしてもらい、友達ができ帰ってきた。いまは、子どもを他の場所に動かすことはできないと考えている。近所の人たちとの新しいつながりも、自分から声をかけてつくっていききたい。

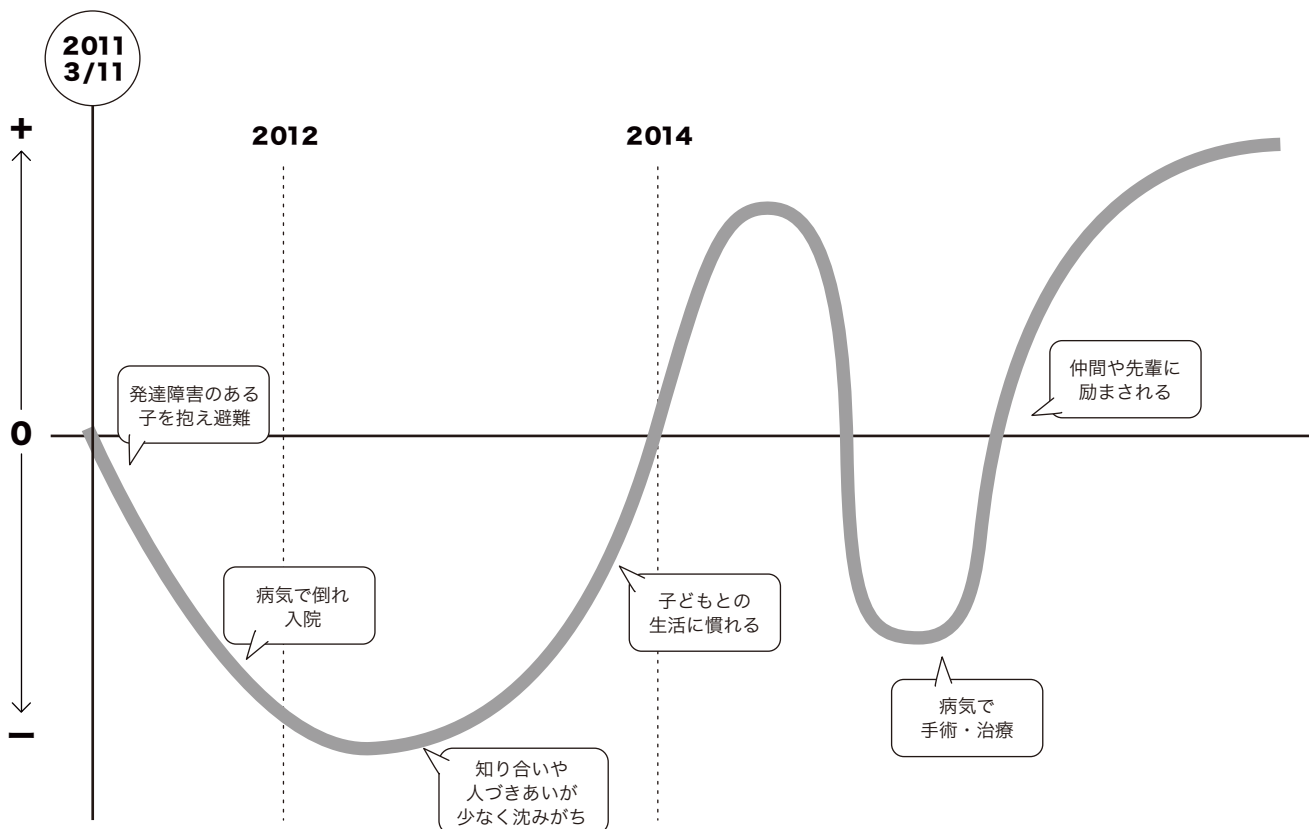


関東地方在住 40代 女性

最初は子どものことで無我夢中だった。
病気もしたけれど、同世代の仲間に励まされ
気持ちが明るくなった。

浜通りから関東地方へ家族で避難。子どもは発達障害があり、幼稚園と療育施設に通っていた。いまは避難先に新しく家を構える予定。

当時、防災無線で今すぐに避難をとという呼びかけを聞いた。夫は職場に戻ろうとしたが、発達障害のある子を抱えて一人で避難するのは難しく、夫も一緒に避難した。しかし避難所がいっぱいでもた別の避難所へ。その後、手配されたバスで関東地方へ避難した。避難所で 1400 人くらいと一緒に過ごしたが、役場に子どものことを話すと理解してくれて、家族一緒にの部屋で生活することができた。3ヶ月ほど経ってアパートを借り、子どもを療育施設に通わせる。ただ子どものためにどうにかしなければと、日々の生活に追われていた。



<気持ちの変化と理由>

最初は無我夢中。2011 年暮れに病気で倒れた。知らないところに来て、顔見知りもおらず、自分の気持ちを発信することもできなかった。2014 年ごろ、子どもとの生活にも慣れ、お母さん達の集まりにも参加して、同世代の人たちに相談できるようになった。その後、病気を患って、治療で落ち込んだが、お母さんたちの集まりのメンバーに病気や介護の経験者がいて、「あなただけじゃない、下を向いていてもしょうがないので楽しくやろう」と言われて前向きになった。気持ちも明るくなり元気をもらっている。

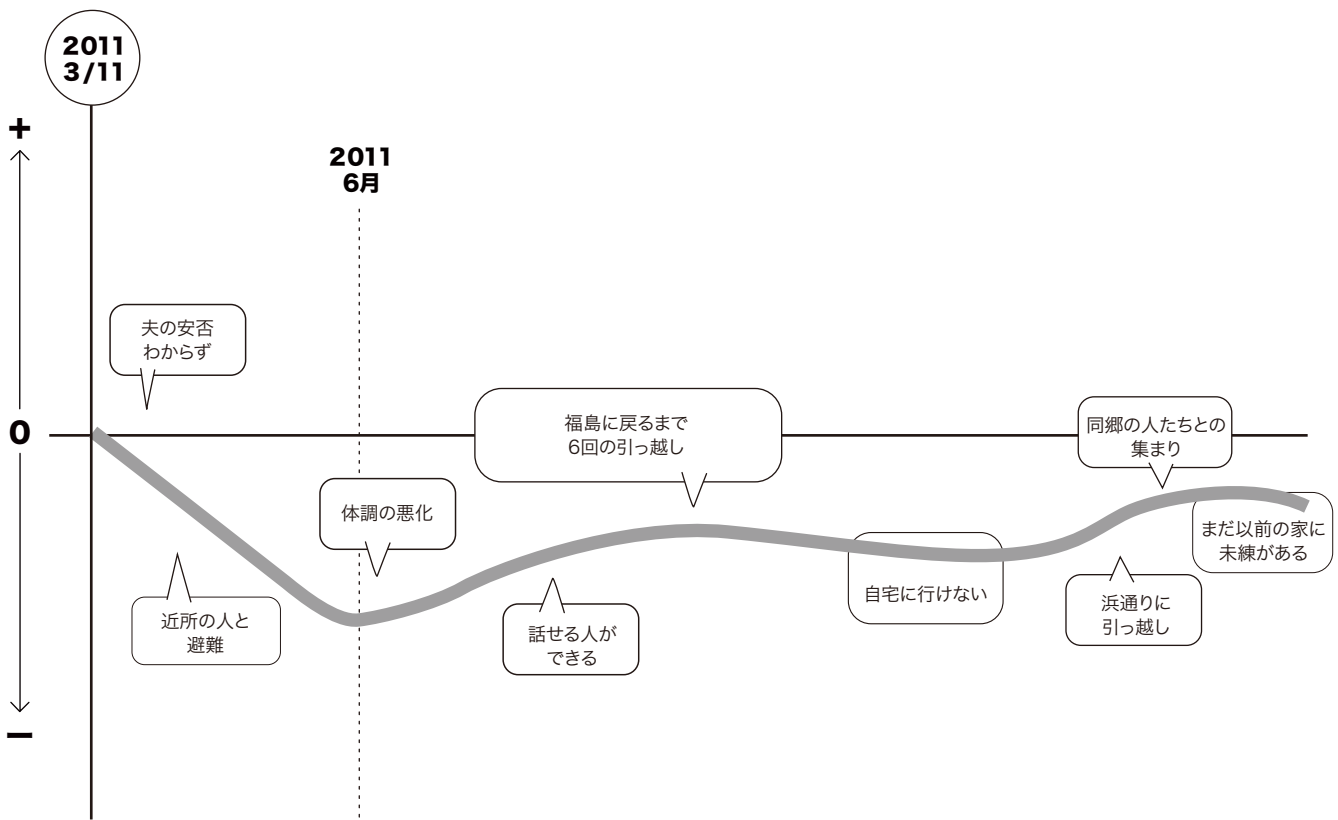
県外避難については、最初は不安が大きかったけれども、身体のことを考えた判断としては良かったと思う。つながりを大事にし、子どものことも理解してくれる人をつくっておくのが、大切だと考えている。



浜通りの市町村在住 60代 女性

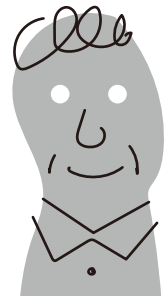
夫が一生懸命働いて建ててくれた家に行くこともできないことを受け入れられなかった。でも、ここまでいろいろな人の助けがあった。

専業主婦。最初に福島県内で避難していた際、近所の病院関係者に「両親をお願いします」と言われて託されていたため、その人たちと甲信越地方へ避難。住まいが決まるまで、ホテルに泊まった。朝起きて窓の下を見たら、地元の子どもたちが登校していて「皆普通に生活をしているのに、なんでここにいるんだろう」と、現実とのギャップを感じた。住まいが決まっても、何も持っていなかったため、布団も、食事を作るものも、ガス台もなかった。住宅の期限があるため転々として、福島に戻るまで6回の引っ越しをした。



<気持ちの変化と理由>

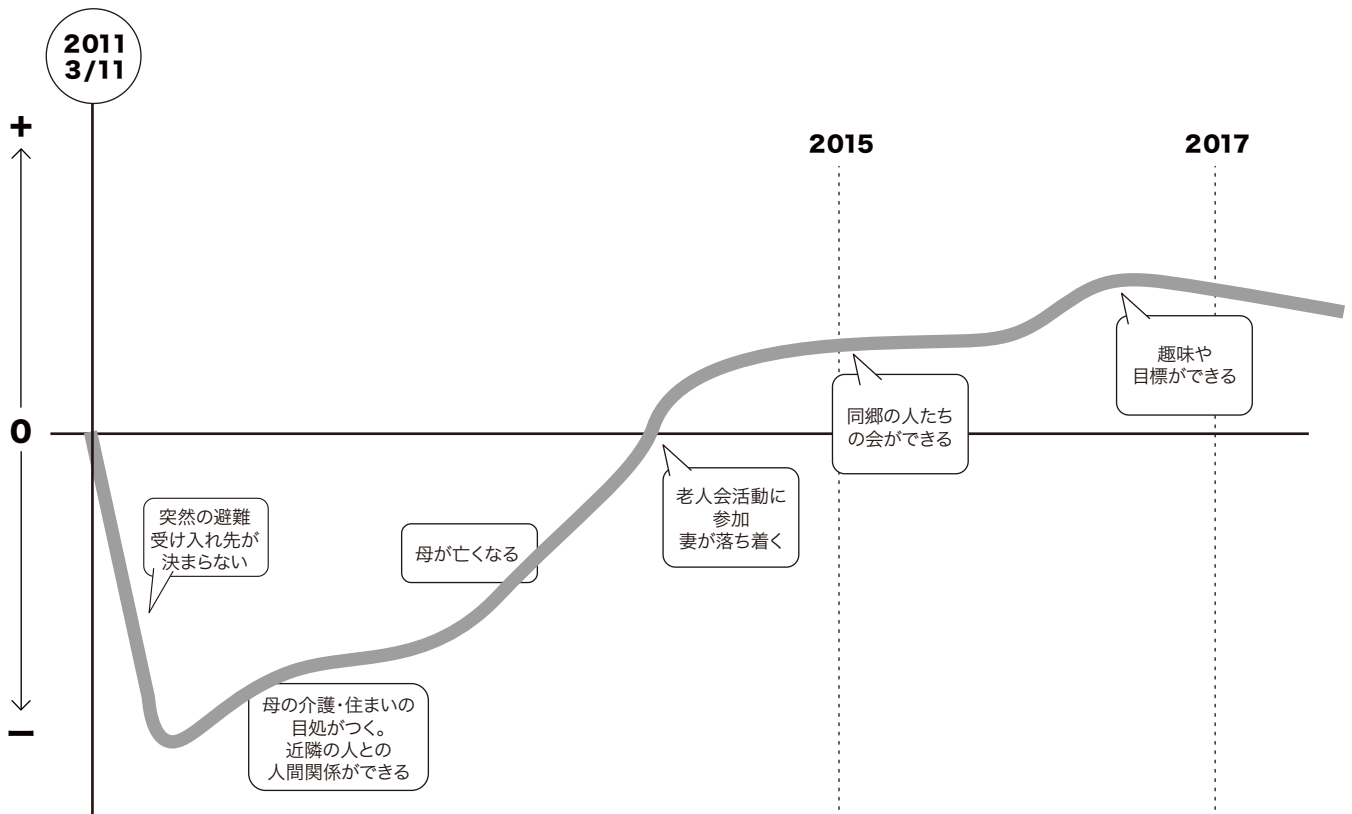
避難当初は、様々なストレスでめまいになり起き上がれなくなった。専業主婦だったので、夫が一生懸命働いて建ててくれた家に行くこともできないことを、受け入れられなかった。知り合いもいなかったが、避難先の支援者や、役所の人たちと顔なじみになり、話せる相手が増えてよくなっていった。近所や周囲に気を遣っていたが、同じ境遇にある人たちと出会い、集まりにも出られるようになった。その後は、浜通りに引っ越し、同郷の人たちが近くにいる、毎月集まったり、ご飯食べに行ったりできるようになった。ただ、まだ以前の家には未練がある。



関東地方在住 70代 男性

いつか、孫子の世代になった時に人が戻ってほしい。
それには、放射線量や原発の状況などについて全ての
情報を住民に公開してほしい。

浜通りの市町村から避難。現在は、関東に自宅を購入して住んでいる。地元では、自主防災組織を立ち上げたり、民生委員をしていたため、震災当時の安否確認、避難後も地域の人に連絡をしたり家を訪問したりしていた。震災前から寝たきりの母を抱えての避難。飼い犬は連れて行けなかった。一度、中通りの病院に母が入院し、その後、娘のいる関東地方の公営住宅へ。母の介護の手続きで苦勞し、介護のために住民票を移した。



<気持ちの変化と理由>

当初は、何が何だかわからず、介護の必要な母の受け入れ先を探して転々とした。母の介護や住まいの目処がついて、隣近所との人間関係もでき少しずつ落ち着いてきた。母の死去後、ずっと母の世話をしていた妻の心の落ち込みが心配だったのと、自分も知らないところに来て外出しなくなるのが心配だったため、一緒に老人会に入る。その後、友達ができる。

2015年に支援者に出会い、同郷の人と集まる会を結成、仲間が増えた。最近はグランドゴルフを始め、他の目標もできた。自己評価が最も高い状態にならないのは、「目標がなきゃだめでしょ」という思い。

戻りたい気持ちはあるけれども、今の状態では戻れないと思う。地元はまだ、ライフラインも完備されず、仕事もなく田畑も除染されていない。いつか、孫子の世代になった時に人が戻ってほしい。それには、放射線量や原発の状況などについて、全ての情報を住民に公開してほしい。

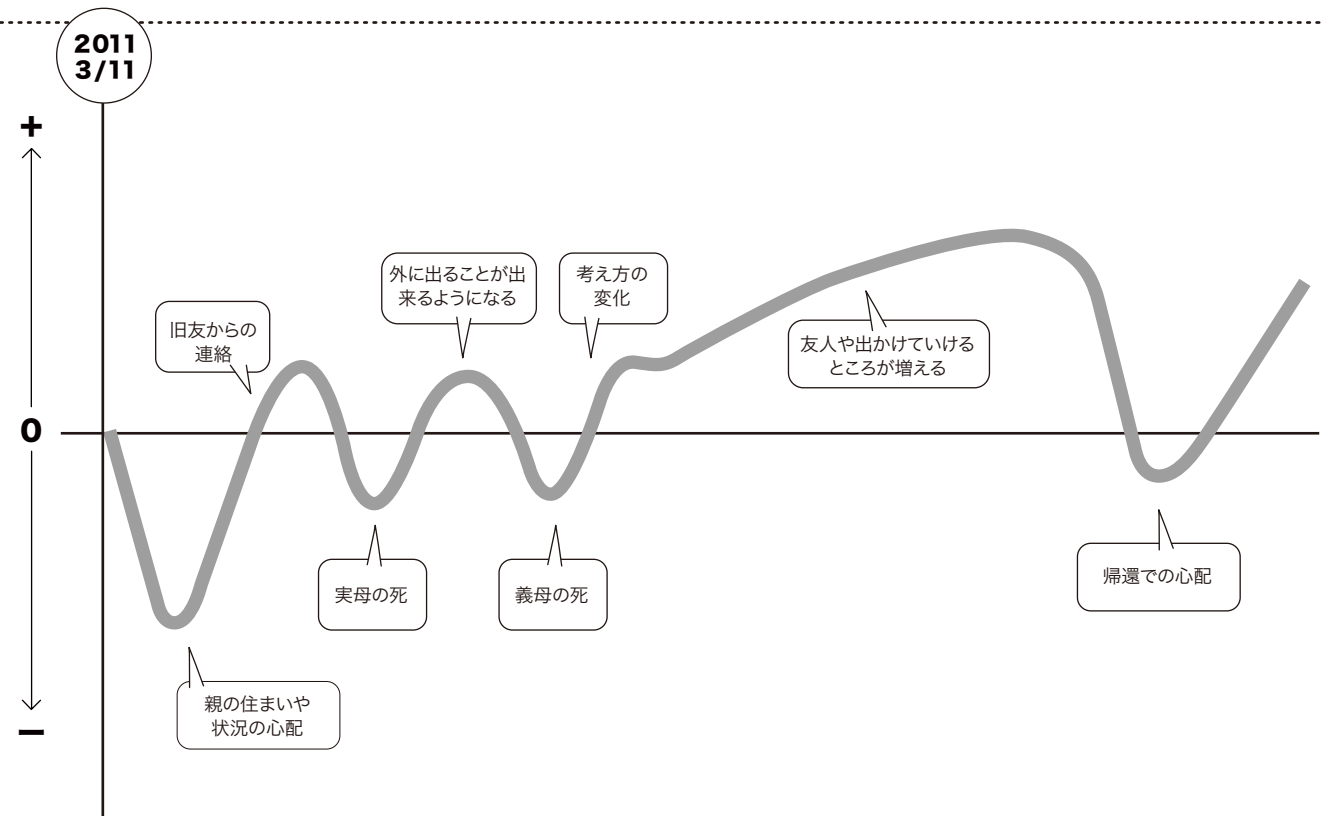


甲信越地方在住 60代 女性

悔やんでも元には戻らないので、そのエネルギーを別のことに向けていきたい。

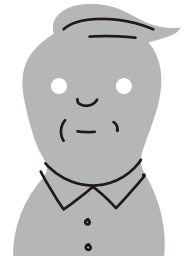
浜通りの市町村から避難し、夫の職場がある甲信越地方で暮らすようになった。実母は介護施設に入っていたが、施設ごと関東、東北地方へ移動し、そこで亡くなった。その後、仮設住宅で夫の母を亡くした。地元は大部分が避難指示解除されたが、自宅はまだ解除されていない地域。時々、掃除をしに行っている。夫の父（80代）は帰還し復興公営住宅に入った。行くのに5時間かかるほど遠く、一人暮らしなので心配だが、地元の知り合いがいるし、本人が帰りたと言った。自分は震災から4年ほどで病気を発症。ストレスがかかっていたと思う。リハビリで歩くようにして、今は元気に過ごしている。

故郷にこだわらず、どこへ行っても元気でいられればいいかなと思っている。震災で、大学時代の友達などから自分を心配する連絡がたくさん来て、物資も持って来てもらい助けられた。心配してもらえて嬉しかった、支えられたという気持ちがある。人のことを恨んだり、起こってしまったことを悔やんでも元には戻らないので、そのエネルギーを別のことに向けていきたい。



<気持ちの変化と理由>

最初は家族のことで気を張って緊張していた。知人も友人も全くいなかった。義両親が仮設住宅に入るまでは住まいのことなどが大変だった。家にこもり気味だったが、実母が亡くなったのをきっかけに、このまま福島の人たちだけでお互いの傷をなめ合うのはいけないと思った。それまでは自分は避難してお世話になっているんだという気持ちが強く、遊び歩くようなこともできなかったが、外に出るようになった。今度、義母が亡くなり、本当に自分のやりたいことをやろうと、楽に考えられるようになった。病気をしたこともあり、残りの人生の時間を考えるともったいないと思うようになり、友達と出かける機会も増えた。いろんな人に助けられて自分があつたんだなと痛感している。人とのかわりが大切だと思う。

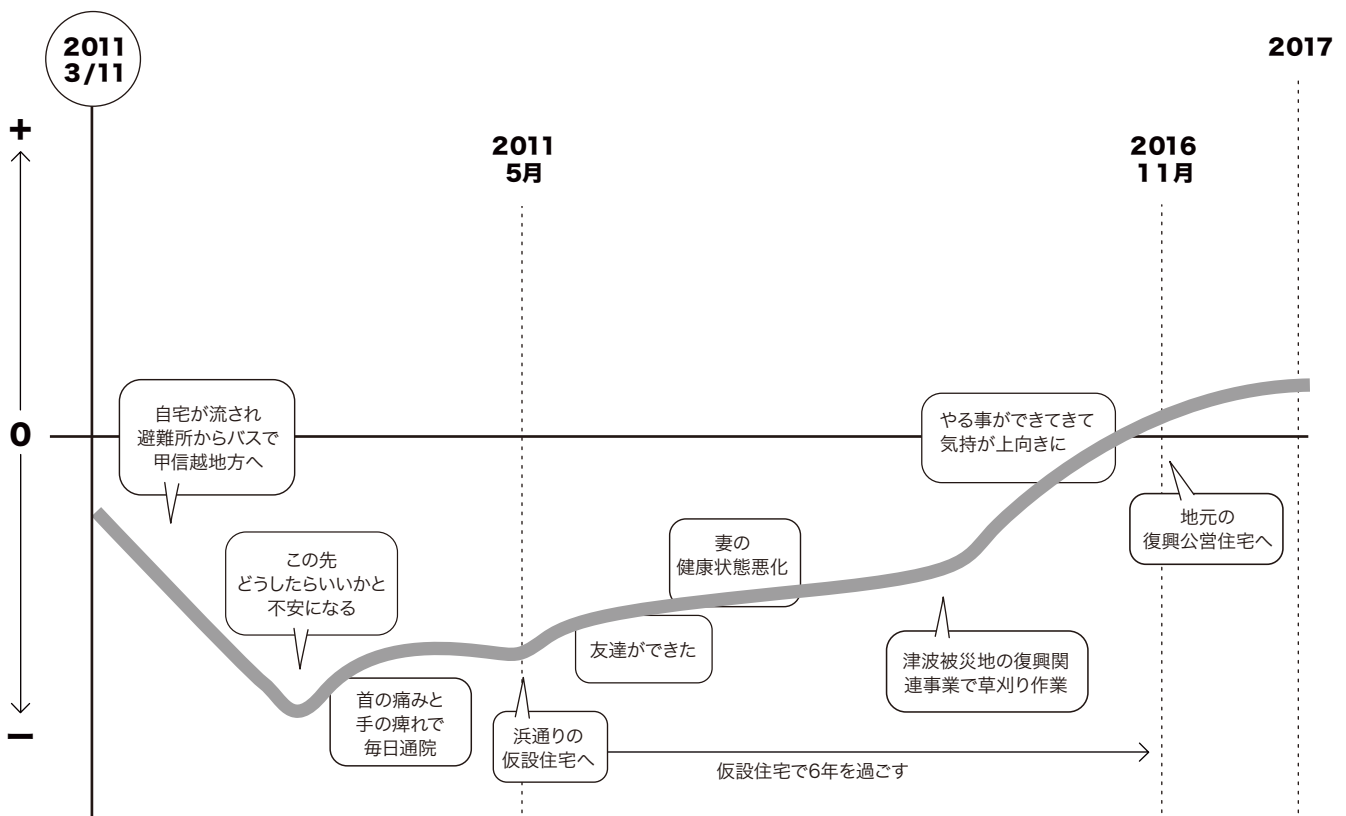


浜通りの市町村在住 70代 男性

地元に戻り、やることができ、気持ちが上向いている。
ただ、妻の身体が心配で、一秒でも早く治ってほしい。

浜通りの市町村生まれ。自宅は津波で流され、近くの山に家族で避難して一晩を過ごした。住んでいた集落は多くの方が亡くなり、行方不明者もいる。2016年まで避難指示区域入っていたが、津波で建物が残っていない場合は、宅地建物の賠償対象外になる。集落には人が戻るめどはたっていない。

自分と妻は、仮設で住宅で5年ほど過ごした後、避難指示が解除された地元の公営住宅へ。以前同居していた息子夫婦は新しく家を設けた。自分の家に同居しているのと違い、息子の家にお世話になるのは遠慮する気持ちがあるため、歩けるうちは現在の復興公営住宅に住もうと考えている。地域の除染も、すべてやることはできず、孫子の代までかかると思う。まだまだ、復興という状態ではない。



<気持ちの変化と理由>

原発事故後、避難所からバスに乗り、どこに行くのかわからず甲信越地方に行った時は、心身に負担もあり落ち込んだ。避難先では首の痛みと手の痺れが出て毎日医者に通っていた。浜通りの仮設住宅に移ると友達もでき、少しよくなったが、こんどは妻の健康状態が悪化し、日常生活に影響が出てきた。毎日やる事がなく、細々と植木などの世話をしていた。津波被災地の復興関連事業で草刈りの作業に従事するようになると、元気になってきた。さらに、自分で作業場を借りて菊作りやメダカの育成などを始めると、日々やる事がたくさんできてどんどん気持ちが上向いてきている。ただ、妻の具合がよくないのが心配。

group
2

旧避難指示区域に帰還

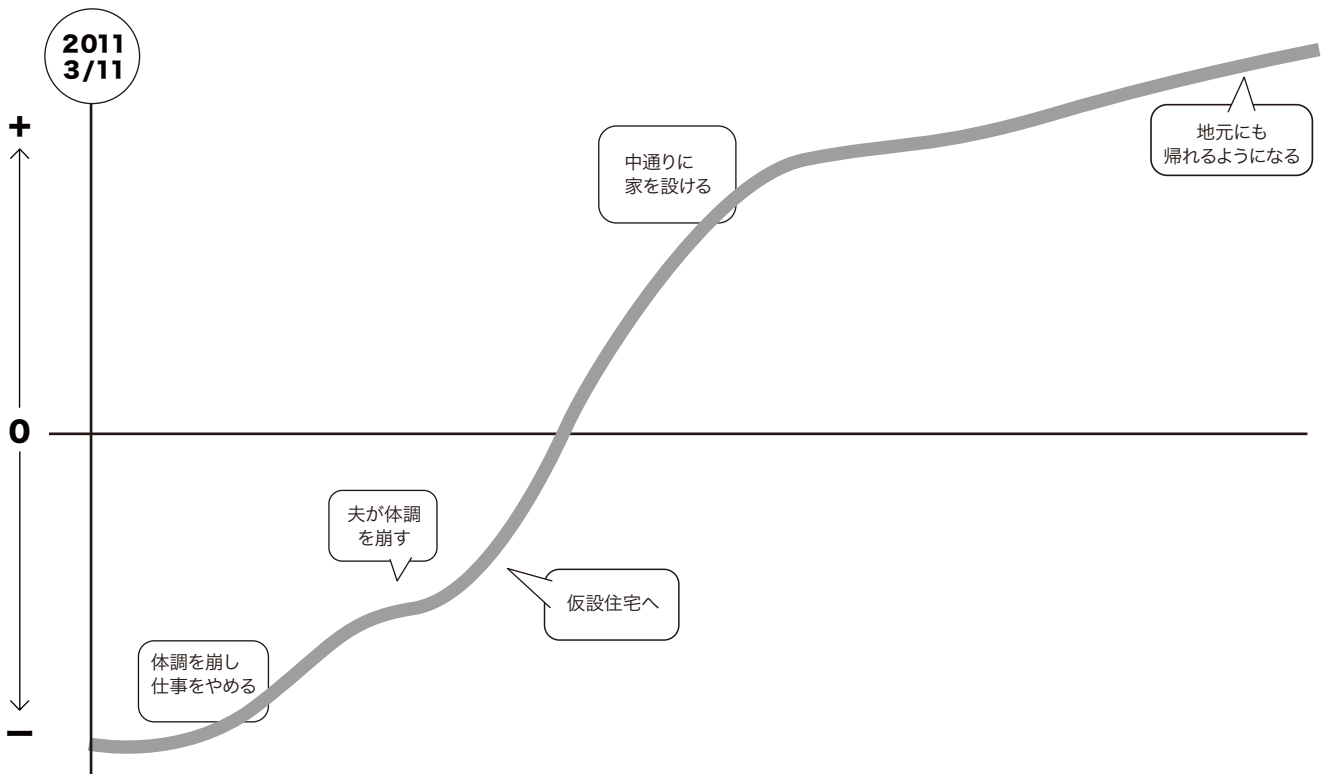


中通りの市町村在住 60代 女性

最初の頃はなぜか涙がいっぱい出た。
記憶喪失みたいにボーンと穴が開いている。

震災当時は福祉関係に勤務。施設は、職員も利用者も一緒に県外へ避難したため、自分は家族と離ればなれの生活に。避難先が過酷な環境だったこともあり仕事をやめて、夫と仮設住宅に入った。震災当時は、夫と義母と3人暮らしだったが、避難中に義母が亡くなり、現在は2人暮らし。

震災が起きた日は、仕事が明け番だった。夫は仕事先から歩いて帰ってきた。翌日、防災無線が鳴り、おかしいという雰囲気を感じて避難。ガソリンを入れて近くの避難所へ行ったが、職場に行かないわけにはいかず、施設全員で避難している場所へ行った。その後、施設ごと受け入れてくれた関東地方へ行ったため、夫や義母と離ればなれの生活に。しかし、数百人の利用者を抱える過酷な状況で、体重も10キロ落ち、仕事をやめた。夫が体調を崩したため、気を遣わない仮設住宅に入ることになった。夫は10ヶ月ほど入院。その後、病院通いもあったため中通りに一軒家を設け、もとの自宅と2軒になった。今は、避難指示が解除された自宅と行き来しながら暮らしている。

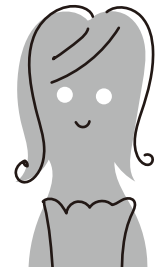


<気持ちの変化と理由>

最初の頃は、なぜか涙がいっぱい出た。記憶喪失みたいにボーンと穴が開いている。震災当時はお彼岸とかお盆、お正月も関係なく、仮設の中だけは時間が止まったままみたいで、宙に浮いているような状態だった。夫が病気で入院したり病院通いしたりが続いたが、仮設に入ってから知り合いもできて、いろんな経験をした。仮設住宅での生活が落ち着いてからは、自分の生活ができるようになり、気持ちが上がってきた。だいたい仮設で生活して、自宅にも寝泊まりでき、福島にも行くようになった。町にまだ明るさがない感じがするが、親しい人たちは戻ってきている。野菜作りで放射能のことなど不安があるが、いまは、帰ってきただけでもいいと思っている。

group
2

旧避難指示区域に帰還



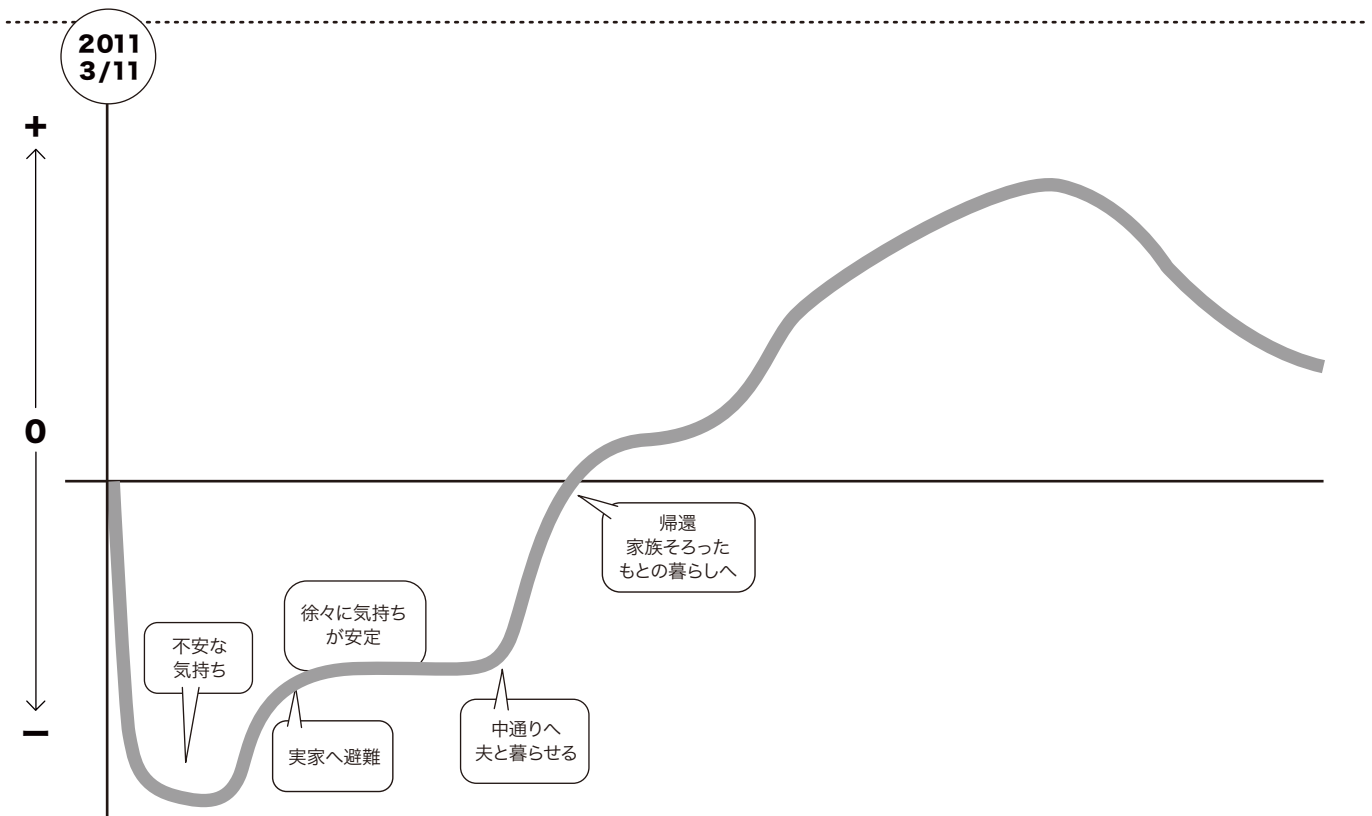
浜通りの市町村在住 30代 女性

月日がたってから徐々に帰ってくると、
みんなスタートラインが違う。
また新たなコミュニティを作っていこうと努力している。

浜通りの市町村で子どもたちと夫、義理両親と同居。原発事故当時、放射線の不安もある中、子どもを連れて福島県内の自分の両親の実家に避難。その後、アパートで暮らし、2013年に浜通りの自宅に戻る。

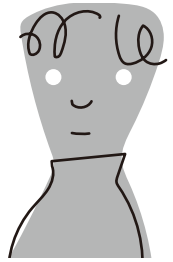
地元には高校がないので、子どもを車で40分の高校に通わせるか寮のある高校にするか迷っている。みんなすぐ戻ってくると帰還したら人が少なかったのも、子どもの進路選択肢が狭まったかもしれない。帰還してから、地域に以前と違う人が入ってくるなどして、また新たな人間関係をつくらなければならないという難しさがある。子どもたちも同じだと思う。ママ友や子どもの友達など、またつくっていかなければならない。

家では夫が相談相手。夫の親からもサポートを得ている。



<気持ちの変化と理由>

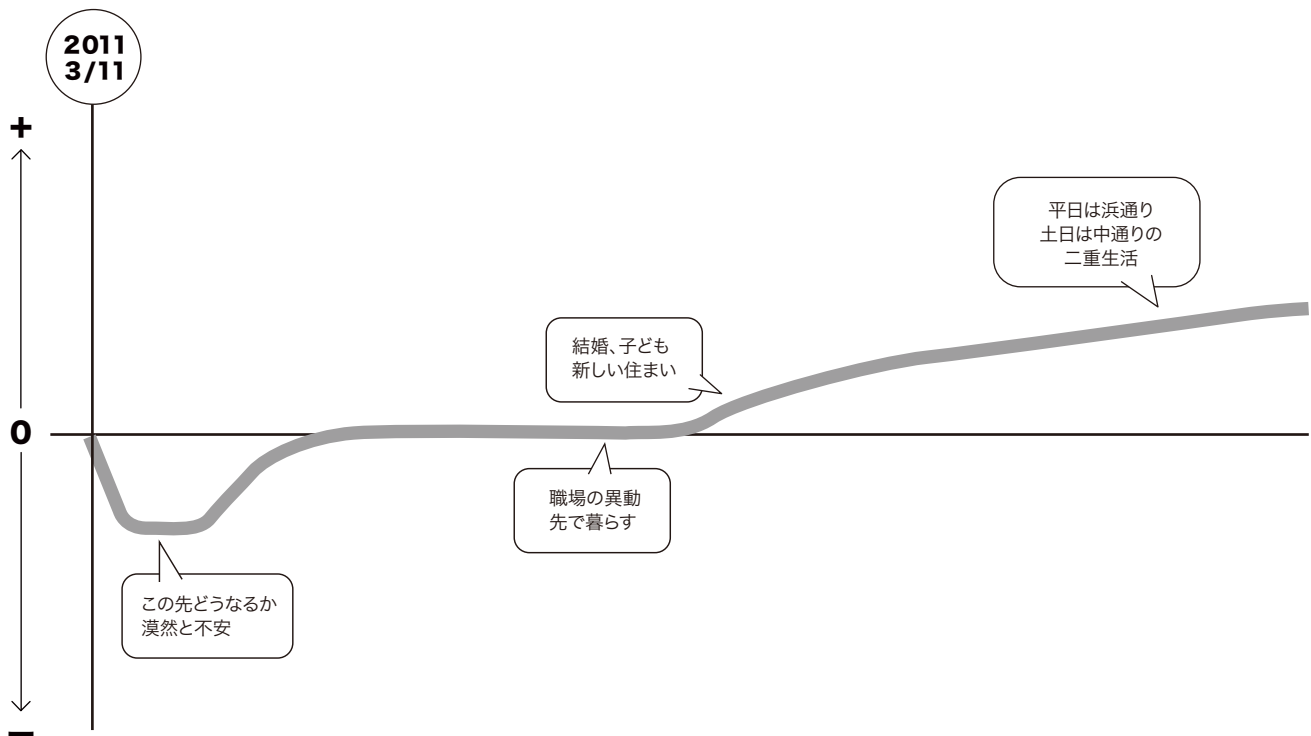
原発事故当時、ニュースで見た状況を基に避難することを決めた。子どもと福島県内に住む親の実家に避難。避難した直後はとても不安になったが、徐々に気持ちが安定していった。外遊びができず、屋内での生活が中心だったので、子どもも自分もとてもストレスを感じた。4ヶ月後に、中通りにある避難者用アパートで、離れて暮らしていた夫と住むようになり、気持ちが落ち着いてきた。避難指示が解けて帰還し、夫の両親と住むことができ、震災前の生活を取り戻した。この時点で心の状態は震災前に戻った。しかし、地域のコミュニティに関しては震災前とは違うため、徐々に気持ちはマイナスの方向へ。現在は仕事もして、新しい人間関係を作ろうと努力している。



浜通りの市町村と中通りの二重生活 30代 男性

震災で失ったものもあるが、得たものもある。
いろいろな人との出会い、
物事の見方が変わったことは良かったと思う。

浜通りの市町村生まれ。震災前、実家を離れ、一人でアパート住まいだった。震災当初、避難途中で両親にバツタリ出会い無事を確認できた。すぐに避難所で仕事にあたり、その場のことに無我夢中になっていたのも、そんなに不安があったわけではない。その後、二重生活を覚悟したうえで結婚。妻と子どもが、自分の両親と妻の両親がいる中通りに暮らしているのも、何かあってもこの両親たちが助けてくれるので安心している。2017年、職場の再開に伴い、浜通りの市町村での勤務に。当初は中通りからの通勤を考えていたが、疲れがあり運転も心配なので、平日は浜通りのアパートに住む二重生活をしている。



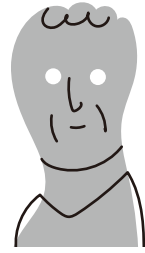
<気持ちの変化と理由>

震災直後は先行きが見えず不安。だんだんと気持ちが落ち着く中で、その先のことは考えて解決できることではないと思った。震災後に、結婚し子どもができた。もし、震災直後に妻と子どもがいたら、行動や判断も違っていただと思う。今は、妻と子どもがいることで、頑張ろうと思えるようになり、張り合いをもって仕事ができている。放射線量と就学環境、妻の家族が居ることなどを考えると、割り切って、単身赴任しながら落ち着いて暮らしてもいいと思っている。

地元はコミュニティなどを含め、元の状態をなくしてしまったと感じる。なくしてしまったものも多々あるが、震災があったから妻や子どもと出会うことができ、地域のことも改めて知ることができた。

group
2

旧避難指示区域に帰還

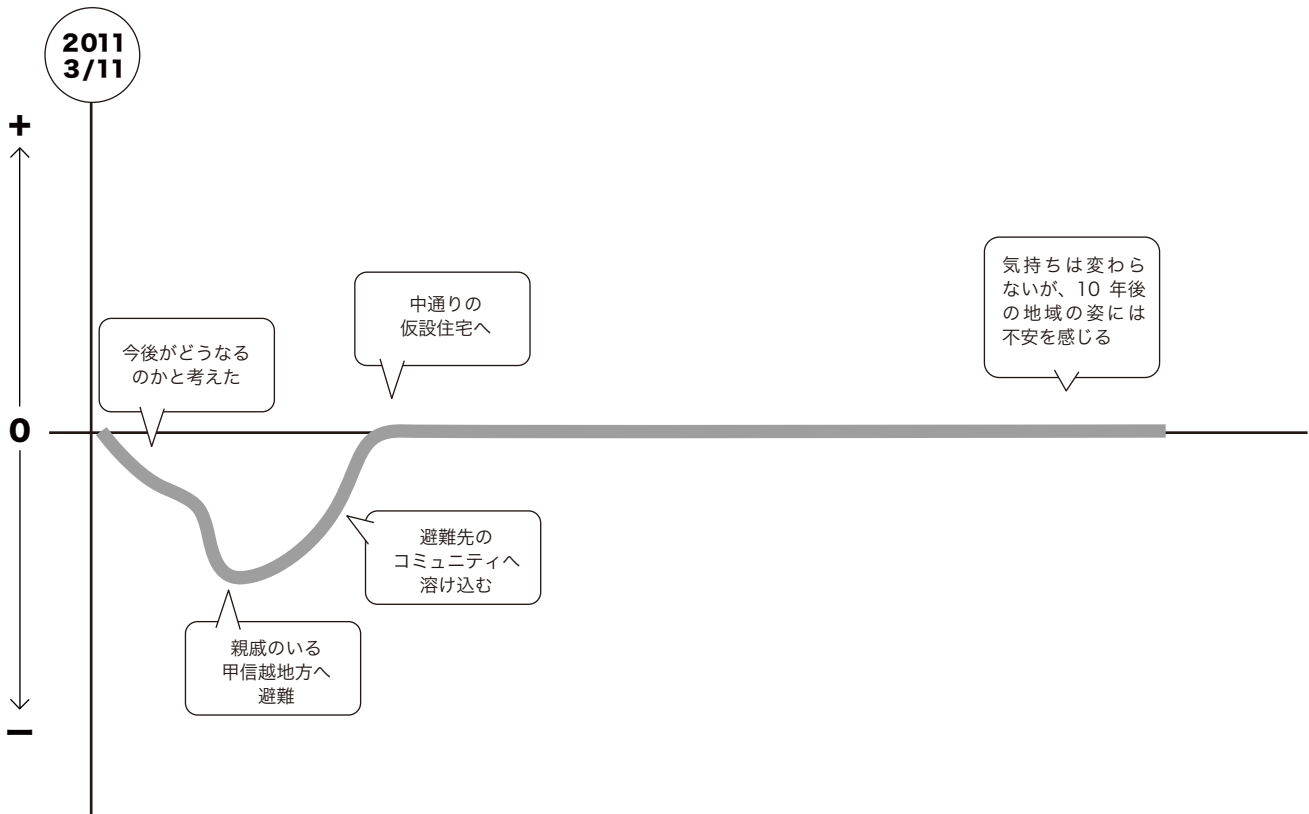


浜通りの市町村在住 70代 男性

病院と買い物できる場所が近くにない。
(震災前と変わらないが、)車が運転できなくなったときのことを考えると不安を感じる。

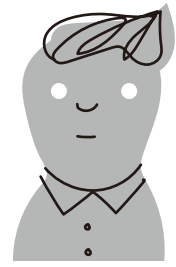
林業関係の仕事で海側に行っている時に被災した。家に帰ったら様々なものがひっくり返っていた。浜通りから甲信越地方へ1年3か月避難し、中通りの仮設住宅へ。週の半分は仮設住宅と浜通りの自宅を往復する日々を過ごした。2017年から浜通りの自宅へ帰還し、子や孫との生活を送っている。

健康については、原発事故当時と比べてあまり変わらないが、病院に通うのに遠いので負担を感じている。きのこ狩りや猟、釣りを一緒にしていた友達が避難先に家を建てるとし、バラバラになってしまった。



<気持ちの変化と理由>

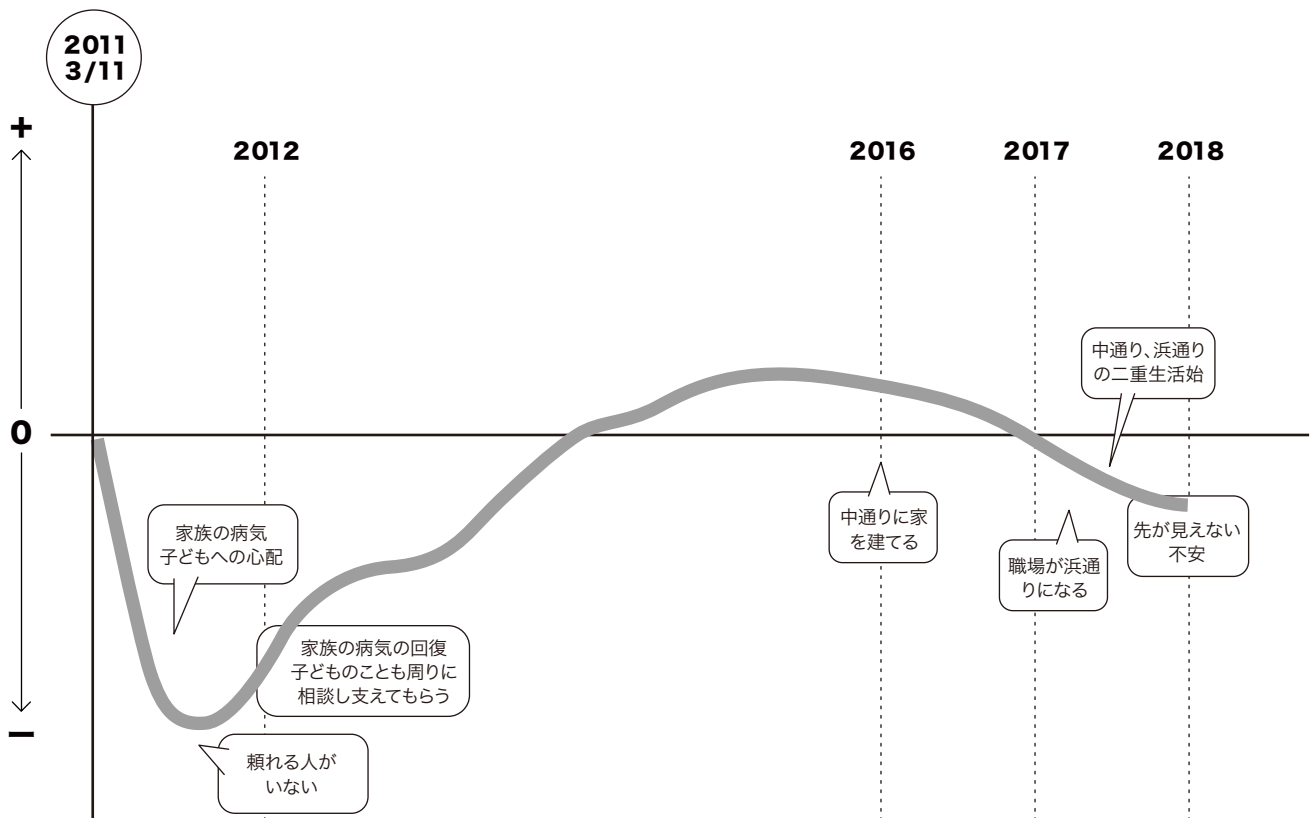
事故当時は現金が手元になかった。避難した時、銀行の支店がなく現金引き出しが難しかった。避難場所や食料などは一切困らなかった。元々散歩や釣りなど趣味が多く社交的だったので、コミュニティには溶け込めた。1年3ヶ月避難した後、仮設住宅をへて、浜通りの自宅に戻る。戻ってからの気持ちは震災前と同じ状態。近所で帰還した人は高齢の人が多く、若い人は戻っていないため、住んでいる地域の10年後に不安を感じる。車が運転できなくなると、病院や買い物に行けなくなるのではと心配している。



浜通りの市町村と中通りの二重生活 40代 男性

この生活がいつまで続くのかと考えると不安になる。
 どういうところに目標を置けばいいのか、模索している。

浜通りの市町村生まれ。震災当初、自分は福島県内に、家族は甲信越地方に一時避難した後、中通りに借り上げ住宅を借り、家族一緒になる（5年間）。両親も近くに住んでいる。避難中に、父が病気になり、子どもが支援が必要と診断された。どうすればいいのか悩んだが、いろんな人が助けてくれた。2016年に中通りに自宅を建設。避難指示解除にともない2017年から職場が再開され浜通り勤務に。当初は通勤を考えていたが、中通りからの通勤が厳しくなり、平日は浜通りのアパートに住んで、土日は中通りの自宅に帰っている。子育て、地域行事等は妻にまかせっきりで申し訳ないと思っている。この二重生活には終わりがないので、不安に思うこともある。将来の目標を失ってしまった。

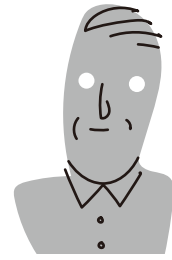


<気持ちの変化と理由>

避難中に父が病気になり、子どもが支援が必要だとわかる。家族の誰かが調子がよくないと、誰かが休まなければならない、頼れる人が近くにいなかったのが、これが重なり、一番落ち込んでいた。父が元気になり、子どものことも、家族で抱えるのではなく、周りの人に相談し、支えてもらうことにしたことで、落ち着いた。中通りの生活にも慣れた。2017年、浜通りと中通りとの二重生活がはじまり、今後この生活がいつまで続くのかを考えると不安になる。震災前は、ここで生活して将来こうなっていくものだという思いがあったのが、今はどういうところに目標を置いて行けばいいか、模索している。

group
2

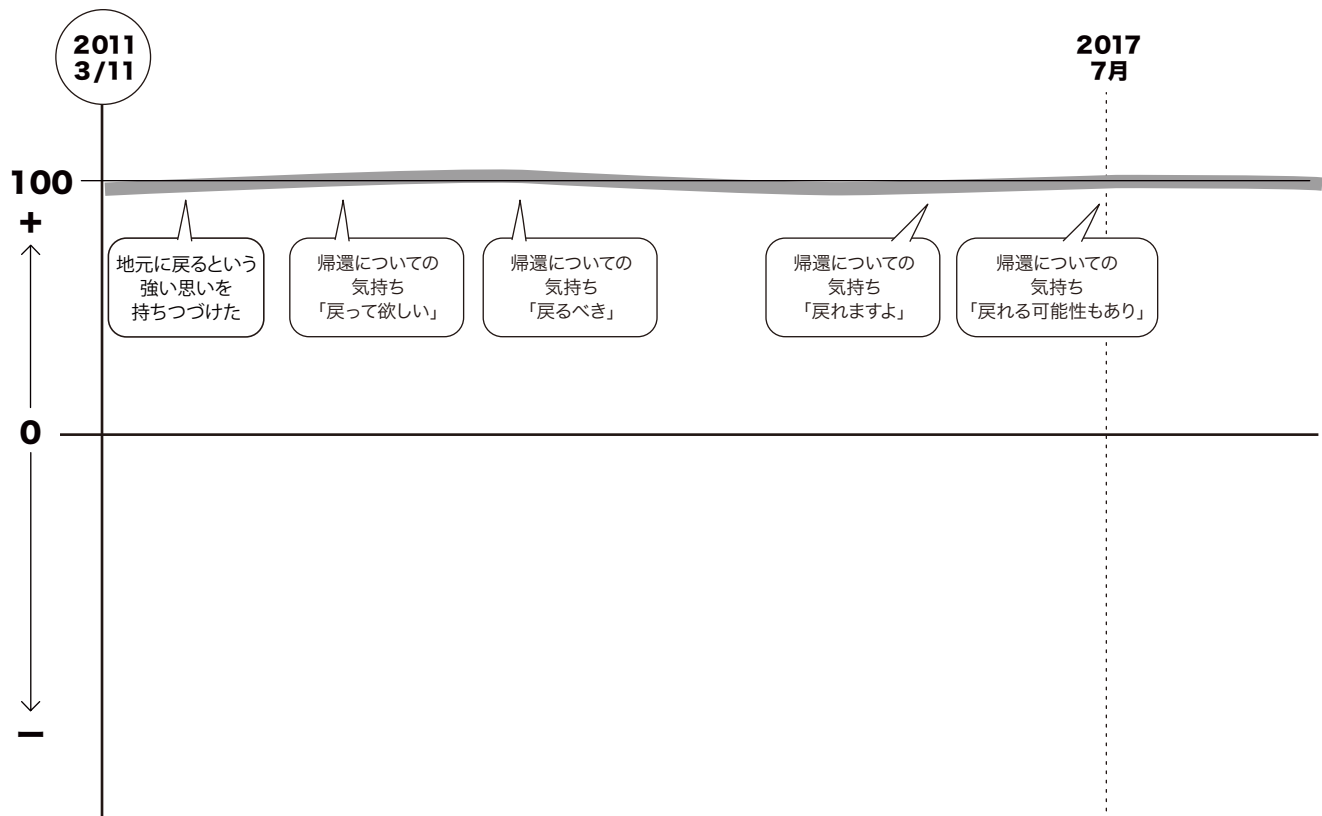
旧避難指示区域に帰還



浜通りの市町村在住 70代 男性

我々は一度住めない状態を作られた。
だから、復興とは、人が住めるようになることだと思う。
自分は、不便さや不安を覚悟して戻ってきている。

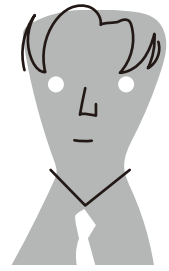
浜通りの市町村生まれ。2017年に自宅に戻ってきた。震災前は自営業で、自治会の役員をしていた。震災の翌日、屋内退避をし、パトカーが逃げるとふれまわったので、自治体内の避難所に避難。その後、30キロ圏内は避難することになり、さらに中通りへ避難した。避難所の役員もやり、班に分け、様々な役割（物資配布、トイレ掃除等）を担ってもらった。仮設住宅に移り、自治会の役員もしていた。避難中も地元に戻るという思いを強く持っていた。覚悟して帰ってきたので、特別、不便に思うことはない。周りの人もあまり不便だと思っていない。ただ、医者には困っている。歯科、眼科などは、避難先（中通り）に通っているが、一番近い浜通りの病院も混んでいる。戻った人と戻ってきていない人との意識に開きを感じる。



<気持ちの変化と理由>

震災後、落ち込んだことは一回もない。3月11日以降、ずっと忙しい日々、だから気持ちはずっと高ぶっている。帰還するための気持ちは100あった。まずは、皆さんに戻ってほしいと思っていた。その次は、みんなに戻ってほしい、戻るべきと思った。避難指示が解除されてからは、まちづくりは、そんなに急がなくても良いのかなと思っている。

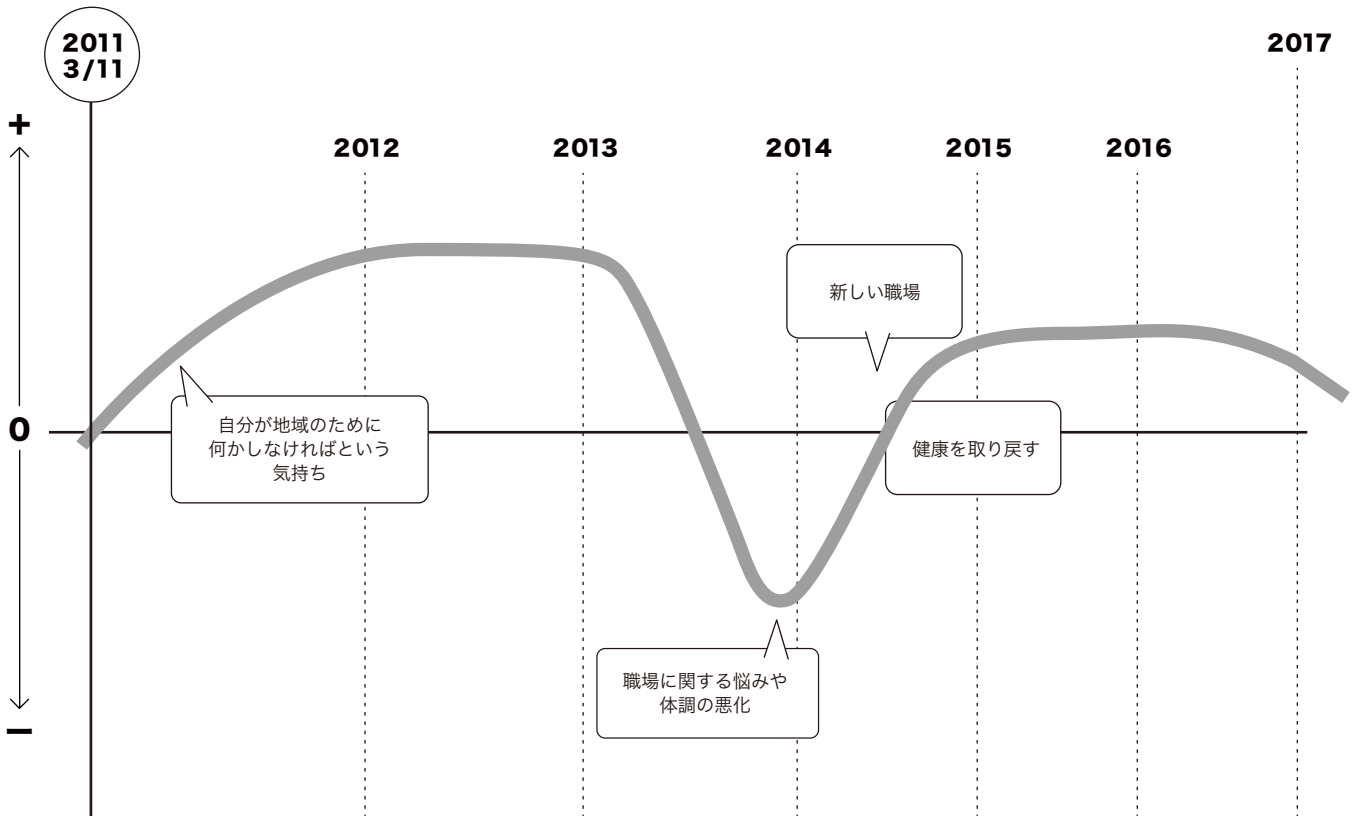
我々は一回、住めない状態を作られた。だから復興とは、人間が住めるようになることだと思う。放射能がある限り、戻ってきなさいとか、戻るべきだとかは言えないけれど、戻れる可能性があるということを残しておきたい。



中通りの市町村在住 40代 男性

政策決定に若い人の意見が反映されていない。
故郷を生活の本拠地にするという意志は相当に失われた。

以前は同居していた父は、避難指示解除で地元に戻り、自分は仕事などの都合で避難先に住み続けている。当初、放射線量が高いことがわかったものの、自分も家族も公的な仕事をしてきたため避難所対応などにあたっていた。浜通りからの避難者が押し寄せたが、そこからさらに避難していく姿を見て、自分たちも逃げなければと思った。その後、避難先を探したが、どこもいっぱいだった。3月中に勤務が始まり、地元のために何かしなきゃいけないと考えて動いていた。一方、職場では行政の方針などとのせめぎ合いになることもあり、気持ちが落ち込んだ。



<気持ちの変化と理由>

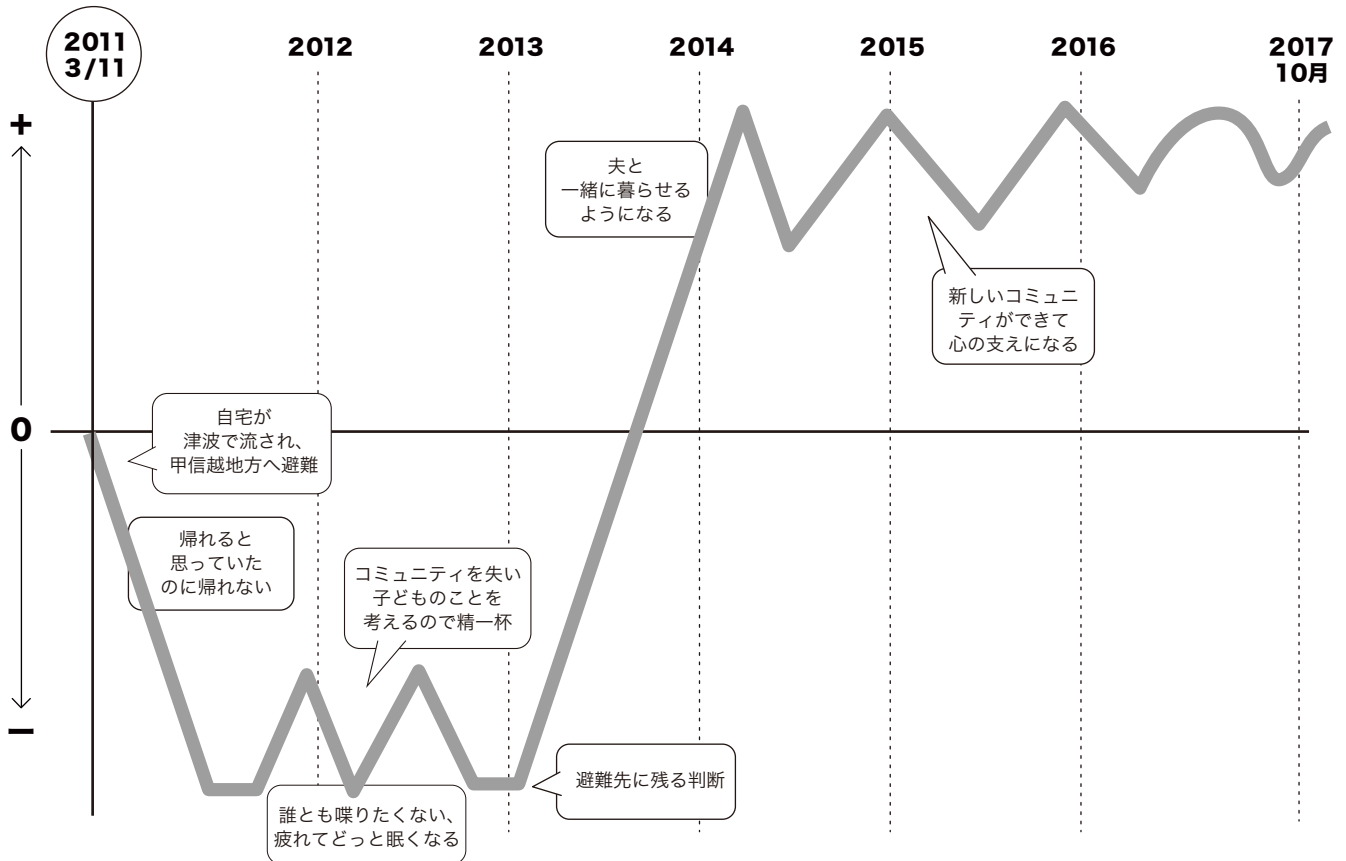
最初は、避難をしたり、放射線量を測定したり、子どもたちにホールボディカウンター検査を受けさせなきゃと考えたりなど、エネルギーが高かった。その後、職場に関する悩みや持病などで体調が悪化し、落ち込んだ。職員同士でも、出身地が原発の恩恵を受けていた地域かどうかや、賠償の状況などについて言及する人がいて、立場が少しずれたら線を引かれるのではないかとおそれる気持ちがあった。異動で別の地域の担当になり、健康を取り戻さなければと思い、スポーツなどをして、1年ほどで気持ちがもち上がった。父と自分とでも、土地や地域の今後をめぐる考え方の違いがある。元住んでいた場所を、終の棲家にする、故郷として生活の本拠地にするという意志は相当に失われた。政策決定に若い人の意見が反映されていないから。今後を決める設計図をつくるような部分に、外部の人が入ってきて、自分たちが関与できない状況に嫌気がさした。将来がどうなるのかについては、見通しが無い。



甲信越地方在住 40代 女性

生涯を過ごすつもりで大切にしてきたコミュニティがなくなったことを受け止めるので精一杯だった。いまは、新しい付き合いに支えられている。

津波被災地域で、自宅は流された。当時、子どもたちは学校から避難して無事だった。福島から関東地方に避難しようとしていた時に、親戚のつてがあり、甲信越地方に避難できる場所が見つかった。どのくらいの期間になるかわからないので、どこでもいいので4月に息子の中学校の入学式をさせてあげたいという気持ちで住み始めた。初めての学校で、式の前にクラス編成を見ながら呆然と立ち尽くす息子の後ろ姿を思い出すと、今も涙が出る。娘は伝統の踊りをやっていたので、イベントなどには避難先からも通っていたが、中学校に入って部活などがあり行かなくなった。福島に戻るか悩んだが、娘が避難先での進学を希望したこともあり、子どものことを考えてとどまることに。

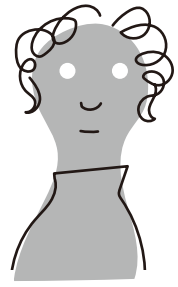


<気持ちの変化と理由>

大事にしてきたものが津波で流されショックを受けていた。帰れると思っていたのに帰れない、生涯を過ごすつもりで嫁にいき、その地域の友人やコミュニティを大事にしてきたのに、それがなくなったということを受け止めるので精一杯だった。誰とも喋りたくない、疲れてどっと眠くなる時期があった。夫が仕事の都合で離れた場所に住んでいて、子どもと自分だけで、子どもの喜怒哀楽の波にのまれていた。息子が高校に入って寮生活を送るようになり、離れるのは悲しいけれどもほっとした。夫も一緒に暮らせるようになった。地元に戻りたい気持ちはあったが、子どもたちにとっては、避難先がふるさとみたいになっていく。友人がいなくなった今、帰っても意味がないと思うようになった。息子の学校の保護者たちとも付き合いができ、助けられている。

group
3

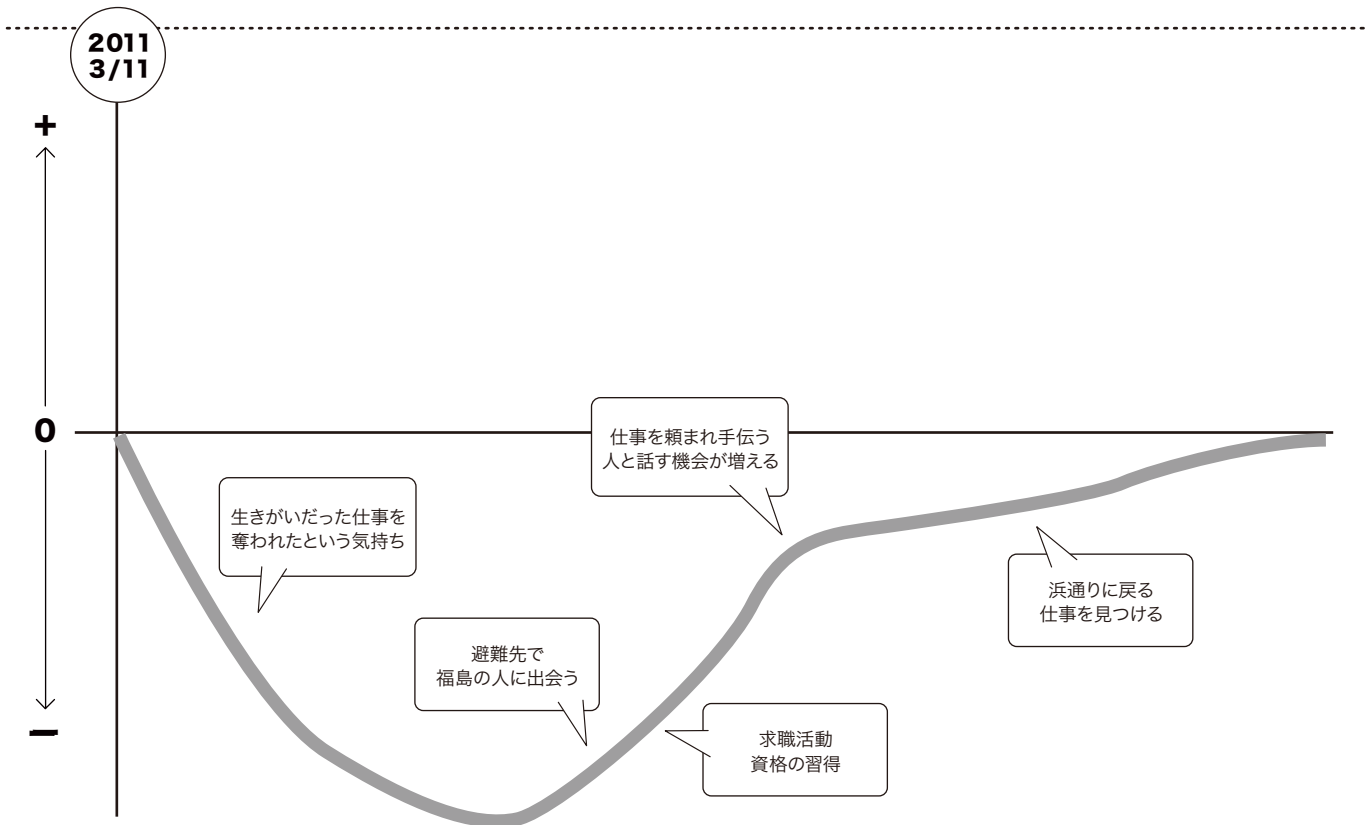
旧避難指示区域から避難継続中、または避難先等に移住



浜通りの市町村在住 60代 女性

人と話すようになり、前向きな気持ちを取り戻した。
落ち着いて暮らしているが、
どこかでまだ旅をしているような気がする。

防災無線を聞いて、夫は職場の人と、自分は自分で2～3日分の荷物を持って避難した。もともと避難する予定だった場所がいっぱいで、中通りの市町村に避難。知り合いもおらず、混乱し、何を考えていいかもわからなかった。避難所で一晩寝てあたりを見渡すと、知り合いや、勤務していた保育園の園児が声をかけてくれて背筋が伸びた。我に返った。夫の職場が関東に移ることが決まったため、合流して5年間を過ごし、夫の職場が浜通りに戻ることになって、自分たちも浜通りの以前の自宅と近い市町村に新しい家を購入。ただ、夫の職場の人たちは、長い避難生活だったこともあり、半分ほどしか帰ってきていない。



<気持ちの変化と理由>

子育ても終わり、仕事に生きがいを感じていたが、震災で昨日まで働いていた自分が急に避難者になりショックを受けた。避難先では温かく受け入れてくれたが、仕事もなく孤独だった。同じアパートに避難してきた夫の職場の人たちは仕事があったので、昼間は出ていってしまう。そんなとき、健康診断で同郷の人に出会い、避難者の集まりに誘われ活動的に。以前から、子どもたちには希望や生きる力を教えなくちゃという気持ちがあったのを取り戻した。

地元に近い浜通りに帰ってきて、自宅の周りの人たちはいい人たちだが、他の住民から「あなたたちはこの人じゃない」と言われて、ショックを受けた。同じ浜通りでもよそ者のように言われ、「本当に自分の町に帰らない限り、この震災は終わらないんだ」と感じた。今は落ち着いて暮らしているが、どこかでまだ旅をしているような気がしている。

group
3

旧避難指示区域から避難継続中、または避難先等に移住

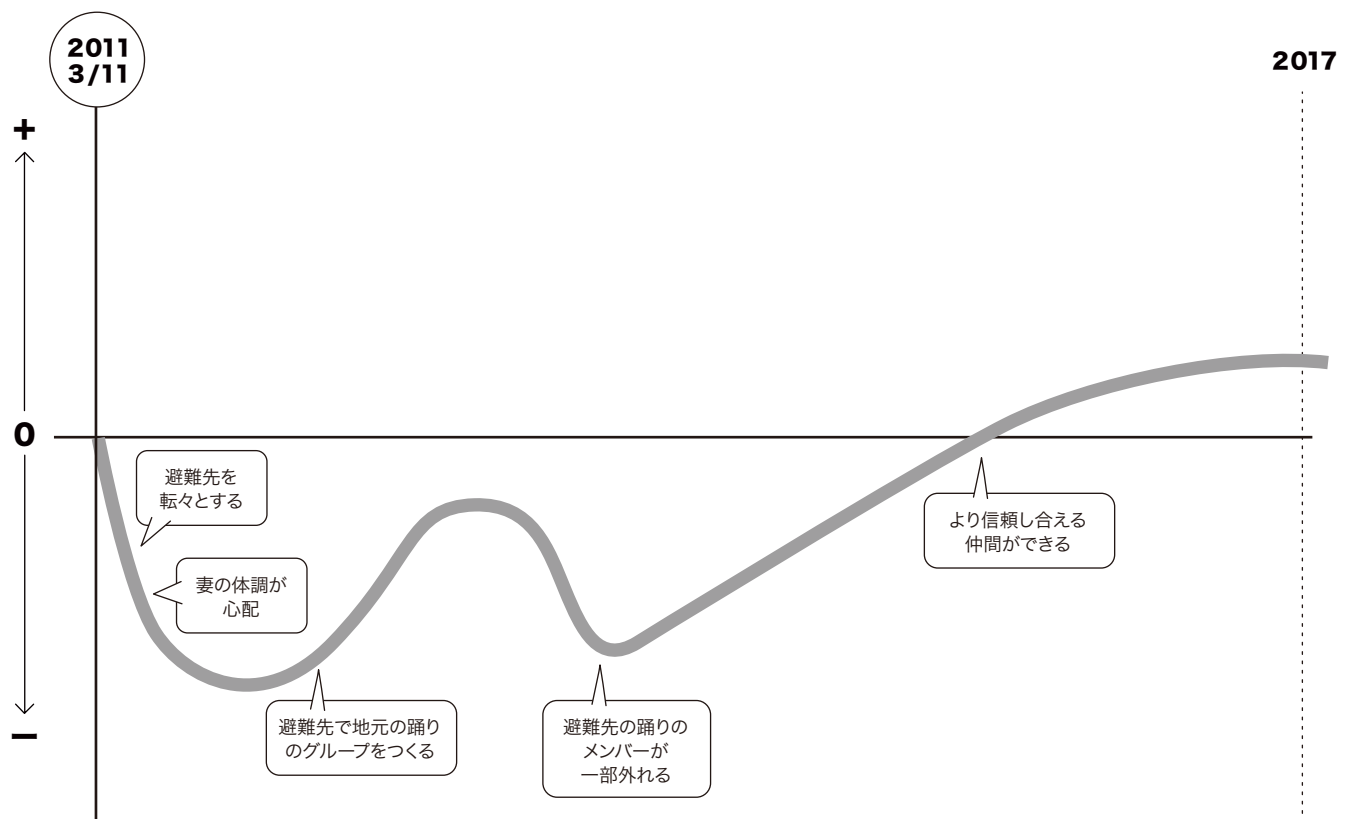


関東地方在住 30代 男性

時間が解決するのかなと思っていたけれど、まだ解決していない。
今は、応援してくれる人に元気をもらっている。

震災当時は、機械関係の仕事をしており、子ども2人がいて、妻が3人目を妊娠中だった。妻子と一緒に体育館など避難所で生活をしていたが、体調を崩したり、食料や物資をめぐる避難者同士でトラブルなどもあり、近所の人に助けをもらった。東北地方に避難し、そこで妻が出産を迎えたが、医療機関で他の妊婦が福島の方を嫌がっていると言われ、別の病院を案内された。一軒家を借りていたが、妻が出産したばかりで、雪かきも大変なため、福島県の人が多く放射線量も低い関東へ。しかし、原発事故の避難者への不理解な出来事があり、妻が体調を崩したため、被災者が比較的少ない地域で暮らすことにした。

自分は地元で踊りのチームに入っていたが、仲間は散り散りに避難し、解散になったため、避難先で踊りのグループを立ち上げた。時間の経過により、仲間の一部が外れていったので落ち込んだが、いまは、より理解してくれるメンバーになり良かったと思っている。避難中に生まれた子どもは甲状腺検査の対象外となっていたため、もし連れて帰った時に何かあっては心配だと妻が言ったこともあり、震災から2年後くらいに、福島には戻らないことを決めた。



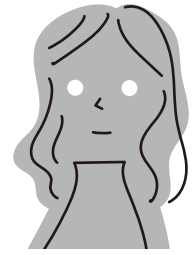
<気持ちの変化と理由>

震災後に落ち込んでいたが、同じ福島からの避難者と出会って踊りのチームを立ち上げ、気持ちが前向きになった。一部のメンバーが、もういいのではないかと抜けて、気持ちが下がった。でも、残った人たちがより濃い仲間になり助けてくれて、落ち着いた。

関東での生活は安定してきているけれども、モヤモヤした気持ちもある。踊っている時は、何も考えないで楽しんでいる。時間が解決するのかなと思っていたが、まだ解決しない。何もなかったら福島へ帰りたし、仲間とワイワイ続けていたかった。今は、応援してくれる人に元気をもらっている。

group
3

旧避難指示区域から避難継続中、または避難先等に移住

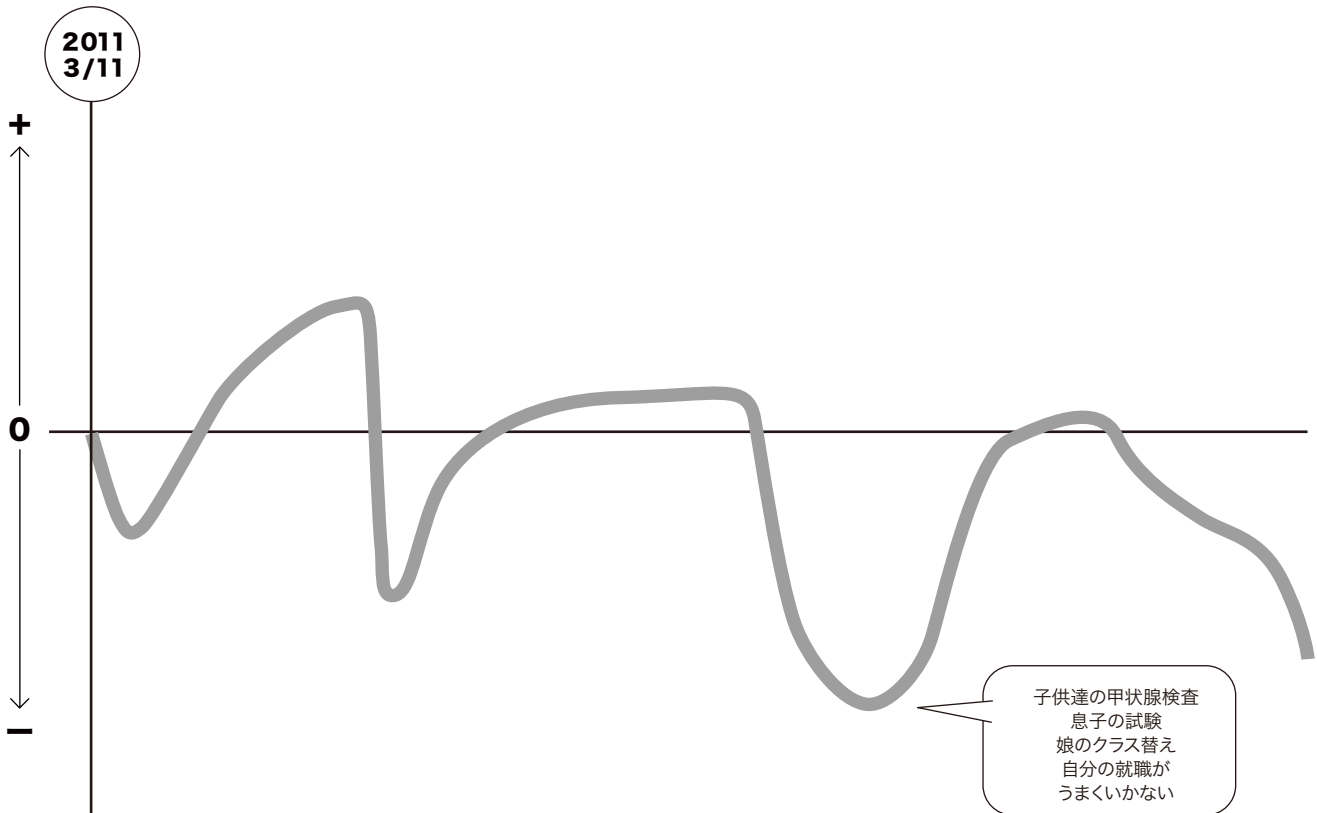


中通りの市町村在住 40代 女性

この先どうするか、状況に合わせて変えていくしかない。
子どもたちに助けられながら、なんとか頑張ってきた。

3人の子どもの母。職場のある中通りの市町村に家を構え、家族と暮らしている。避難したとき、一番下の子は地元でやりたいことがいろいろあったのに、やれなくなったという気持ちが、言葉には出さないけれども感じられた。子どものこと思えば、県外に出るっていう選択もあったのではないかと言われたこともあったが、仕事のことや、家族の気持ちもありそうはいかなかった。

子どもの健康のことなど不安もあるが、子ども自身も地元の家を壊さないでほしいと、ふるさとを思う気持ちがある。仕事の場所、家族と一緒に暮らせるのかなどで思い悩んだ。



<気持ちの変化と理由>

子どもの成長とともに変化。4年経って、子どもたちが震災の話をしているのを聞いて、ようやくそれが言えるようになったんだと思った。しかし、娘が高校で、「浜通りの人たちはずるい」というような話をされて悔しがっていたり、学校に馴染めずにいたりしたことや、自分の仕事の採用試験、息子の受験がうまくいかなかったため落ち込んだ。仕事などでモチベーションが高まったが、今はまた仕事上のことで悩みがあり、少し落ち込んでいる。朝がくると普通に時間は回っていて、もう無理だと思うこともあるが、子どもたちに助けられながら、なんとか頑張ってきた。一番下の子が高校を卒業したら、地元に住むのもありかなという話を夫としている。子どもが成長し出たっていったときに、何もなくなってしまわないように、これからは自分の向かっていけるものを見つけていきたい。



関東地方在住 70代 女性

何もなければ心豊かな生活が送れていたのではないかと思います。
死ぬまでこういう気持ちなのか。

専業主婦。建てて30年暮らした浜通りの自宅は、避難中に雨漏りし、天井が抜けて取り壊しになった。いまは、最初に避難した関東地方で家を購入し、夫婦で暮らしている。3月12日に防災無線があり、なぜ避難をするのかわからないが着のみ着のまま、エプロンにバッグをもった姿で山側へ。その後、親戚がいる関東に避難した。

浜通りの人たちとの集まりもあったが、夫が元原発関連ということもあり、自分が顔を出すと非難を浴びるのではないかと夫が心配し、外には出なかった。福島から避難してきたことが言えず、人とのつながりが遮断されてしまって、言葉が出なくなった。庭に花を植え、ほぼ一日土いじりをして、状態がよくなった。福島に帰りたと思う気持ち、諦めきれない気持ちがあり、辛いと誰かのせいにしてしまう。

いまも、自宅で夕日が落ちるのを見ると、どうして自分がここにいるのか不思議でたまらない。何もなければ心豊かな生活が送れていたのではないかと思います。死ぬまでこういう気持ちなのか。

2011
3/11

+

0

-

<気持ちの変化と理由>

自分の気持ちは落ち込んだまま変わらない。こうやって笑うことも、泣くことも、美味しい物を食べに行くことも、洋服も買うこともできる。でも本当の心の底は、やっぱり、生まれ育った地元に戻りたい。

震災で親戚を7人亡くした。自宅の取り壊しの時は、柱に捕まって泣いた。誰がいいとか誰が悪いとかじゃなく、泣き叫んだことが浄化されて今があるが、やっぱり夕日を見れば、朝日を見れば、胸がキューンとして地元に戻りたい。だから、ずーっとこのままだと思う。

group
3

旧避難指示区域から避難継続中、または避難先等に移住

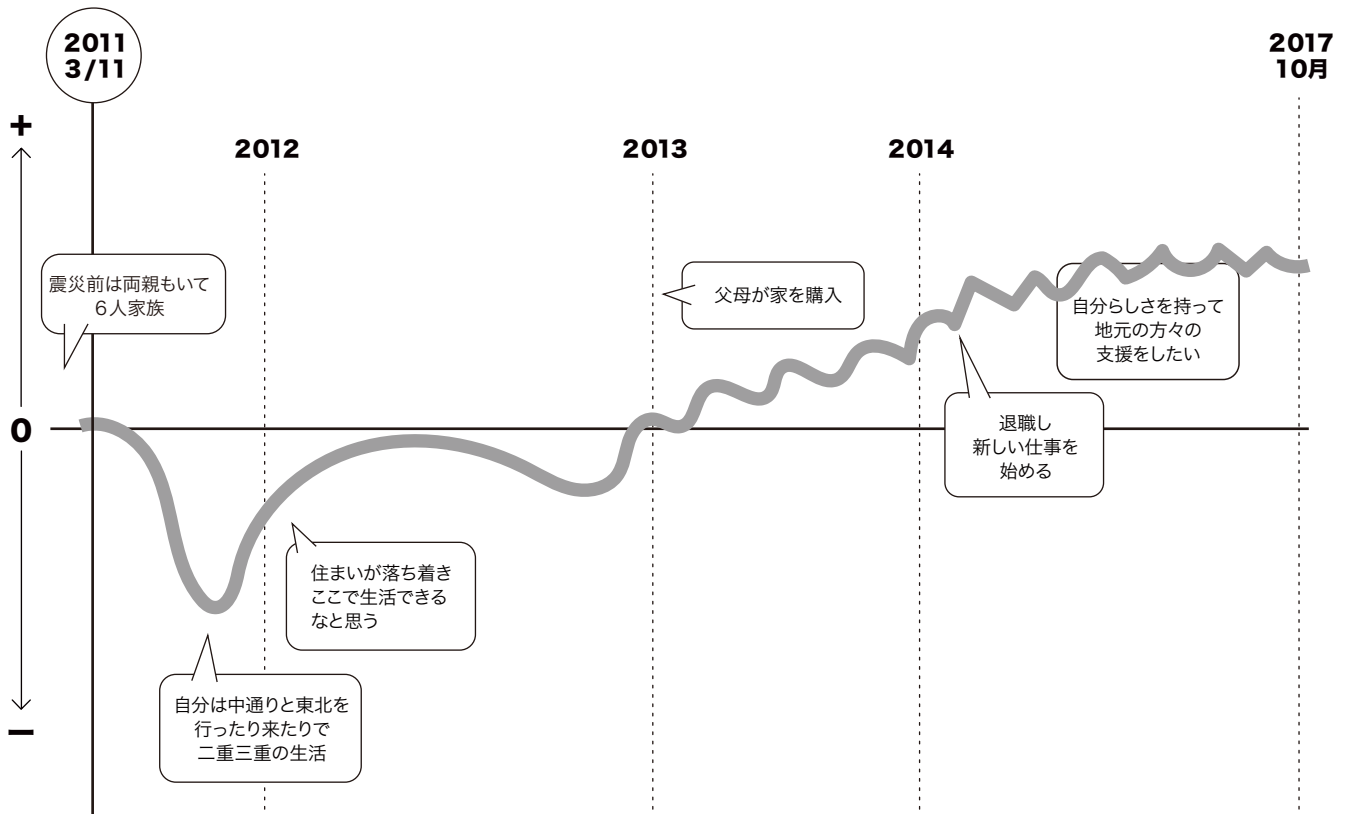


中通りの市町村在住 40代 男性

どこに住んでいても、安心して暮らせるのが一番だと思う。
自分らしさを持って、地元の方々を支援する仕事をしていきたい。

中通りの市町村で中古住宅を購入し、妻と子ども2人の4人暮らし。震災前は両親もいて6人家族だった。震災直後は、母と妻子が東北地方へ避難した。父は牛を飼っていたため避難指示後もしばらく避難せず、その後福島県内で一人暮らしをするようになった。自分は避難先の中通りと東北地方を行ったり来たりで、二重、三重の生活が続いていた。子どもの就学などを考え中通りに落ち着いたが、両親は別の市町村に避難し、現在も離れて暮らしている。

以前は地元で勤務していたが、今は避難先で自営業。地元の方々を支援する仕事ができればと思っている。



<気持ちの変化と理由>

行政の避難指示に関する対応が遅いと思っていた。一時的に家族と東北地方へ避難し、福島を離れたことが、リフレッシュになった。外で遊ぼうが、土を触ろうが問題ないから安心できた。子どもたちは、転校など生活環境の変化があって、大変だったと思う。子どもたちのことを考えると、放射性物質のフレコンバックなどがある間は、避難指示を解除するべきではなかったと考える。

職場のことでいろいろ悩んだ時期があったが、思い切って退職し、地元の人たちを支援する仕事に挑戦し始めた。前を向いていこうという気持ちや、子どもの学校のことでの悩みなどが色々ありながらも、少しずつ前へ前へ向かっている。ここまでこれたのは、家族の理解があったからこそだと思っている。

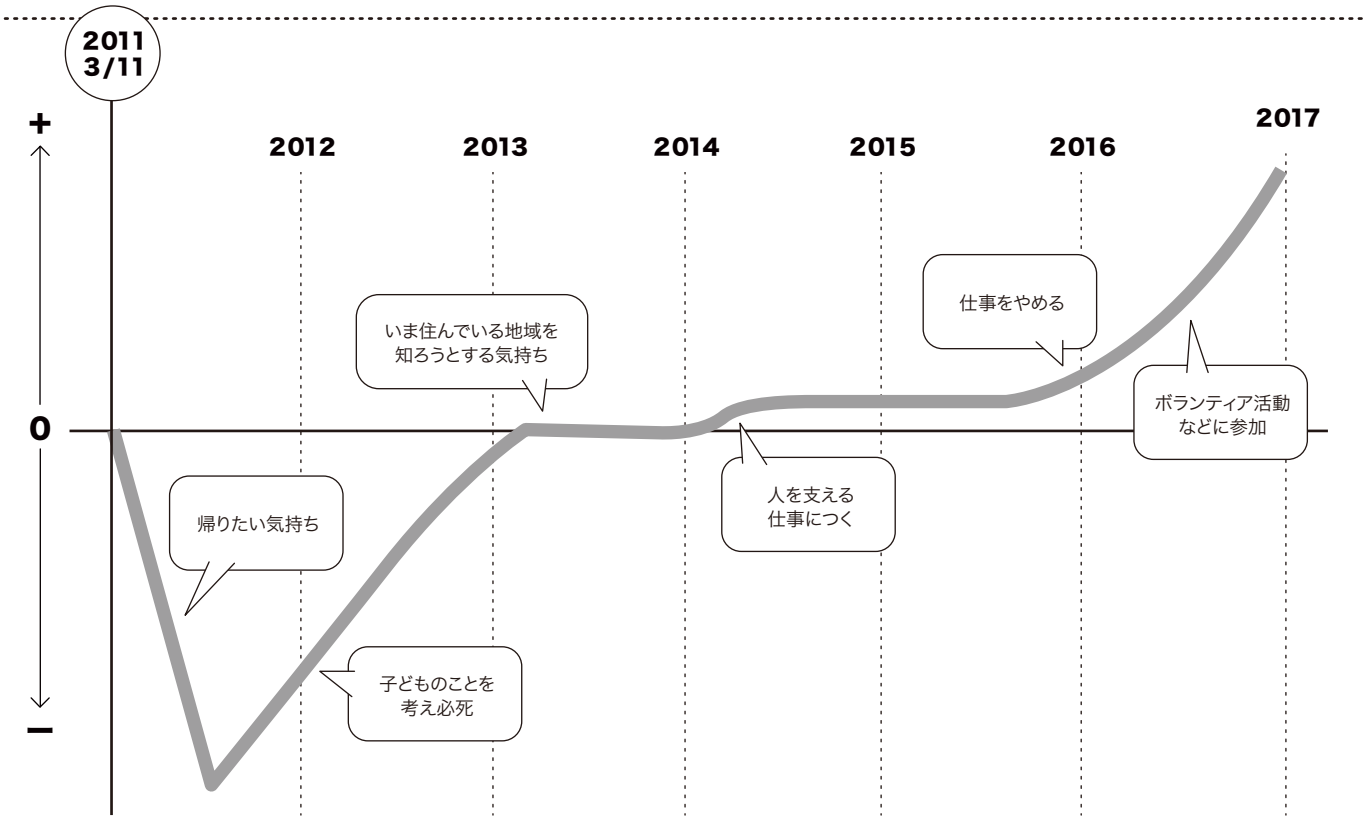


関東地方在住 40代 女性

涙はいっぱい流したけれど、震災がなかったら絶対に縁のなかったような人と出会えた。

浜通りの市町村の津波被災地域で、自宅は流された。夫は、仕事で時々福島に行くこともあるが、今は、子どもたちのことも考え、関東で暮らしていくつもりである。震災発生当時、自宅が最後どうなったかは見ていない。津波が来る15分前に通った知人によると、隣との電線が何かで引っ張られて家が崩れるのを見たという。

家賃補助の対象で、一戸建てに暮らしているが、2018年3月には出るようになっており、もし出ることもなくても行き先がない。子どもたちも心のどこかで傷を負っていると思う。でも、被災者だと言われても泣き寝入りをする必要はないと伝えている。いっぱい涙を流した分、前を向けている証拠だと思うし、ここに来て人と知り合えたことが、何かの縁だと思っている。

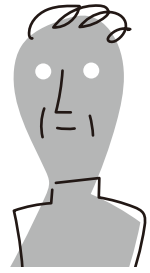


<気持ちの変化と理由>

最初の一年ぐらいは、帰りたいという気持ちの方が強かった。環境も違うし、子ども们的ことも考え二年近くは必死だった。二年目になった時に、この時期はこういう風が吹くとか、なんとなく避難先の地域を知ろうとしていた。しかし、体調は良くなかった。医師に、「3年いたら住めば都になるから、ちょっと今我慢してみたら」と言われ、落ち着いた。だんだん、帰りたいという気持ちから、もうここで生活するのかな、という気持ちに変わった。もうすぐ3年が経つというときに、親族から、「時間ももたないよ、今まで辛かったんだから、これから先楽しまないと」と言われて、前向きになり始めた。そのころ仕事で声をかけられ、自分を必要としてくれる人が家族以外でいたことで、自分にとってモリハビリになった。子育てしているお母さんや年配の方など、お互いにためていたものが話せて、またきてね、と言われるのが、すごく嬉しかった。5年目で仕事を辞めた。自分なりに、地区の人に恩返しをしないといけないと思い、学校のボランティア活動に参加するようになった。この人になろうとしているのかな、とも思うが、福島に、帰れるなら帰りたい。でも、子どもたちのことを考えれば、難しい。やっぱり20パーセントはまだ福島の人で、80パーセントを超えることはないと思う。

group
3

旧避難指示区域から避難継続中、または避難先等に移住



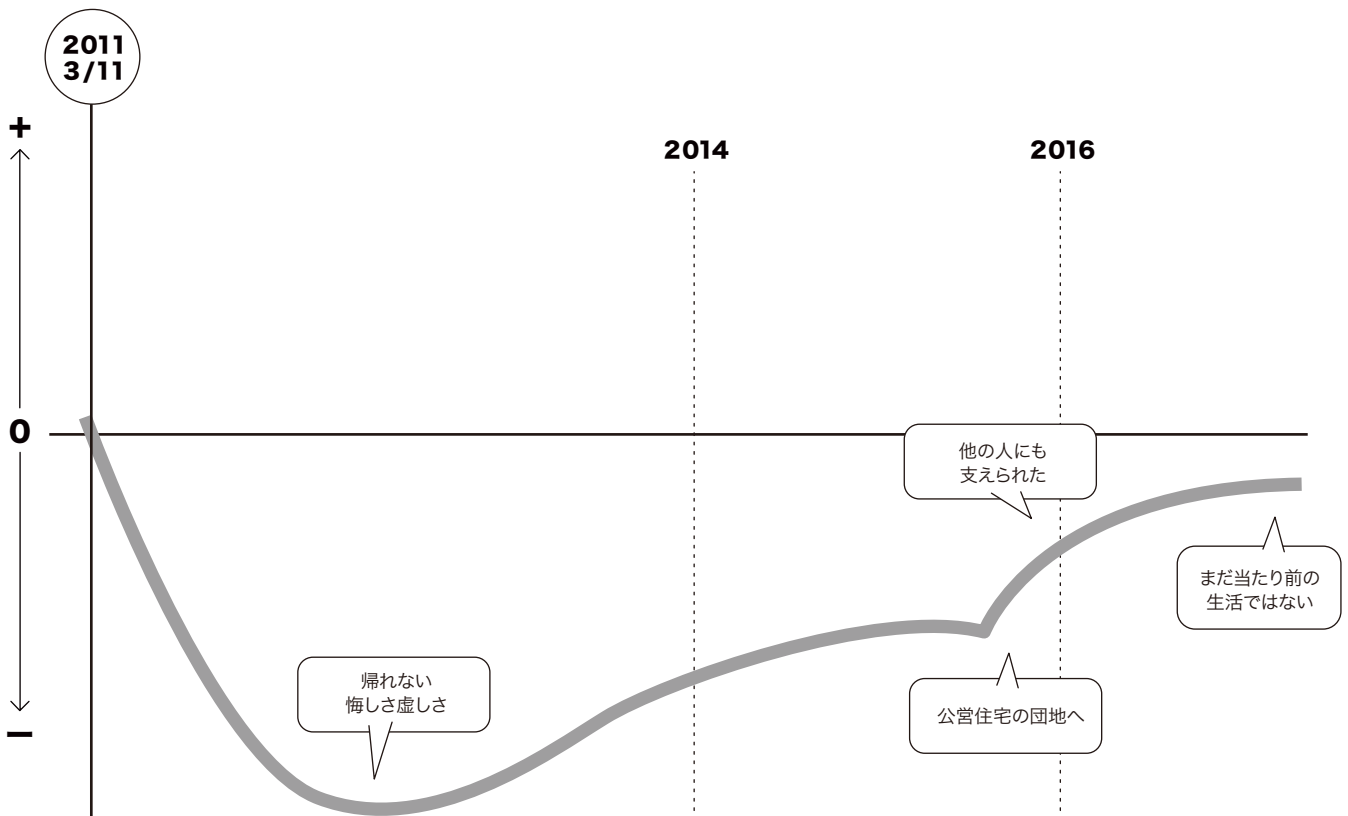
中通りの市町村在住 70代 男性

原発事故で命以外、全て失った。

先祖から受け継いできたものや、野菜の種も。

それを埋め合わせていくには震災前とは別の目標を持たなければならない。

浜通りの市町村生まれ。兼業農家、自治会の役員もしていた。震災後、関東地方や福島県内を転々とし、中通りの社宅を借りて3年間住み、今は避難者が住む公営の団地にいる。団地は様々な市町村の避難者で構成され孤独死も出た。いろんなことを自治会としてやっているが防ぐのは難しい。今でも地元に戻りたい。自宅は解体したが、ちょっと住むために小屋を残している。原発事故で命以外、全て失った。農家なので、先祖から受け継いで大事に育ててきたものを、その時全て失った。例えば野菜の種など。それを埋め合わせていくには震災前とは別の目標を持たなければならない。

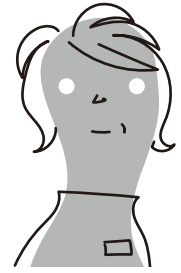


<気持ちの変化と理由>

原発事故後、3年は落ち込んでいた。避難所から浜通りの自宅を行ったり来たりしていた。その時が一番落ち込んでいた。浜通りの自宅から戻る車中で泣いていた。死にたいと思ったこともあったが、奥さんに叱られた。命はいらないと思った時期、おかしくなっていた。先祖から受け継いできたものをつなげなかった。先祖に申し訳ない。とにかく悔しかった。そして虚しかった。だれにもぶつけられない。借り上げ住宅にあって多少気持ちが上がった。団地に移って少し落ち着いたが、まだ普通には戻っていない。避難して7年になるが、ここでの生活に夢はない。当たり前の生活ではないと思う。

group
3

旧避難指示区域から避難継続中、または避難先等に移住



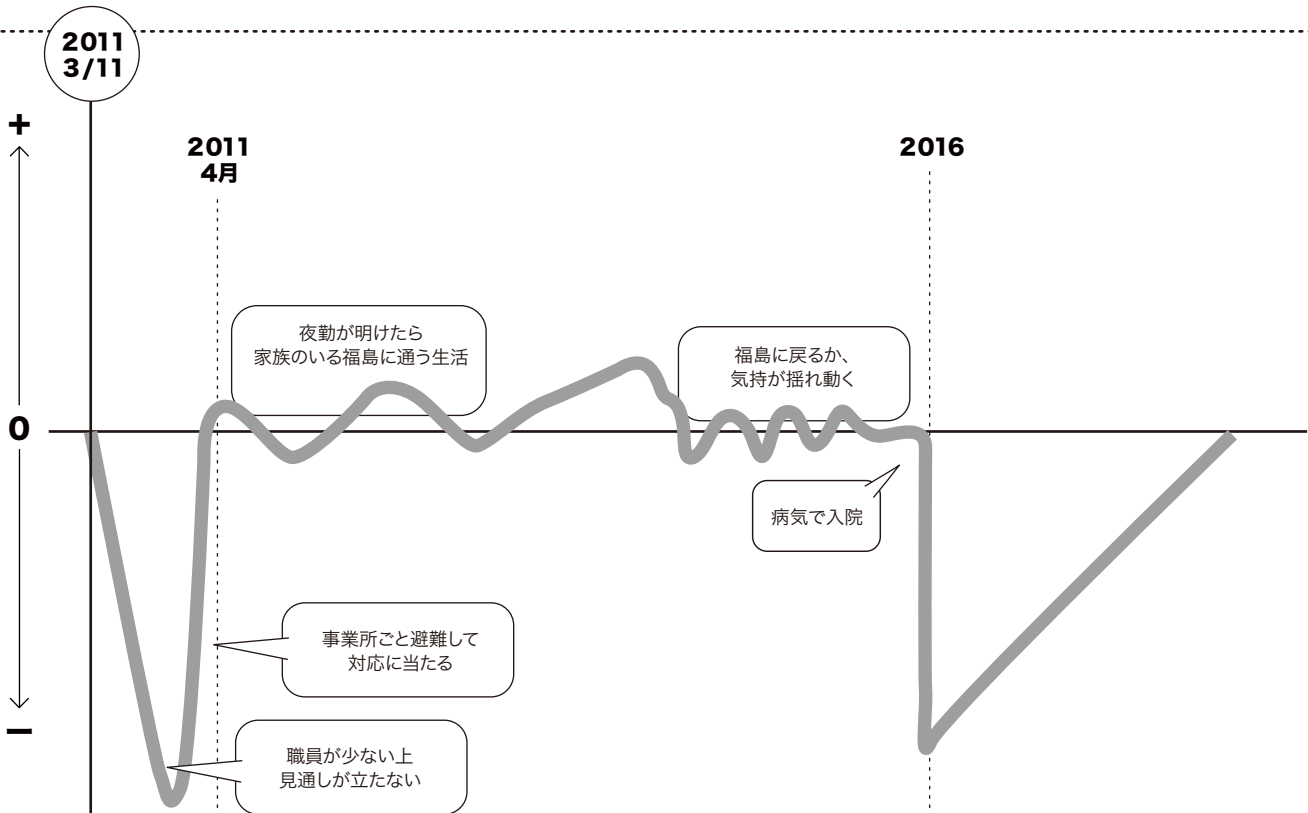
関東地方在住 50代 女性

家族のことを考える余裕はなく、職場とともに移動した。
病気もして、今後のことを考えている。

地震により自宅は全壊。福祉関係の事業所で働いていた。避難指示が出たが、利用者の受け入れ先が見つからず転々として、福島県内にある施設を避難先として提供してもらい全員で一ヶ月ほど過ごした。その後、一緒に関東地方へ。

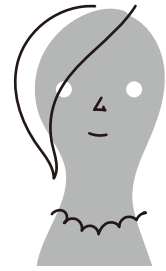
夜勤対応者や、その場で駆けつけた職員だけだったこともあり、雑魚寝をしながら利用者のお風呂の対応など24時間体制で勤務。この生活がいつまで続くんだろうと不安があった。自分は娘や息子など家族と連絡が取れたのが3~4日目だった。関東に移ってからも、娘と両親が福島県内にいて、物が不足していたため、夜勤明けに食料を調達して福島に運んでいた。しかし、自分が病気になる、病院に運ばれた。事業所は、関東地方で数年過ごしたのち、福島県内に戻った。職場の人の中には、すでに家族を関東に呼び寄せて生活基盤をつくっていた人もいたが、利用者のことを考えての判断だと思う。

自分の地域では賠償が終わっているため、仕事をしないと収入がない。ただ、元の場所には病院がなく、関東には病院がたくさんあったから助かったという気持ちがある。



<気持ちの変化と理由>

福島県内の避難先にいた3月下旬から4月までは、職員の人数が少なく、このままどうなるんだろうと、気持ちはどん底だった。職場の都合で遠く離れた場所に来たので、家族会議ができないままだった。アルバムだけは二度と買うことができないものなので、一番最初に自宅から持ち出した。職場が関東に移った後も、2年ほどはきつかった。波があった。その後、施設が福島に戻るという話が出始め、自分は福島にはいきたくないという気持ちの方が強かったが、利用者さんの生活が変わることを考えると人手が必要だと思ったり、除染しても放射線の不安があったりと、気持ちが揺れ動いた。2016年に病気になり、人生終わったと思った。まだ仕事に復帰できていないが、最近になって医師から仕事をしていいと言われたので、徐々に気持ちが上がってきている。今後、自分がどうなるのか、どこに拠点をもっていったらいいのかと考えると不安がある。

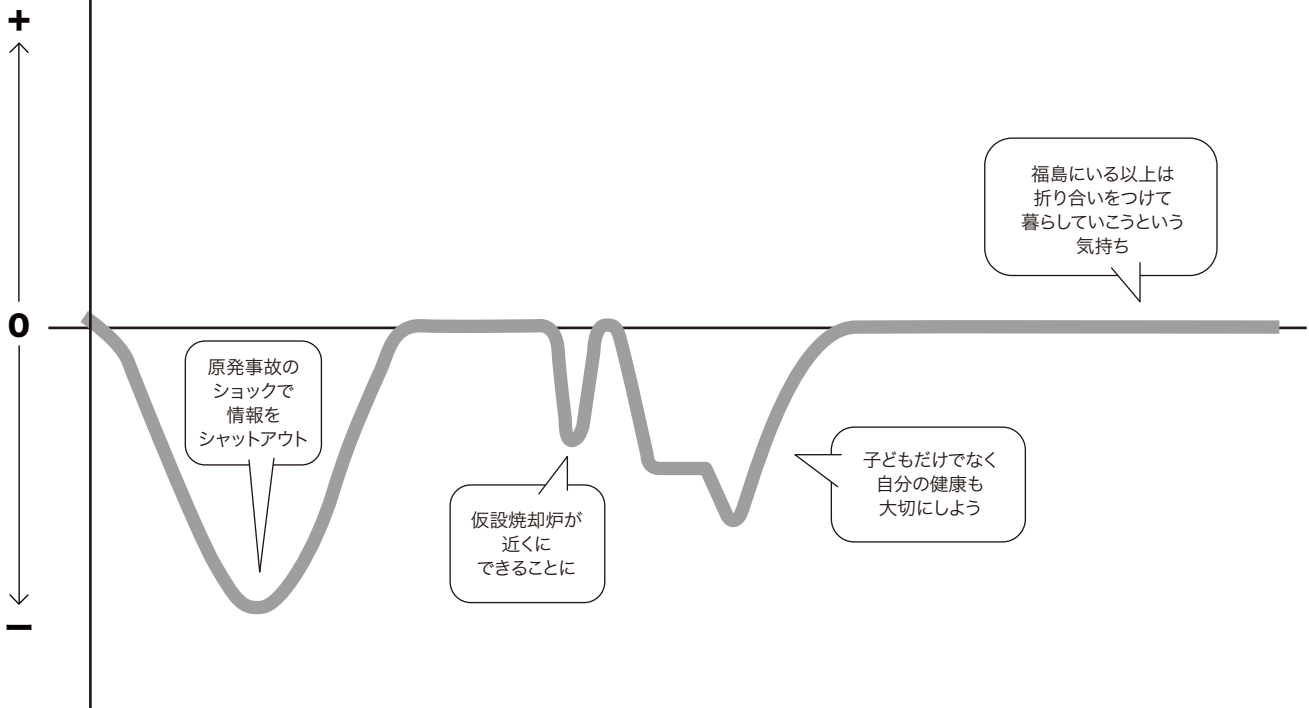


中通りの市町村在住 30代 女性

福島にいる以上、折り合いをつけて、子どもだけでなく自分自身の健康も大切にしていこうと思う。

震災当時から中通りの自宅です。家族などから間接的に、幼稚園などで自主避難した子がたくさんいると聞いた。当時0歳の子どもがいたが、自分もどうなのかという疑問も持ち、葛藤しながら働いていた。嫁ぎ先の家族はここから離れないという気持ちがあったことや、自分と子どもだけでは無理だ、家族と一緒にいたい、という気持ちがあったため、折り合いをつけて残った。

仕事に行っている間、子どもの離乳食を作ってくれる家族に、放射性物質の不安はなかなか言い出せなかったけれども、勇気を振り絞って言ったら理解してもらえて、買ってきたものを使ってくれるようになった。子どもは小さかったので、外に出ることは少なかったのが救い。防災無線で毎夕、放射線量が発表されていたので、下がっている日に散歩などをさせていた。今も、小さな線量計で確認して、自分で納得して遊ばせている。最初は情報をシャットアウトしていたが、今は、子どもにも自分で気をつけるように教えて、検査も必ず受けさせている。

2011
3/11

<気持ちの変化と理由>

山奥に嫁いだのも、新鮮な野菜や、子どもに土遊びをさせられることが魅力だったから。だから、原発事故後は気分は落ちたままだった。情報をシャットアウトした時期は、何も感じず、聞かないことによって自分を取り戻してきた。第二子を妊娠して、放射性廃棄物の仮設焼却炉（8000ベクレル以上の可燃施設）が建つことになり、不安が再燃。子どもが誕生して、住民の反対で一時撤回されホッとしたが、またできることになり落ち込んだ。その後西日本へ、子どもとともに保養に行った時、エコー検査や血液検査をした。子どもは大丈夫だったが、自分が血液検査で引っかかり、子どもだけじゃなくて自分自身のことも考えなくちゃいけないんだと、改めて気づかされた。

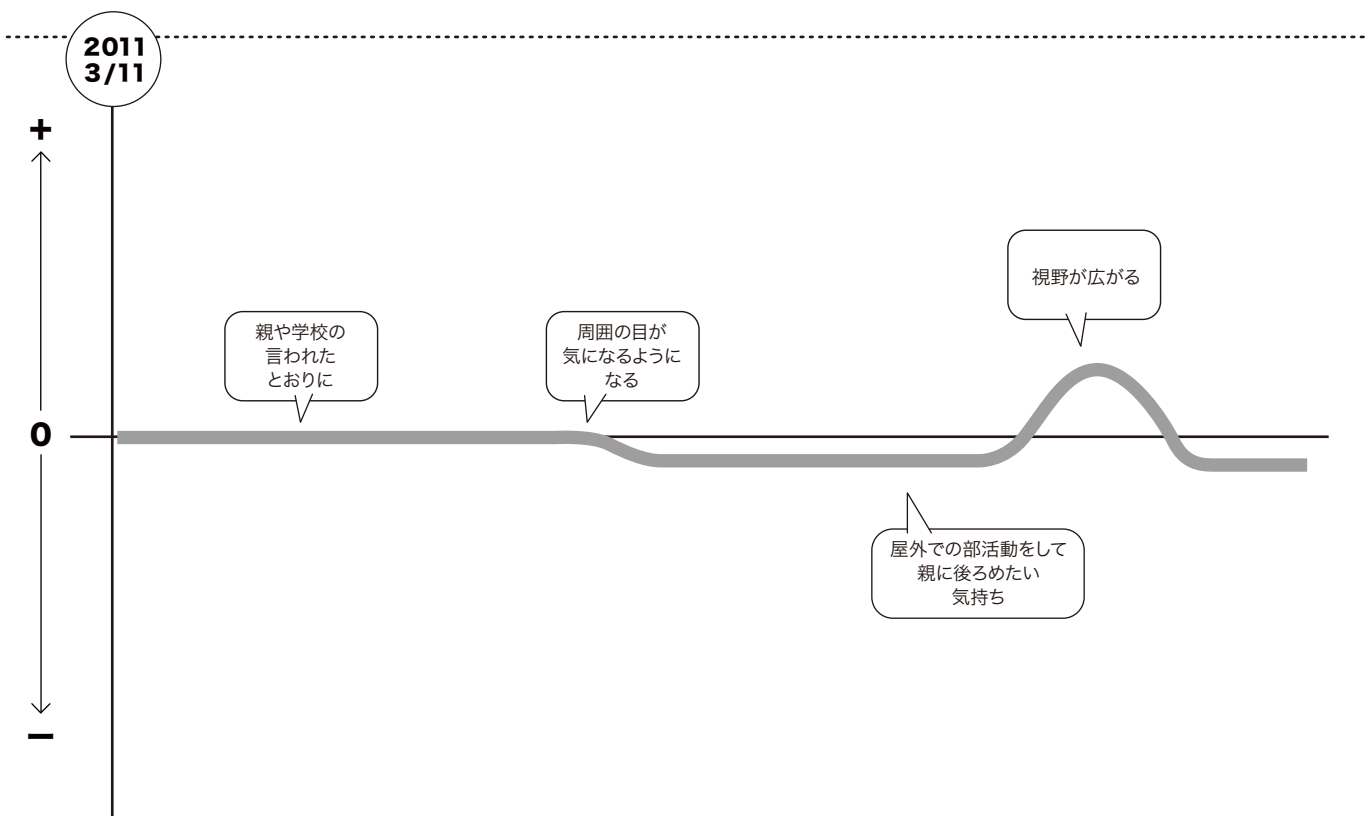
不安もあるが、福島県にいる以上は折り合いをつけて住んでいかなければと思うようになった。自分も健康で、子どもも健康に育てようという思いがしっかり固まるまでは時間がかかったけれど、学習会に参加するなどして、大分気持ちが落ち着いてきた。



浜通りの市町村在住 10代 女性

視野が広がり、様々な立場の人の考えを理解できるようになった。でも、やっぱり原発事故はなかった方がよかったのではないと思う。

震災や原発事故の発生当時は小学生だったため、よくわからなかった。母親が放射能のことを気にしていたため、学校給食を食べずに弁当を持参したり、屋外での体育に参加せずに過ごしていた。しかし、学年が上がり、クラスで唯一同じようにしていた子が体育をやりはじめたため、親に話して体育に参加したり、給食を食べたりするようになった。中学生になり、屋外部活に入った後、別のコミュニティでダンスや演劇をするようになった。演劇を披露する場で、自分が大人たちの政治的な動きに知らないうちに関わっていたことを知り、いろんな考えの人がいることを、大人が子どもにもちゃんと説明するべきだったのではないかと思っている。現在は、高校に通っている。社会のことに関心を持つようになり、視野が広がった。将来は大学で政治などを学びたいと考えている。



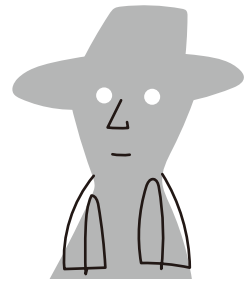
<気持ちの変化と理由>

震災・原発事故発生直後は、子どもだったので自分で考えることがまだなかった。よく行っていた場所に行けないのはなんで？と聞くことはあったが、気持ちの浮き沈みはなかった。

中学校に入り、屋外の部活動をするようになって、放射線のことを気にする母のことを考えると後ろめたい気持ちをもつようになった。

その後、ダンスや演劇を始めて、人間関係も含めて自分の世界が広がった。母の考えが間違っていなかったと思うようになった。様々な立場の人の考えを理解できるようになった。

しかし、社会のことに関心を持つようになり、世の中のことを勉強するようになって、やっぱり原発事故はなかった方がよかったのではないかと考えるようになった。

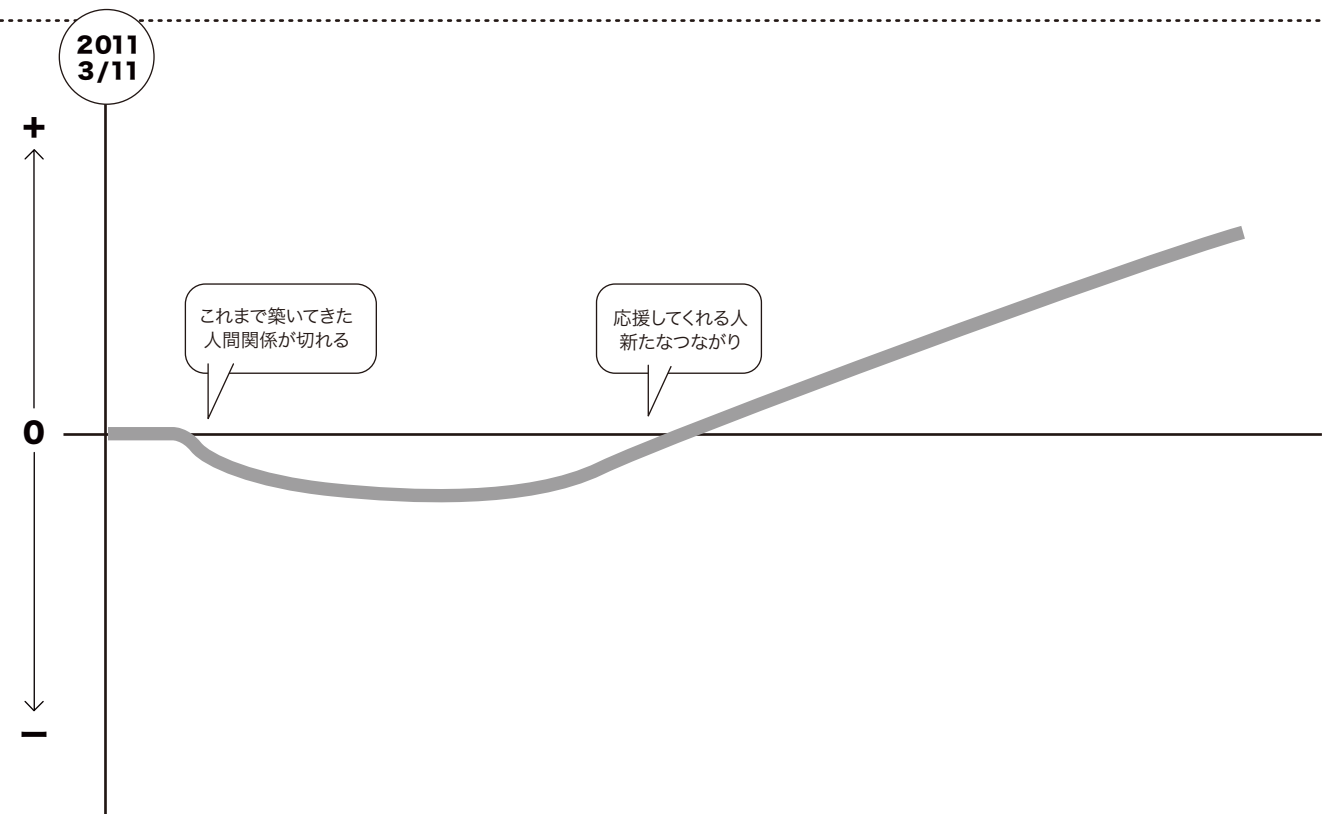


中通りの市町村在住 60代 男性

これまで積み上げてきた信頼や人間関係が、ぷつっと切れてしまうのが影響として一番大きい。地道に努力するしかない。

地震では、自宅は瓦が落ちたり玄関にひびが入ったりして半壊。原発が爆発したというのは2日後くらいに聞いた。当時、果樹の剪定などの作業があり外に出ていた。

米などを県外に売っていたが、原発事故の後すぐに「今年の米はいらない」と言われた。農家の間でも、作付けをするかどうかで意見が分かれ、自分はその年の米の作付けは見送った。果樹は、手入れをしておかなければ1年空いただけでもだめになってしまうため、農協や市の方針で、樹皮を剥いだり、高圧洗浄機で洗ったり、土の除染をしたりした。ただ、堆肥は測定すると使えないことがわかった。何をやっても、補償してもらえるのかわかからないままだった。最初は食品の基準値が500ベクレル/キログラムだったが、200、100と低くなり、実際に市場ではもっと低い値でないといけなかった。4割くらいのスーパーは、福島県産のものはいらないということだった。夏過ぎくらいから賠償が出るということになり少し安心したが、事故後1年目は収入は半分になった。2年目からは作付けをし、4年くらいで収入が元に戻ってきた。



<気持ちの変化と理由>

最初は、風評被害も含め、売れるか売れないかわからない将来の不安があった。賠償だけでは生活費はいずれはなくなってしまう、来年はなくなるのでは、という不安。東京などの市場では、福島県産のものは安くしないと買わないという人もいたが、骨を折ってPRしてくれた人もいた。米を買いたいと連絡してくれた人もいた。農作物を全て検査して、疑われずに食べてもらえるという、努力の結果はあったと思う。3年目くらいからちよつとずつ上がったが、今も100パーセントではない。今のところでも50パーセントくらい。ただ、努力しないと自分の生きる糧がなくなっちゃうから働いていないと、という気持ち。原発事故では、これまでの信頼や人間関係が、ぷつっと切れてしまうのが影響として一番大きい。一步一步、地道にやるしかない。

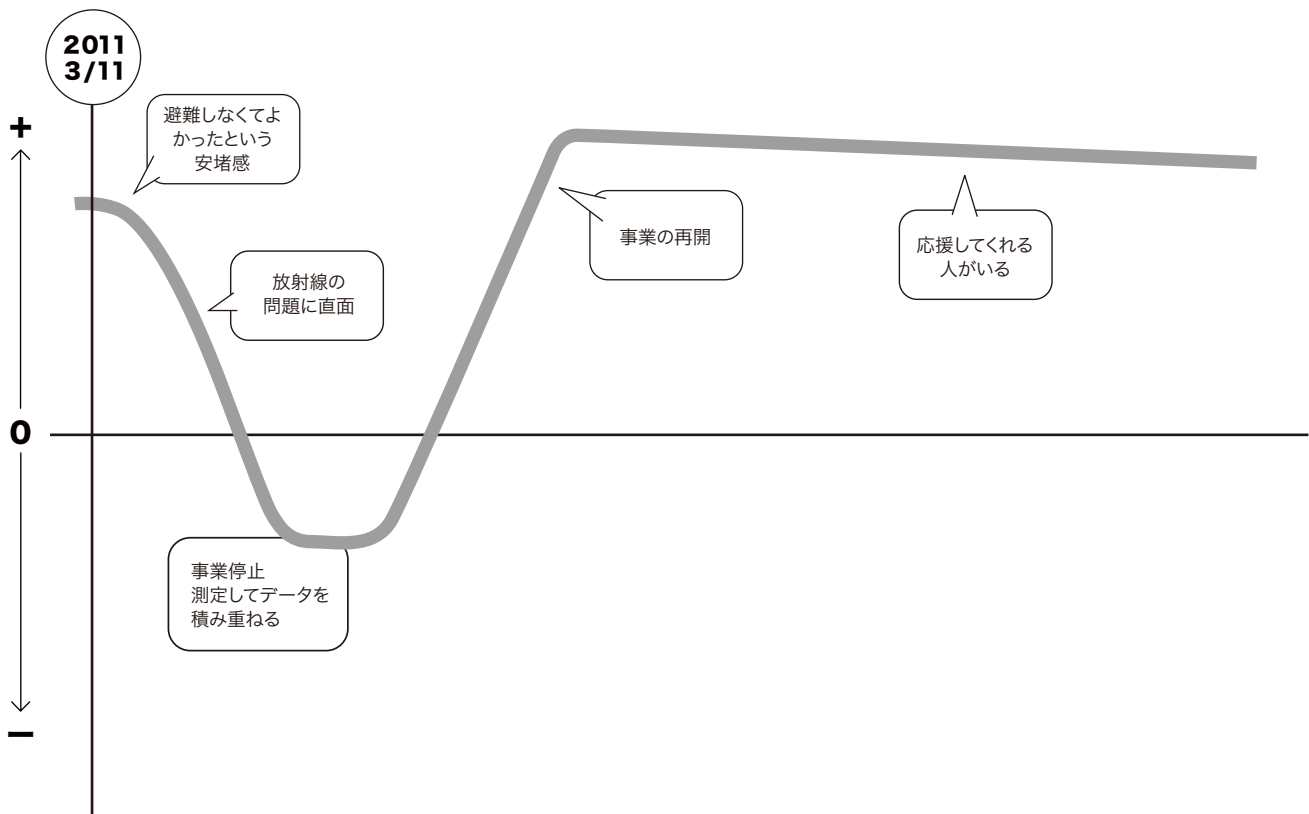


中通りの市町村在住 60代 男性

まずは測ること、判断してもらおう材料となる情報発信が大事。
いまは応援してくれる人も増えている。

中通りの市町村で、移住者を受け入れるための仕事をしていた。原発事故後、自分の住んでいる地域では浜通りの人たちを受け入れたが、自分は避難しなくてもよかったという安堵感があった。生活する上で、ガソリン、食料が手に入らなかった時期が1週間から1カ月ほど続いた。その後、放射線の問題に直面。売りにしていた福島が、検査をしなければならなくなった。東京でのイベントでも、野菜やお菓子やお土産を食べてもらえなかった。山のきのこや山菜は食べられなくなった。

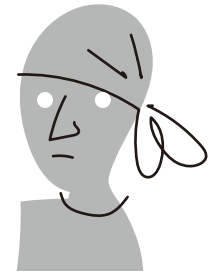
半年ほど移住促進の事業を休業し、土や野菜の測定を続けて、まとめて見られるデータを作成した。判断するのはお客さんだから、データを積み重ねて公表した。半年間測定して、数値も問題ない値だったので、業務を再開した。



<気持ちの変化と理由>

最初は、震災による直接の影響はなく、ちょっとホッとする気持ちがあったが、地元のスーパーが被災し、食料やガソリン、生活必需品が手に入らないことに直面。自分の身は自分で守るんだという気持ちに。

ずっと積み重ねてきていた移住促進の事業を停止して、先のことが心配だったが、放射線量の測定などを積み重ね、データが出てきて、どのくらいかわかるようになってきた。地元の企業でも、輸出品や関東圏へ出荷している商品が一時取引を避けられていたが、勤務先の商工会で放射能測定器を購入し、農作物なども心配な人は必ず測定するようになった。事業を再開し、いまは魅力を感じてくれる人、応援してくれる人も増えている。まずは測ること、判断してもらおう材料となる情報を発信することが大事。



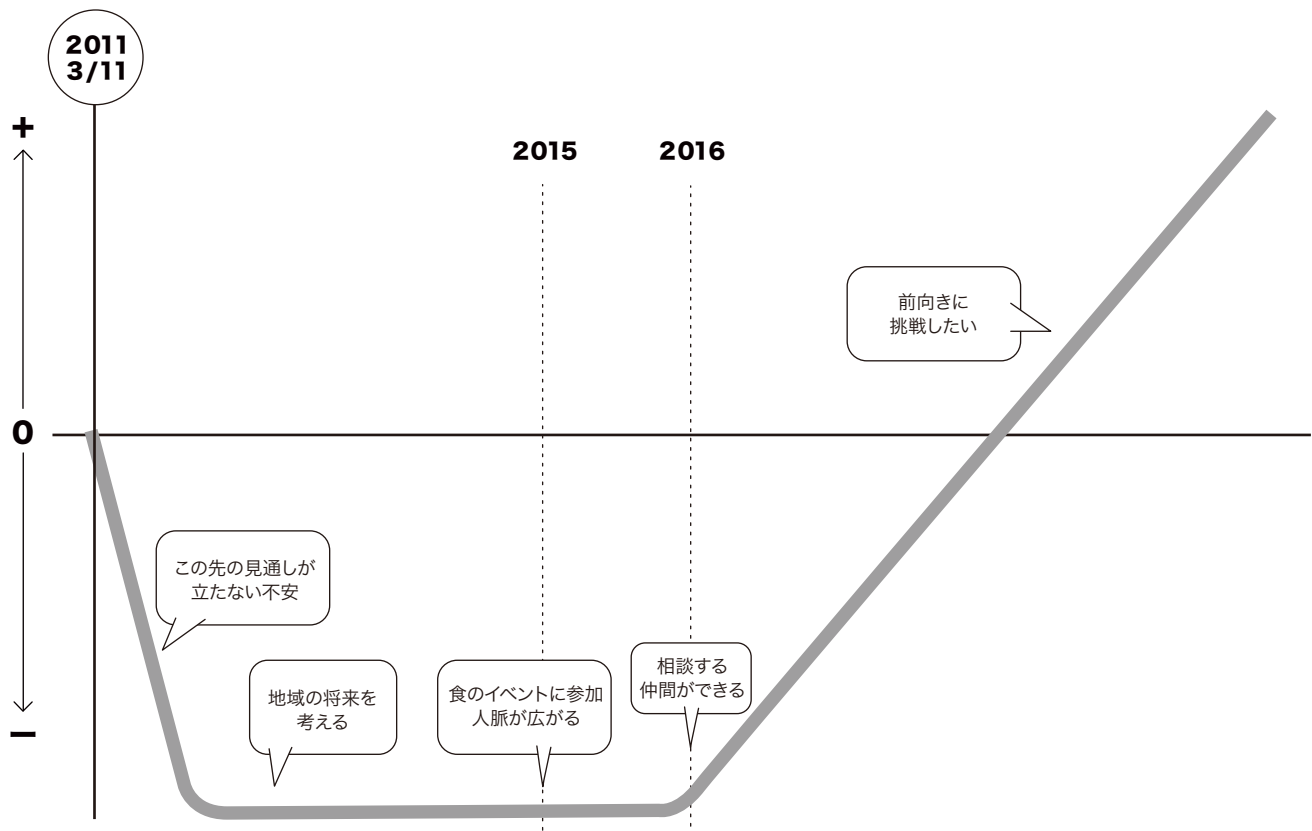
中通りの市町村在住 30代男性

過疎が進む地域を、どうしたらいいか考えた。
仲間とともに前を向いて進んでいきたい。

米農家。転職して、震災の2年前に就農したばかりだった。震災の時は3人目の子どもが妻のお腹の中にいた。原発事故直後は、妻と子どもと関東や関西に短期避難したがすぐに戻ってきた。農業はできるのかと考えたり、放射能に関するニュースを毎日聞いたりする日々を過ごし、国からの判断を元に農業を再開。

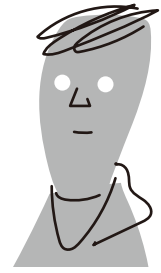
田んぼは大きな面積でやっていたので、最初の年は全袋検査をすることになった。検査の段取りも必要で、また、売れるか売れないかという問題もあった。ただ、コメの市場は動いていた。蕎麦を作っていた畑もあったが、蕎麦は放射能が高くなるので地域の方針として米を作るように。

原発事故をきっかけに高齢の農家がやめて、一気に過疎が押し寄せた。そのため自分が、周囲の農家の農地も引き受けるようになり、経営規模も拡大した。作付けするかしないかはすべて行政判断に従った。果樹農家などで、自分のところは特別で安心安全だと言っていたところもあったが、それは行政がちゃんと調べてからだと思う。



<気持ちの変化と理由>

最初は、この先生活できるんだろうかと不安になった。過疎が進んでいってしまう地域を、どうしたらいいのかと毎日考えた。周囲の農家は保守的な人が多かったが、自分はこの逆境をなんとかできないかと考えていた。その後、食に関するイベントに参加し、知り合った人たちと人脈がつながって、いまの状況を変えていきたいという人たちに出会った。農家だけでなく、困った時に相談ができたり、一緒に仕事ができたりする人ができて孤独でなくなった。農地を守るだけでなく新たなことに挑戦して、前向きにとらえていきたい。

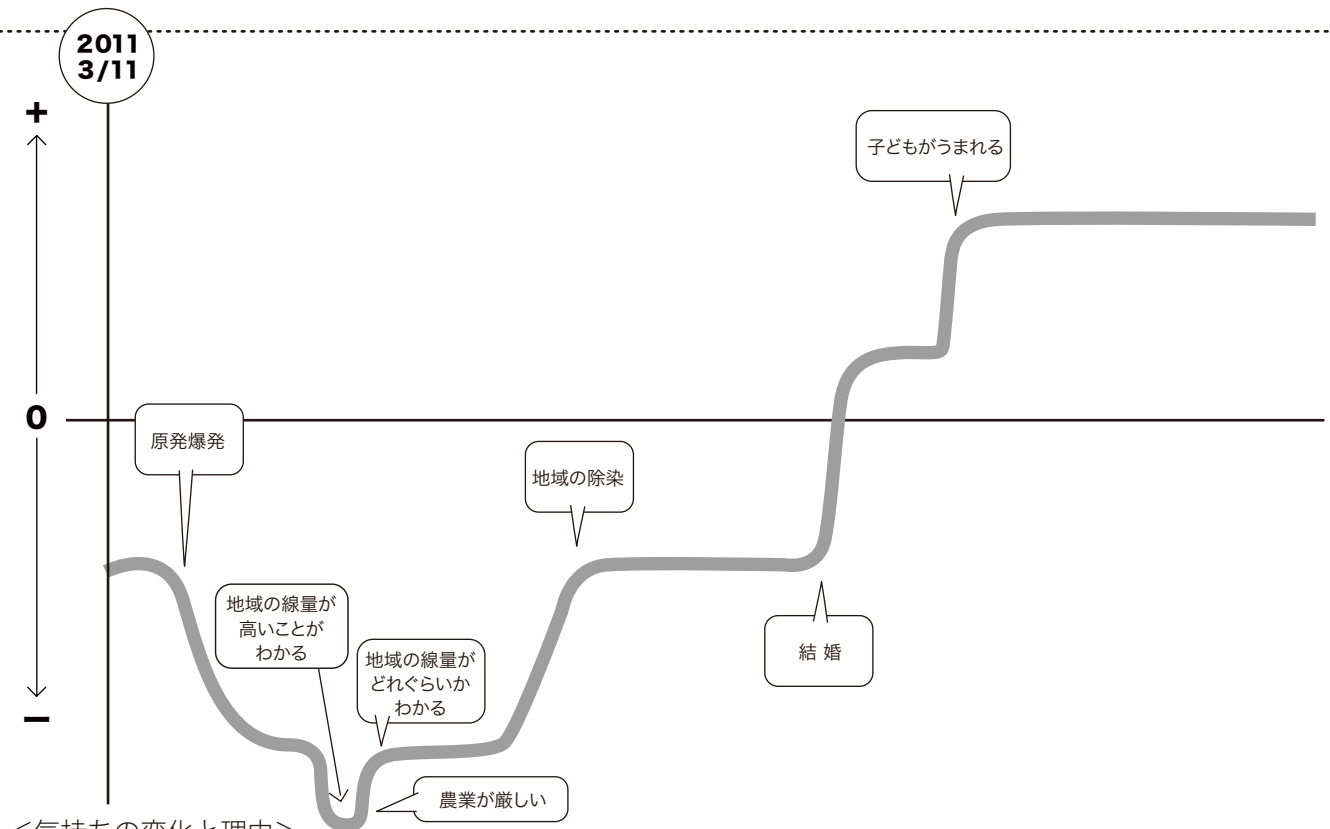


浜通りの市町村在住 20代 男性

やりたかった農業が厳しいということに直面。
みんなで測ることによって実態がわかり、
明かりがついたように自分で判断することができた。

震災当時は大学を卒業したばかりで就職が決まっていた。実家は3月11日の地震では大きな被害はなかったが、4月11日に発生した地震で半壊に。借り上げ住宅が2017年3月末で打ち切りになったため、現在は戸建に両親、妻子と住んでいる。震災当時は実家と連絡がつかず、親戚から親が無事だと聞いた。山間部のため停電し、地域の人には原発が爆発したことも知らずに過ごしていたため、中には川の水で米を炊いている人もいた。

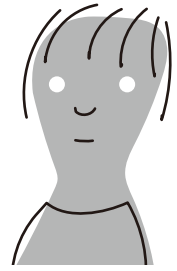
屋内退避が解除されたが、国か県から作付けを自粛するように言われるなど、行政の判断が揺れていた。自宅のある地域は局地的に放射線量が高かった。地区で行政に対する不信感が高まり、専門家の話も聞いて、住民が自分たちで線量を測定した。放射能については、わからなかった時は暗闇のように手探りで怖かったが、みんなで測ることによって実態がわかって安心でき、明かりがついたように自分で判断することができた。その後、除染が始まり、小さな子どもがいる世帯や若い人など希望者は避難して借り上げ住宅に住めるようになった。借り上げの期間が終わり、現在は一戸建てを購入し住んでいる。



<気持ちの変化と理由>

震災で、家族と連絡もつかず、どんと気持ちが落ちた。原発が爆発し、自分の地域の放射線量が高いことがわかって、自分の望む農業が厳しいということに直面し、行政に対する不信感も生まれてさらに落ちた。しかし、地域の人たちと測定して、線量がどれぐらいか理解できるようになった。実態がわかり、判断材料ができたことで除染までこぎつけ、宅地だけでなく農地の除染も進んだ。結婚し、子どもが生まれて気持ちは上がっていった。本当は、自分の住んでいた場所を子どもの故郷にできればと思っていたが、いつか、連れて行くことができれば。

農業が好きで、大学時代も毎週帰ってきてトラクターに乗っていた。故郷は高齢化が進み、除染が終わるまでに農業をやめてしまった人もいる。そのためにも、いつかは農業がやりたいというのが夢。地域の人が農地を通して繋がっていた風景をもう一度見たい。

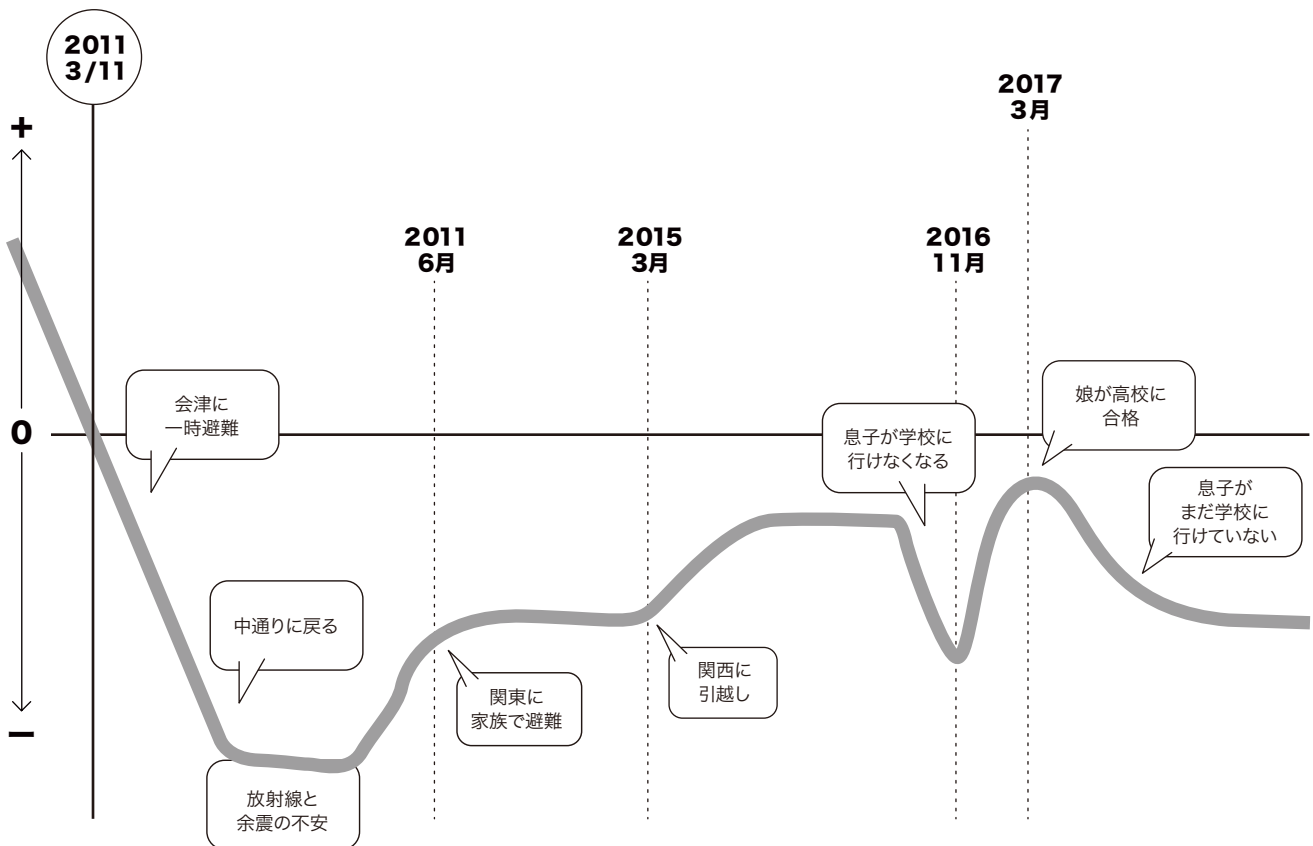


関西地方在住 40代 女性

いずれは戻りたいと思っているし、福島が好きだ。
だけど今は戻れない。

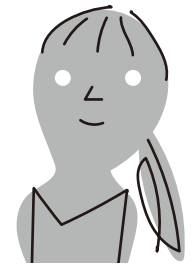
中通りの市町村生まれ。夫が転勤族で、やっと夫婦の実家のある中通りに震災前戻っていた。その時は、親戚とつながりのある生活が本当に楽しかった。震災後、家の中がめちゃくちゃになり、心配した自分の母の勧めで、会津に家族全員で避難。子どもが体調を崩したり熱を出したりしたため、その後、友達の勧めで関西地方へしばらく避難した。(夫は福島) 中通りに戻ったが、学校の子どもが半分になっていて不安になった。子どもがもどしたり、体調を崩したので、別の場所に移ろうとしていて夫の会社にも相談しており、6月に転勤が決まり関東地方へ移って気持ちが楽になった。娘は1カ月でなじんだ。息子はなかなかなじまず、夏休み明けに学校に行けるようになった。

2015年に夫の転勤で関西へ。息子は新しい学校になじみ、友達もできていたので大丈夫だと思っていたけれど、関東の友達に会いたいという思いがあったり、体調を崩したりで、現在は学校に行けていない。



<気持ちの変化と理由>

地震で家の中がめちゃくちゃになり、余震の不安が大きかった。一時避難して帰ってくると、学校の子どもも避難して少なくなっており、また不安になった。関東に避難して気持ちが楽になった。その後、関西に引っ越しして、福島からの距離が離れたので、更に気持ちが楽になった。しかし、息子が不登校になり、やっぱり避難の影響があったのかと悩んだ。娘が高校に合格して気持ちが上がったが、息子がまだ学校に行けていないことや、子どもに甲状腺検診で異常が出たので、震災前に中通りにいた頃よりは気持ちが下がっている。いずれは戻りたいと思っているし、故郷も好きだ。だけど今は戻れない。たぶん戻らない。

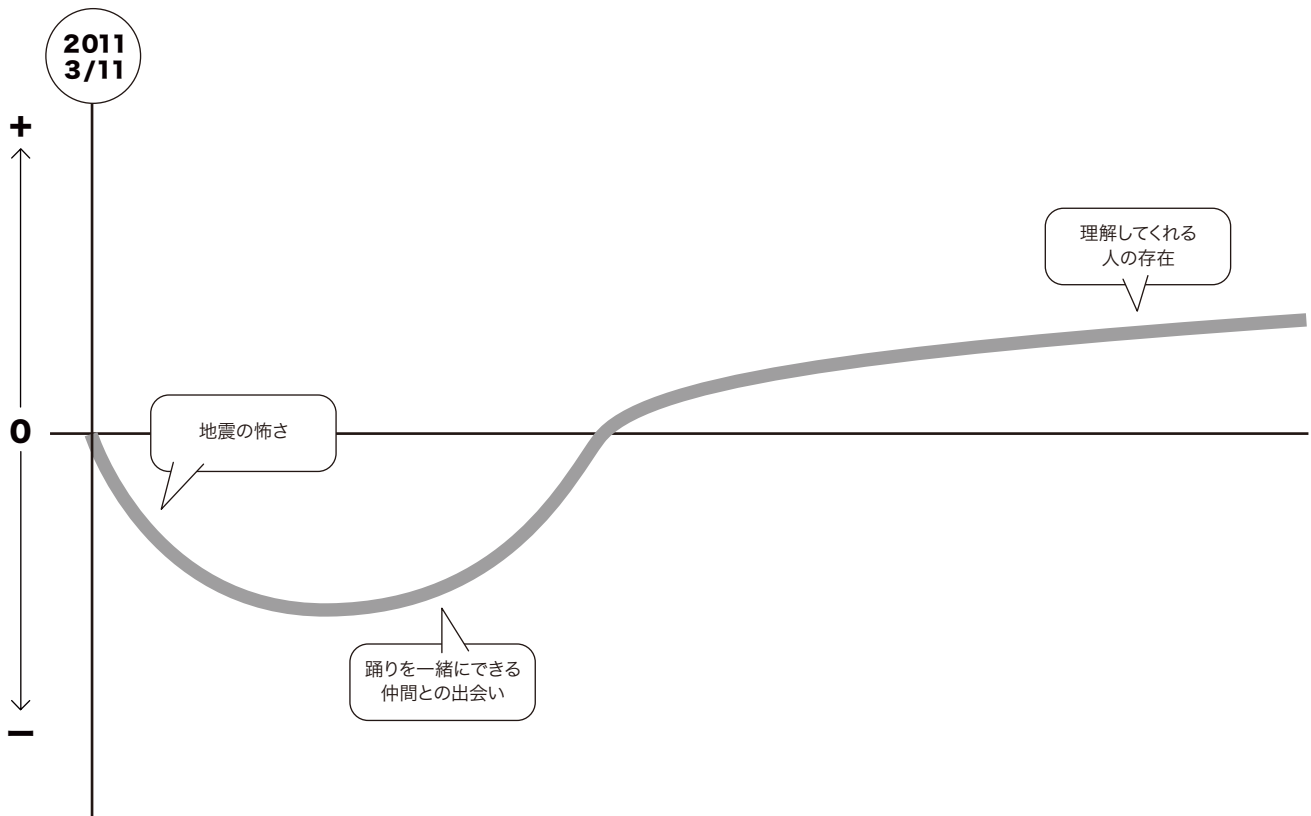


関東地方在住 20代 女性

仲間との出会いで気持ちが前向きになった。
自分の目で見て感じてきたものを信じて生きていきたい。

震災当時中学生だった。地震の揺れと原発事故でパニック状態になり、母の実家である関東地方に自主避難。兄弟の学校の都合で一旦福島に戻って1年ほど過すが、母が病気を抱えていたことや、父が単身赴任で福島にいなかったこともあり、両親の関係の問題で関東地方に再避難して暮らしている。

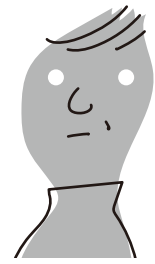
仕事の面接時に、履歴書に福島のことを書かなければならず、自分は特に隠していないものの、いろいろ聞かれることに戸惑いを感じている。いろいろな考えの人がいるが、自分の目で見て感じたものを信じて生きていきたい。



<気持ちの変化と理由>

地震直後は揺れが続く不安で、その時自分が何をしていたかも思い出せないくらいだった。数百メートル先は警戒区域なのに自分たちは自主避難となり、同じような被害にあっても線引きされてしまったことに、理不尽な思いをした。関東の避難先での被災者交流会に、母が参加していたが、母の調子が悪くて行けなくなった際、自分が一人で行き、その時、福島で踊りをやっていた人と巡り会った。自分も小さい頃に踊りをやっていた、ダンスなどに興味があったこともあって、その人と一緒に踊りのチームを立ち上げることになり、気持ちが前向きに。その後は上向いている。最近は自分の背景を理解してくれる人がいる。

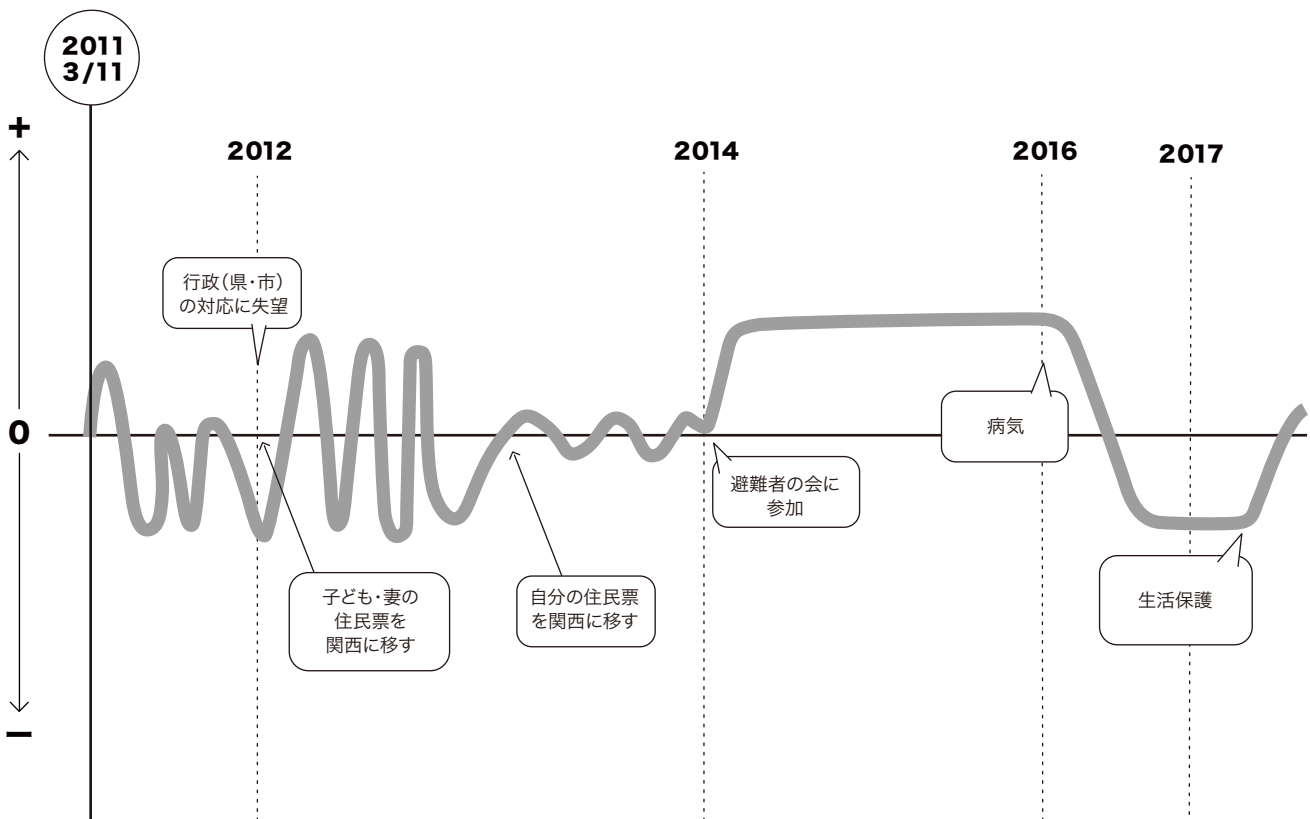
震災や原発事故後、大人たちは子どもにきちんと状況を説明せず隠してきたように感じる。でも、次にどうするかを考えたとき、伝えていかなければいけない事実があると思う。



関西地方在住 50代 男性

原発事故への行政の対応に失望した。
必要な支援が切り捨てられている。

浜通りの市町村で仕事をしていた。震災直後は、近所の独居高齢者の確認や集会場への誘導をしていた。12日の朝、お客さんのところに向かったが警察に止められた。原発が危ないということで自宅に戻ったところ、原発が爆発した。子どもだけでも避難させたいという思いで子どもを東京まで送り、兄弟のいる関西に避難させる。14日に3号機爆発。家族全員での避難という考えに切り替え、妻と母（介護必要）とで関西の兄弟の実家に避難。お客さんの中に放射線物質を取り扱っている人がいたので、なるべく離れた方がいいという知識があった。その後、関西で公営住宅に移り、2017年3月まで住んだが、自主避難者への支援が打ち切りとなり退去。別の公営住宅に移る。2016年2月に病気で倒れる。一気に年を取った感じがある。現在は、仕事がない状態で、生活保護を受けている。



<気持ちの変化と理由>

震災後、避難して助かったと思い、気持ちが上がった。原発事故に対する行政（福島県など）の対応に失望した。子ども、妻の住民票を関西に移した。関西で生活基盤を作るため、仕事をしていた。仕事をやっているときは上がり、やめると下がる。自分の住民票も関西に移し、少し落ち着く。2014年から避難者の会に参加したが、会の中の人間関係が大変になり参加しなくなった。病気になり、今はマイナスのままではあるが、生活保護を受け、何とか生活できるようになり少し落ち着いた。

原発事故に対して、行政のやっていることはねじ曲がっていると思う。「大丈夫」を強調している。住んでいた市町村は、原発事故でここから避難した人はいないという、フォローする義務はないという姿勢を感じる。必要な支援が切り捨てられている。

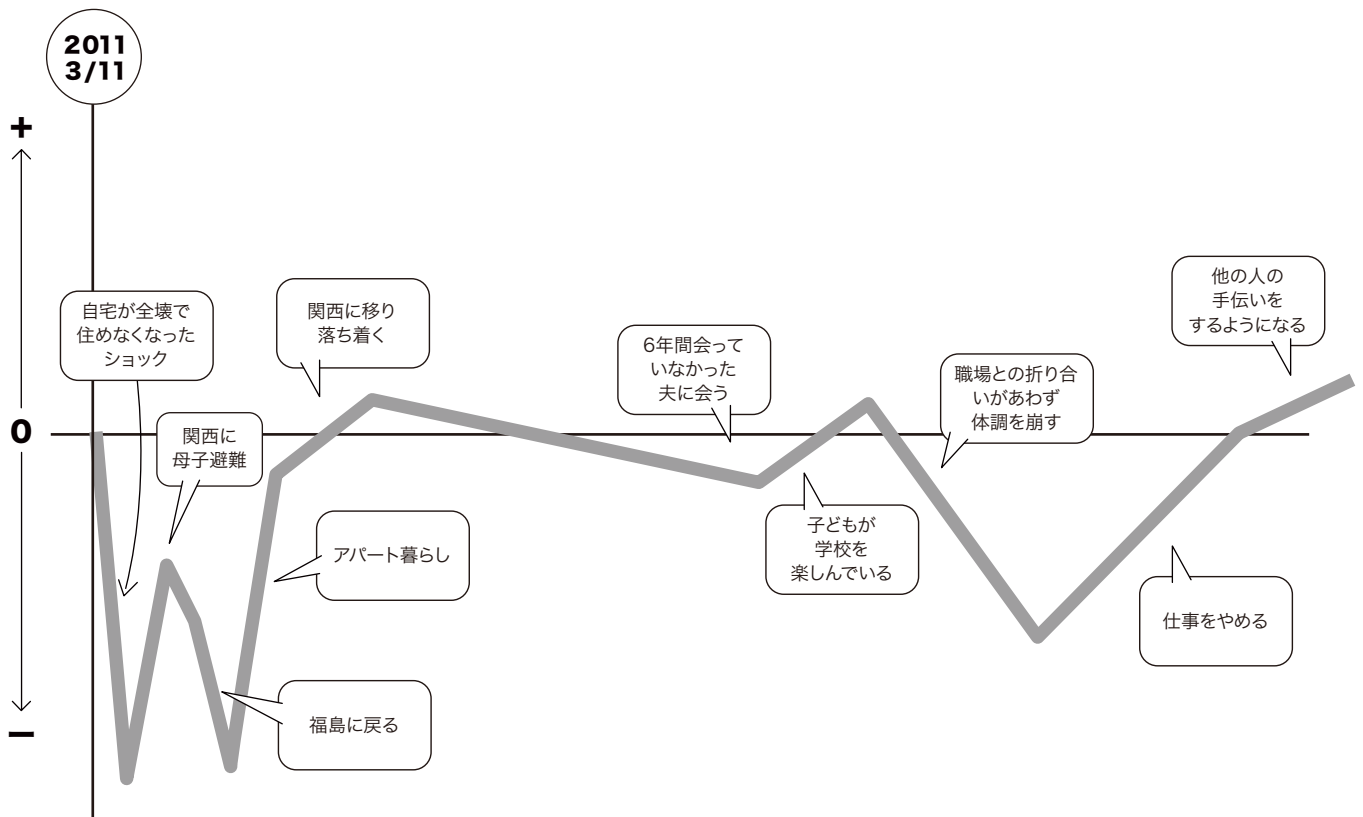


関西地方在住 40代 女性

後ろめたい思いがあったけれど、ここにいてよかったと思えるようになった。子どもは素直に成長していったと思う。

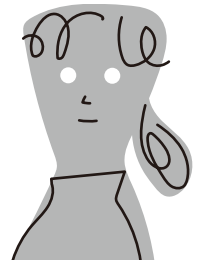
関西生まれ。結婚を機に中通りの市町村へ。震災では、自宅が全壊（地盤のズレ）、住めない状態になり、夫の実家へ。その後、原発が爆発するかもしれないということで、親族の勧めで関西の実家へ避難（自分と子ども）。1カ月関西で暮らす。

学校が始まり、仕事にも戻るため中通りに戻る。夫の実家にいたが、姑と関係がうまくいかず、アパートで暮らすようになった。中通りでは、夏場でも子どもたちが長袖を着て登校し、マスクをしていて、自由に遊ぶことができなかったので、関西に行くべきかと悩んでいた。仕事を整理し、実家の勧めもあったので関西に移った。息子たちは、はじめは関西弁になれず、また、次男は幼稚園に行くことをいやがったが、今は、良いお友達と先生に出会うことができ、元気になっている。今は、実家に住んでいるという安心感がある。



<気持ちの変化と理由>

震災で自宅が全壊、ショックで声も出せないくらい落ち込んだ。関西に避難して落ち着いたが、中通りに戻らなければならないと思い、また落ち込んだ。夫の実家から離れ、アパート住まいをすることで気持ちが上がった。その後、関西に移り、落ち着いた。子どもの卒業式で、6年間会っていなかった夫に会い、気持ちが下がった。息子が、自分で部活を決めるといって、学校を楽しんでいるようなので、また上がった。その後、職場との折り合いが合わず、体調を崩し、支援団体と話して仕事をやめることにした。いまは、団体の活動にやりがいを感じ、人の役に立っていると思えることで、気持ちが明るくなった。

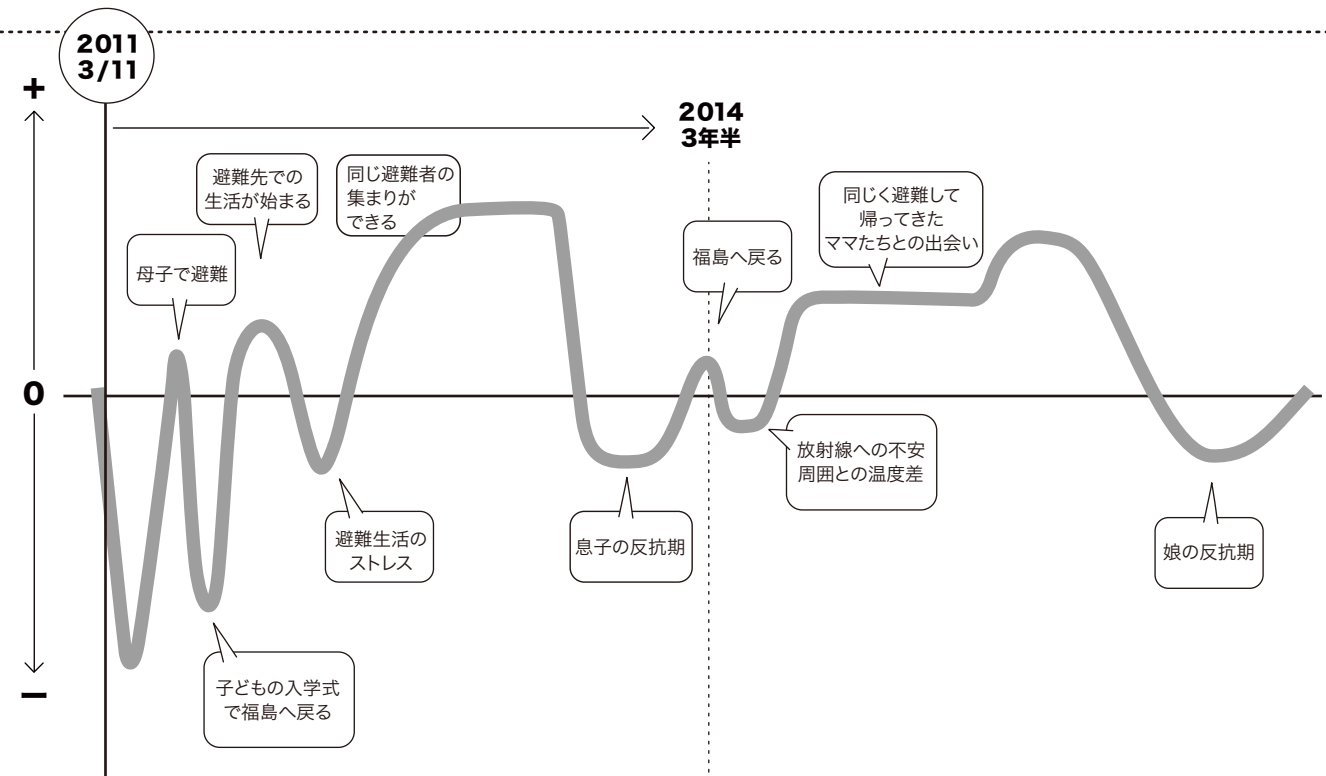


中通りの市町村在住 40代 女性

福島県に戻ると、放射線への温度差にびっくりした。帰還後は、同じく帰ってきたママたちに気持ちが話せて元気になっていった。

中通りの市町村から東北地方の県に母子で自主避難。3年半ほど過ごしたが、息子の受験があったのと、夫が離れ離れの生活に限界となり、地元へ帰還した。

震災当時は知人が放射線量を測定しており、当時住んでいた市町村で23マイクロシーベルト/時だった。子どもと、窓を開けず換気扇もつけずにカーテンも閉めて生活していた。子どもは守らなきゃという気持ちで、夫の了解を得て、友人(母子)とともに避難。子どもの小学校は4月から通常通り再開したので、一度戻ってきたが、すぐに福島県産の食材を使った給食が始まるなど、学校の対応に不安を覚えた。給食を停止してお弁当を持たせたが、子どももストレスが溜まっていて、東北地方にできた借り上げ住宅をきっかけに避難を決めた。

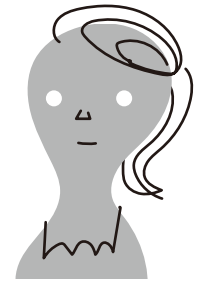


<気持ちの変化と理由>

震災当時はどん底。東北地方に行ってから3カ月ぐらいは解放された感じで楽しかった。半年くらいして慣れてきて、福島に帰ったときの不安や、夫のことなどを考え始めて、ストレスが体に出てきてしまった。避難先の方の助けもあり、避難したお母さんたちが集まれる場を作った。手芸などをしながらおしゃべりでき、同じ思いを共有できて徐々に気持ちが上がっていった。

息子が中学生で受験があったのと、夫が離れ離れの生活に限界を感じて戻ってきてくれと言い、3年半ほどの避難生活を終えて福島に帰ることになった。福島に戻ると生活する上で、洗濯物や食べ物などについてまた考えなければいけなくなってストレスを感じた。ただ、ママ友たちは避難していたこともわかっていて、特に何も言うこともなく迎え入れてくれた。同じく避難して帰ってきたママたちと話せる集まりがあったので、不安な気持ち、心の内をさらすことができ元気になっていった。

息子が高校生になり、福島で就職を決めるといふ。ずっと福島で仕事をして家庭も持っていくことに対して、本当にそれでいいのかと思うが、本人がそう決めている。娘も福島での将来を考えている様子。いまは、家族の絆は深くなったと思う。



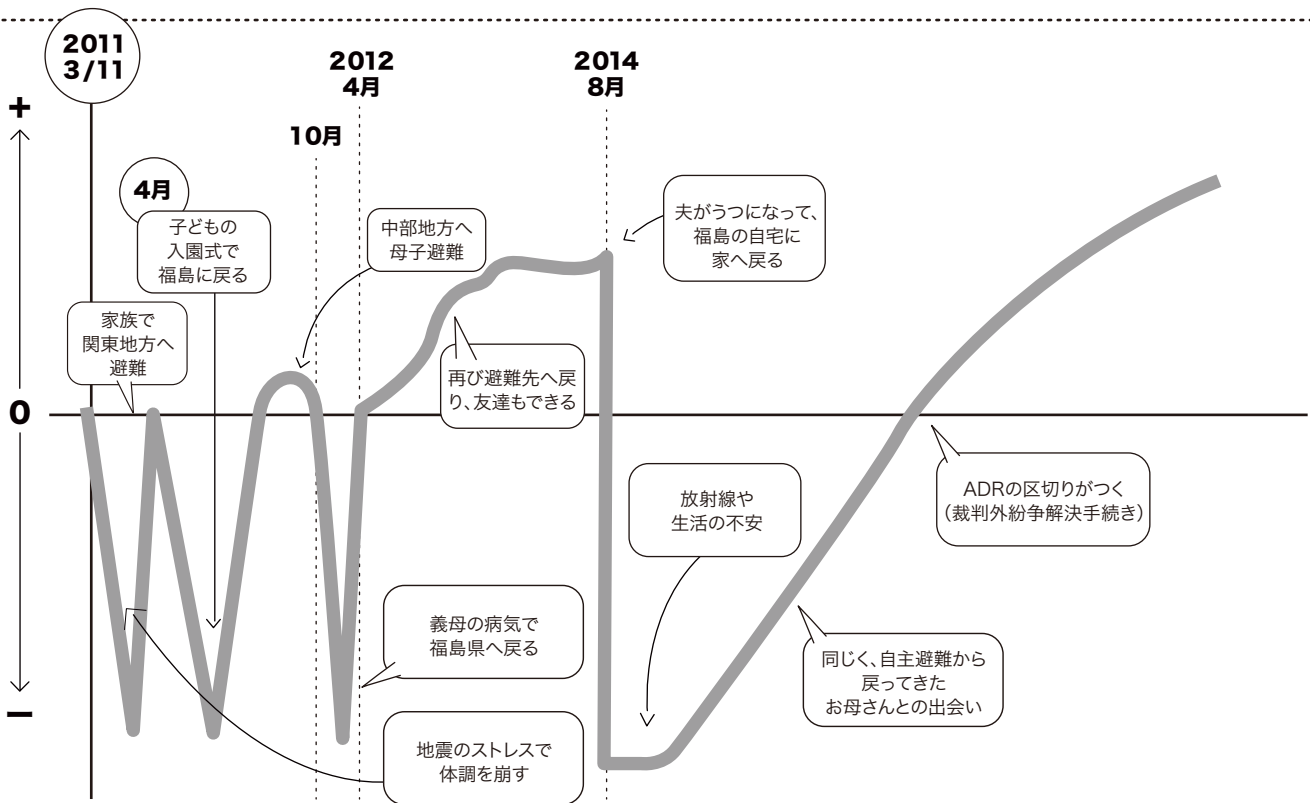
中通りの市町村在住 40代 女性

自主避難で肩身の狭い思いをした。でも、誰かに助けられたぶん、今度は自分たちができることをしたい。

中通りの市町村から、一時的に家族で避難したのち、中部地方に母子で避難。夫は避難について理解し、後押ししてくれていたが、離ればなれの生活の限界を感じ、帰還。

1歳と3歳の子の子育て中に震災が起きて体調を崩し、帯状疱疹や熱が出た。停電もしており、姉が電話で避難した方がいいと言ってくれたため、家族で避難し、初めて原発事故の様子を知った。上の子の入園式で戻ってきた際、マスクをして長袖長ズボンで、本当に子どもらしい生活ができるだろうかと悩み、受け入れ情報の出た中部地方へ避難。しかし、避難先には避難指示区域から避難している方々もいて、自主避難者は家もあるし、誰かが亡くなったわけでもない、肩身が狭い思いをした。子どものことも考え、生活する場所をつくって幼稚園などに通わせた方がいいと思い、家を借りた。

夫の母が亡くなり、夫は夫の父と2人暮らしになった。久しぶりに福島に帰ってきたら、夫はうつになっていて、家の中もぐちゃぐちゃ、顔色も真っ青で、子どもが呼びかけても目に入らない感じだった。これは限界が来ているなと思って、3年半で子どもとともに福島に戻ってきた。



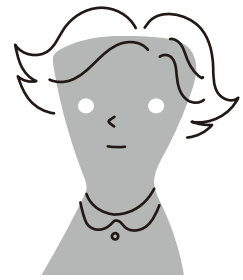
<気持ちの変化と理由>

最初に関東に避難した時はほっとした。また入園で戻ってきて、落ちて、中部地方へ行った時に落ち着いた。10月に義母の病気で福島に帰ってきて、義母が亡くなり、また中部へ。元気になったり、落ち込んだりを繰り返していた。避難先では自分も子どもも友達ができ、同じく避難者の方もいたので安心して生活ができた。どんどん前向きになっていった。

2014年8月のお盆に合わせて帰ってきたところ、家の中は荒れ果てていて、夫がうつ状態になっているし、義父と夫の関係も非常に悪化していて、帰ってくるしかないなと思底辺に。3年の年月で周囲も知らない人ばかりになっていたの、子どもたちも友達がなくて、自分も気力がなかった。放射線や環境のこと、外遊びをさせていいかなどが心配で、さらに二重生活の賠償に関する手続きもわからず諦めていたが、自主避難から帰ってきたママの会があり、そこでADRについて教えてもらうなど、経験談に助けられた。同じ思いをしたお母さんたちに出会えるようになり、ADRの区切りもついて、狭かった視野が広がった。誰かに助けられたぶん、今度は自分たちができることをしていきたいと思っている。

group
6

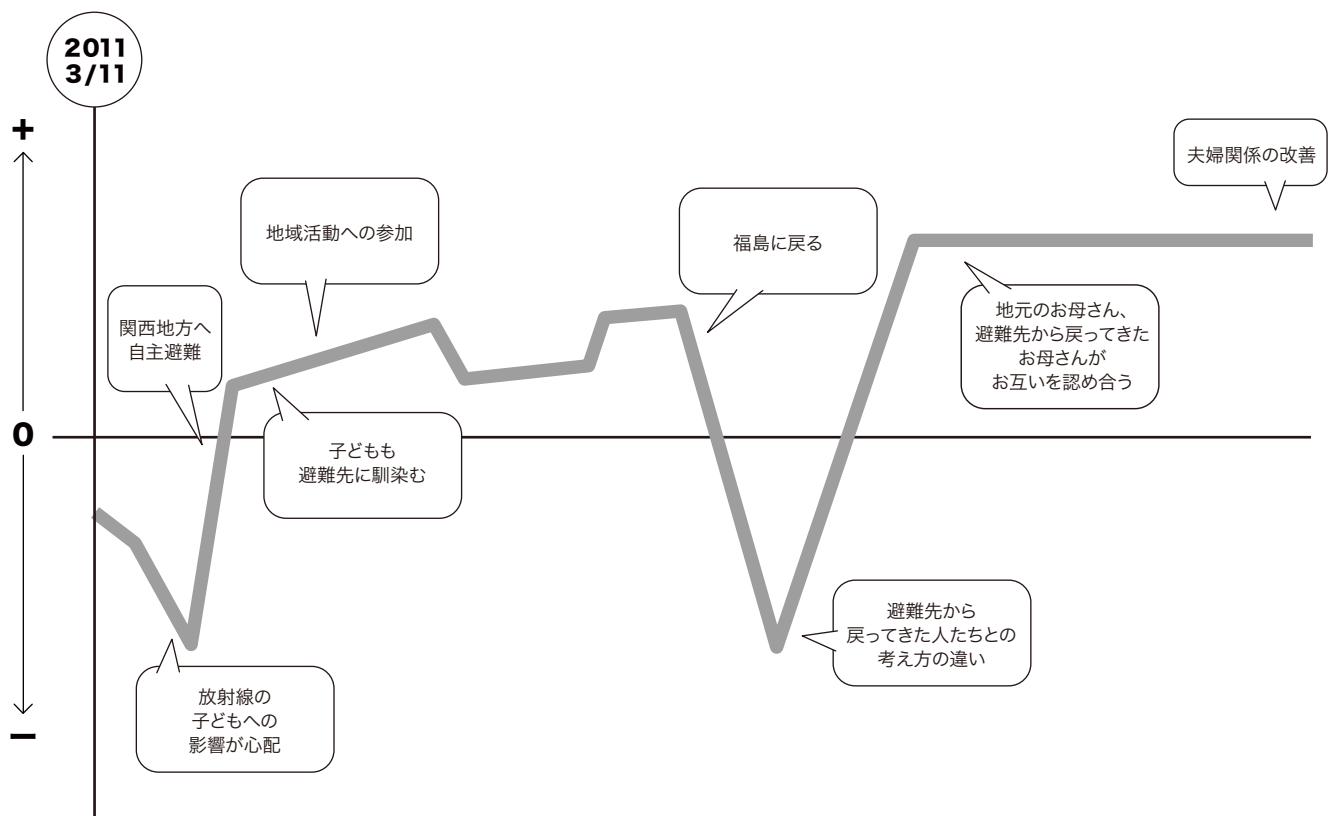
避難指示対象外地域から自主避難後、帰還



中通りの市町村在住 40代 女性

戻ってからも、周りのお母さんとも良い関係で付き合っている。
お互いの苦労を認め合っている。

中通りの市町村生まれ。震災直後、周りの友達家庭は避難したが、入院していた子どもの検査があるため避難できなかった。線量が高かった1~2週間の間に避難できずに、子どもにはごめんねという気持ちだった。甲信越地方に保養に行き、何もかも普通に動いていることに驚いた。福島に戻りテレビが線量を伝えたりするのを見て、普通の暮らしがしたいと思い避難を考えた。姑と夫はあまり賛成していなかったが、子どもたちに子どもが生まれた時、何かあったら嫌なのでといったら納得してくれた。関西に避難して、最初の夜に心の底から深呼吸できたと思った。自分にも周りが良くしてくれた。2013年、子どもの学年などのタイミングを考え福島に戻った。

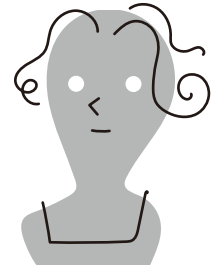


<気持ちの変化と理由>

震災前、夫とは喧嘩理由が多くマイナスだった。震災後、線量が高いところでの暮らしで子どもへの影響に不安があった。避難して安心し、ようやく落ち着いた気がした。避難先では地域団体の活動を手伝った。そこでいろんなことが勉強でき少しずつ気持ちが上がっていった。避難した母親の中で、自分は大変だというスタンスで変わらない人に違和感を感じるようになった。地元に戻り、一時避難していた人たちで支援活動をしようとしたが考えが合わず、気持ちが下がった。その活動から離れ、今は地元のお母さん、避難先から戻ってきたお母さんがお互いの苦労を認め合い、良い関係で付き合っている。夫婦関係も震災前より良くなった。

group
6

避難指示対象外地域から自主避難後、帰還

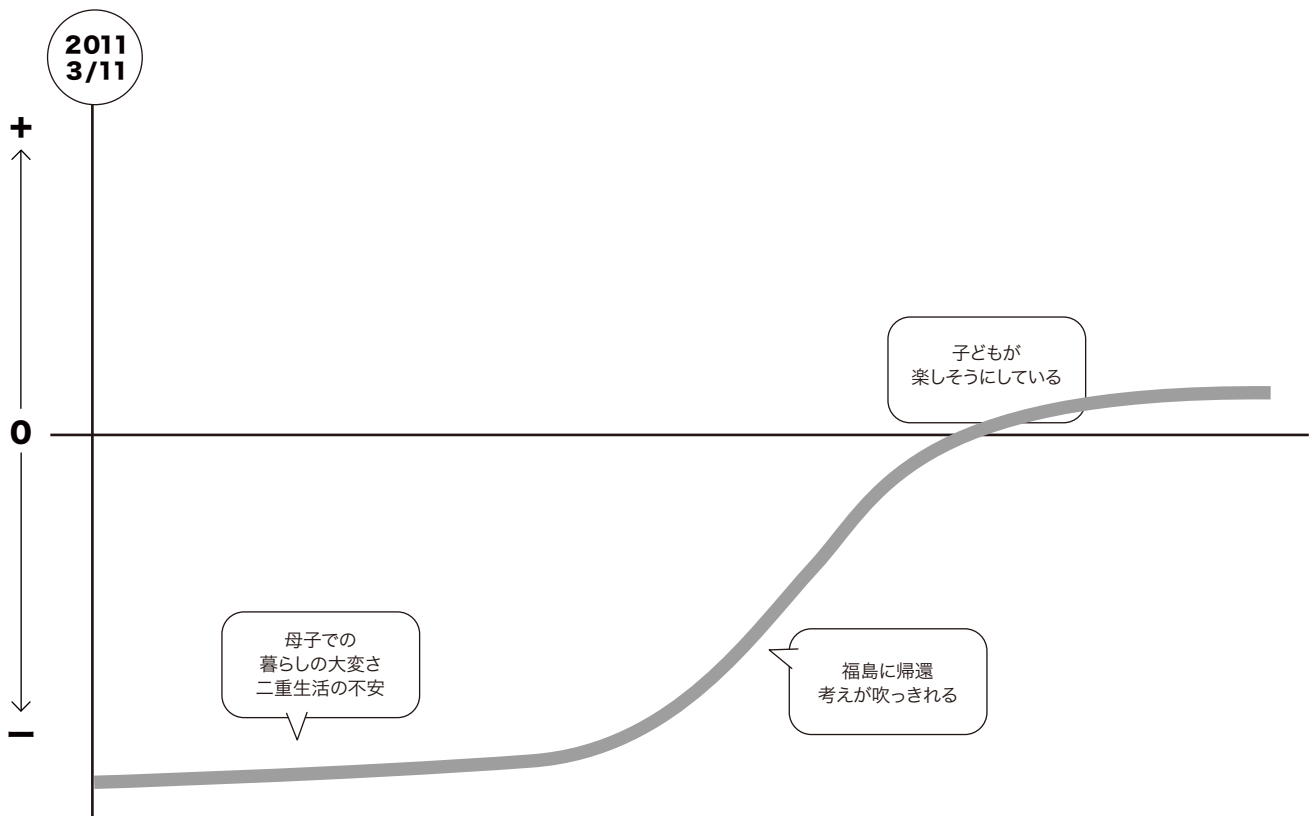


中通りの市町村在住 30代 女性

もし自由に選択できるなら、
自分の気持ちとしては
友達もいるので、避難先に戻りたい。

中通りの市町村在住、子ども2人と夫の4人家族。震災当時、友人と甲信越地方の民宿に自主避難して1ヶ月ほど過ごし、その後、避難先のアパートを借りて生活。夫が週末に福島から避難先に通っていた。3年前、上の子の小学校入学に合わせ福島に戻る。自分は戻ってきたくはなかったが、ずっと二重生活はできないという限界もあった。

帰ってきたばかりの時は、実家も近いから安心感があったが、周りの人はもう放射能は気にしていない人ばかりだった。戻ってきて友達もすぐにでき打ち解けたが、放射能のことは話せず、相談できるのは、まだ避難している友達だった。



<気持ちの変化と理由>

2011年に子ども2人を連れて自主避難したが、生活のことでいっぱい覚えていないくらい。福島に戻ってくる前は不安だったが、3年前に戻ってきてからは、吹っ切れたというか、子ども達も楽しくやっているからそれでいいかなと思うようになった。自分のことはあまり考えず家族のことでそう思うように。

夫は、もう放射能は大丈夫だというのが、公表されている線量は信じられない。子どもたちには、建物の隅っこなどにある落ち葉とかは触らないでと言っている。でも、子どもたちは楽しんでいるし、周りの子がやっているののうちばかりダメとは言えない。

もし自由に選択できるなら、自分の気持ちとしては、友達もいるので避難先に戻りたい。



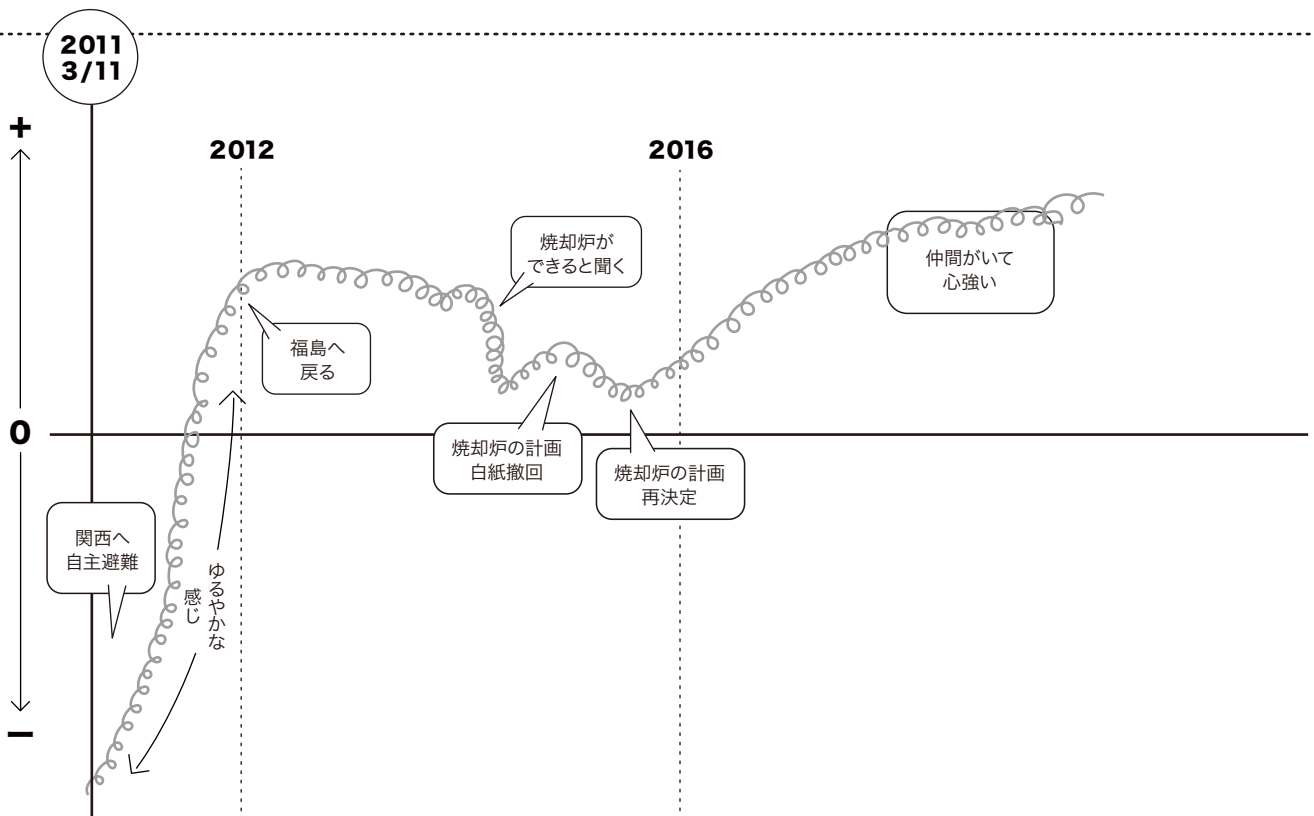
中通りの市町村在住 40代 女性

学校も気をつける、親でも家庭でも気をつける、子ども自身も気をつける、とやればよい。

農家。地震の影響で自宅がゆがんだり壁にひびが入ったりした。震災当時は0歳の子どもがいたこともあり、夫のおじに避難しなければだめだと言われて、バタバタと荷物をまとめて車で実家の関西へ。そこで11ヶ月ほど過ごしたが、実家の父に「家族は一緒にいた方がいい」と言われたこともあって戻ってきた。子どももすぐ馴染み、周囲も抵抗なく受け入れてくれた。

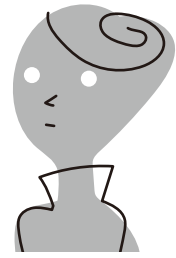
最初は地震の揺れが怖かった。だから原発の方にあまり意識が向かなかった。その後は、子どもが小さいのでずっと家の中に閉じこもっていた。その年は春に苗を作って出していたが、売り上げは相当落ちた。震災前は、苗を育てる時に腐葉土を山から集めて来ていたが、それができなくなり全部買った肥料を使うようになった。

近くに小中学校があるが、ちょっと離れたところに可燃性の除染廃棄物・放射性廃棄物の減容化焼却炉ができるという計画があり、一度はみんな反対して署名して撤回されたが、1~2キロ離れたところに決まった。地域全体では今も意見が割れていて、お互いを見る目が変わったような気がする。放射線に対する意識は自分たちもあんまり考えずにきたと思うが、もう一回ちゃんと考えなければいけない。学校も気をつける、親も家庭でも気をつける、子ども自身も気をつける、とやればよい。本当の意味での納得した生活を送りたい。



<気持ちの変化と理由>

最初は、地震の不安もありどうしたらいいのかと混乱した。関西は実家なので安心感を持って暮らすことができた。福島に戻って、周りもすぐに受け入れてくれて、農業の手伝いを開始。2015年ごろ、近くに除染・放射性廃棄物の焼却炉ができることになり、説明会に参加しても、納得はいかなかった。一度は住民の反対で撤回されたが、知らない間にだまし討ちのような形で決まっていた。不安を解消するためにも、もっと議論すべき。2016年に保護者で集まって話す会があって、有志の会をつくった。お父さんお母さんたちが関わってくれるようになって、心強くなった。そこからは混乱しつつも、仲間がいるという気持ちになっている。



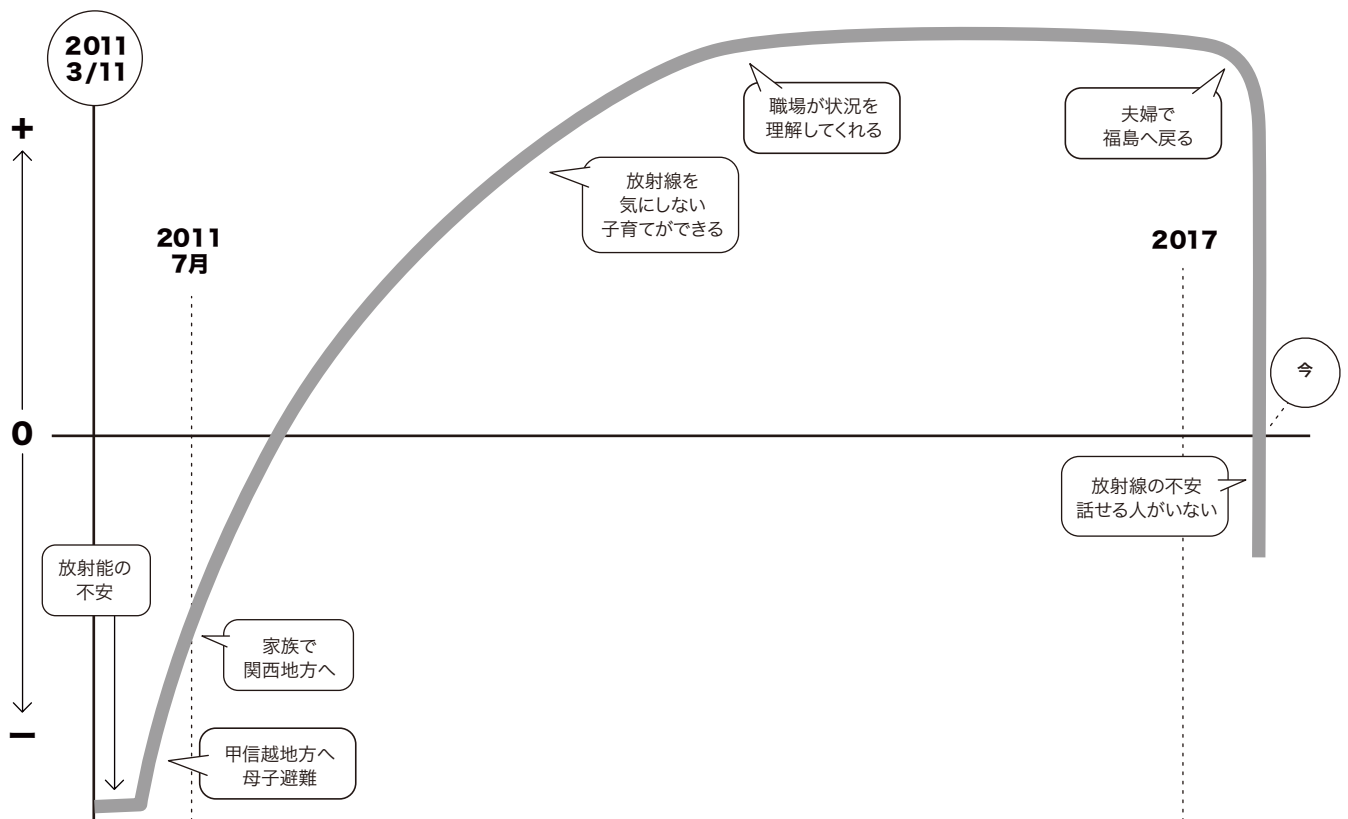
中通りの市町村在住 40代 女性

福島に戻ってきてからは震災後のことを深く聞けない。
どれを信じていいかわからない。正しい情報がほしい。

震災後、甲信越地方に3ヶ月ほど母子避難していた。その後すぐ、夫の転勤のため家族で関西に行き、6年以上を関西で過ごした。自分は前向きではなかったが、夫の希望で2017年秋に福島に家族で戻ってきた。

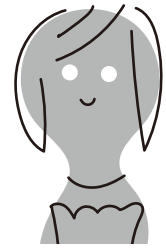
母子避難した時は、親切に対応していただいたが、避難している人たちの環境がまちまちで、お互いに違いを強調したり、賠償金の話で嫌な面をみたりした。借り上げ住宅にいつまでいられるのかもわからず、二重生活は限りがあると感じていた。

関西に移って子育てを7年弱してきたので、そのまま関西で暮らしたかったが、夫が福島に戻って拠点を置きたいというので、福島に戻り、中古住宅を購入。夫は帰りたい気持ちが強く、福島は放射能も大丈夫、帰らないなら離婚するか、というくらいの選択だった。自分は、ママ友などから危ないと聞かされていたので、不安があった。精神的に、元住んでいた家には戻りたくなかった。正しい情報がほしい。



<気持ちの変化と理由>

震災直後は放射能のことが不安でしょうがなく、底辺だった。関西では放射能を気にすることもなく子育てができ、状況を理解してくれる職場も見つかったので、楽しく過ごしていた。福島に戻ることになり、住居や学校を探す際には、もう子どもを転校させたくないというプレッシャーも感じた。自分は戻りたくなく、抑えきれない気持ちがあつて落ち込んだ。でも、自分がいま落ち込んでいると、子どもも関西に帰りたくなってしまってもいけないので、関西の話はしないようにしている。戻ってきてからは、地元の人に失礼かと思って大丈夫なのかとも聞けず、付き合いのないガス会社の人にさりげなく聞いてみたりする。でも、普通に生活している、という人がほとんど。同世代のママさんでまだ知り合いがないので、震災後のことを深く聞けない。子どもは転校の戸惑いもある。除染している公園で遊ばせて大丈夫なのかとか、どれを信じていいのかわからないから、本当はもっと聞きたい。もうちょっとしたら慣れるのかな、でも自分次第だと思っている。

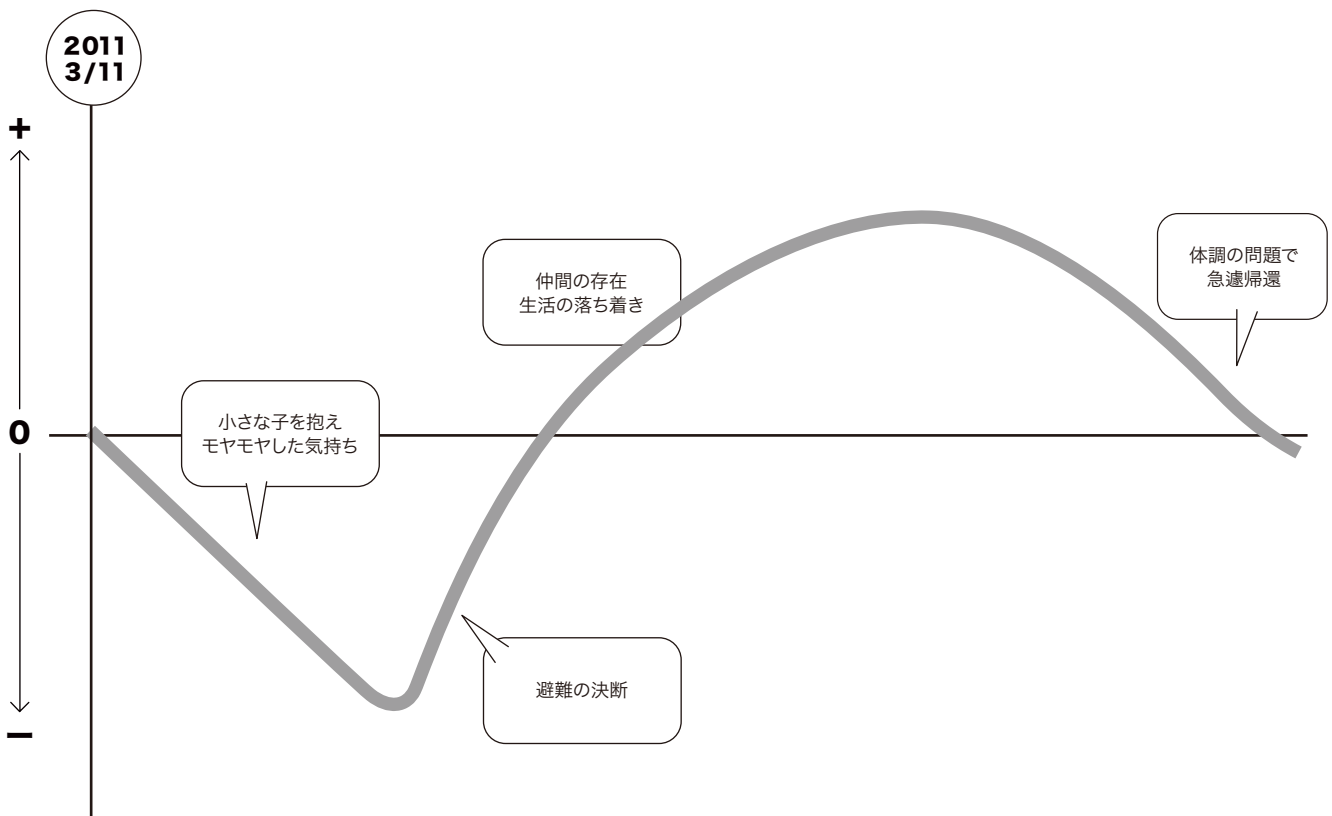


中通りの市町村在住 30代 女性

同じ避難者のコミュニティもあり、
地元の人にもなんでも話すことができた。
避難できたのは財産だと感じている。

地震により、当時行き来して生活していた夫の両親の家が半壊に。2011年9月から甲信越地方に自主避難した。子どもを2人連れて避難生活を6年ほど送っていたが、体調の問題で急遽、地元に戻って来ることになった。

震災当時はモヤモヤした気持ちを抱えていた。子どもが生まれたばかりで育児休暇中だったが、夫には一緒に避難できないと言われていたため、避難するかしないかですずっと悩んでいた。東北地方に避難している友人から、甲信越地方にも避難できる場所があると聞いて急遽出発。だめだったら戻ってくればいいや、後悔はしたくないという気持ちで、初めて自分で大きな決断をして避難先で暮らすことになった。



<気持ちの変化と理由>

震災の時は落ち込んだが、甲信越地方に行って、今まで考えたことのなかったプラスのこともあり、生活しやすく、同じ思いの避難者と支え合って過ごせた。子どもも良い成長をしてくれた。避難できたのは、財産だと感じている。

福島に戻ってからは、本心からなんでも喋れるという付き合いはなかなかできない。避難していた、戻ってきたということも言いにくく、当たり障りのない会話をしている。本当は放射能のことを気にしたいけれどもそれができないもどかしさがある。今の方が気をつけなきゃいけないのに、前よりもそれができていない。ちょっと妥協して、仕方ないかと気持ちをごまかしてきた。

でも戻ってきて初めて、相談できる場所に行き、同じ思いの人もいることがわかって、ちょっとずつ変わってきた。全部話せる人が少しでもいればいいのかと思う。